神の母聖マリア(ルカ 2:16-21)

マリアは神の呼び掛けに答える姿の模範

新年、明けましておめでとうございます。年賀状を中田神父のために用意してくださったかたがたにも、この場を借りて新年のご挨拶とさせていただきたいと思います。さて信仰の面で今年は、神の声に耳を傾け、神の呼び掛けに返事をする年でありたいと思います。
長崎教区長の髙見三明大司教様は、毎年新年には年頭教書、御復活には復活教書を発表しておられますが、昨年と今年の年頭教書は、聖書に親しむよう、教区民の心に語り掛けるものでした。
特に今年は、昨年の「聖書を読んで神の言葉に親しもう」という年頭教書をさらに踏み込んで、「あなたの御言葉がわたしのものとなるために」という教書を発表しておられます。「神のことば」である聖書が、わたしたちの中で実を結び、呼び掛けに答えることが今年の目標です。
そこで、わたしたちは呼び掛けを聞いて、どのように行動に移っていくのか、順を追って考えたいと思います。まずは、神の呼び掛けに真剣に耳を傾けることです。いちばんお勧めしたいことは、聖書を朗読して、聖書のみことばに耳を傾けることです。
毎週の、聖書と典礼のプリントを持ち帰り、新約聖書の同じ場所をめくって、自分の声で読んでみましょう。自分の声で読むと、自分に向けて語り掛けている神のことばに、より耳を澄ませることができると思います。
今日１月１日、「神の母聖マリア」の祭日用の「聖書と典礼」を実際に使って練習しましょう。第２朗読、「使徒パウロのガラテヤの教会への手紙」を自分で読んでみます。すると、例として、いちばん最後の部分「ですから、あなたがたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです」（4・7）が心に響いたとしましょう。この心に響いた言葉を、繰り返し声に出したりしてみるわけです。
神の語り掛けに注意を向け、心に響く言葉にたどり着いたなら、次はその聖書の言葉から思い浮かぶものを並べてみます。あなたの目に留まったということは、何か訴えかけるものがあったはずです。小さなことでも構わないので、並べてみましょう。
先ほどの聖パウロの手紙であれば、「相続人」という言葉が興味を引いたのかも知れません。あなたは、神によって相続人に加えられています。いったいどんな物が相続の対象なのでしょうか。
均等に、相続できるのでしょうか。相続の権利は、消えたりしないのでしょうか。相続人であるのに、声をかけてもらえず、相続から外されることは絶対にないのでしょうか。こうしたことが、どんどん浮かぶことでしょう。
聖書のみことばに耳を澄ませ、ある聖書の箇所に目が留まり、繰り返し言い聞かせてみました。たくさんの気づきが生まれてきました。そこで最後に、わたしたちはどんな態度を取るべきか考えます。

先ほどの「相続人」ということで考えると、わたしたちから相続の権利を放棄するようなことはしてはいけません。特に、相続人と認めてもらったのに、相続人の立場を捨てて、奴隷に成り下がってはいけないのです。そして、相続人にふさわしいと思えるような態度を選ぶ必要があります。
こうした、聖書の中の神のことばが呼び掛けていることに、わたしたちがどんな態度を取るべきか考えて、それを実行する年に、今年を向けたいと思っています。難しいと感じるかも知れませんが、（１）目を留めた聖書の箇所が、（２）どんな呼び掛けをわたしたちに向けていて、（３）その呼び掛けにどう答えるか、この一連の流れは、中田神父が説教の中で６年間言い続けてきたことです。きっと実行できるようになります。
実は、今年取り組みたい目標が、マリアの中ですでに実現されています。マリアの模範を持ち帰り、今年一年の大きな道しるべとしたいと思います。マリアに関する次の箇所が、手掛かりとなります。「マリアはこれらすべての出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。」（2・10）「出来事」と日本語に訳されている言葉は、ギリシャ語の「レーマ」という言葉だそうです。「レーマ」をあえて生かして説明を続けると、羊飼いは「主が知らせてくださったそのレーマを見ようではないか」（2・15）と言ってベツレヘムに出かけました。人々は、「羊飼いたちの話を不思議に思った」（2・18）とあるのですが、この中に「レーマ」は抜け落ちています。ところがマリアは、「マリアは、これらのレーマすべてを心に留めて、思い巡らしていた」（2・19）とされています。
人々は、羊飼いが語ったはずの「レーマ」に目が留まらなかったので、呼び掛けに気付くことができず、呼び掛けに答えることができませんでした。しかしマリアは、羊飼いが語った「レーマすべて」に目を留め、その呼び掛けを読み取り、「思い巡らす」という態度で、呼び掛けに答えたのでした。
マリアの中にみごとに、（１）目を留め、（２）呼び掛けを読み取り、（３）呼び掛けに答えるという、わたしたちが今年目標とする姿が実現されています。しっかり、マリアのお手本を持ち帰りましょう。中田神父も、聖書を通して示される神の呼び掛けに皆さんがどう答えていけばよいのかに目が向くように、これまで以上に工夫をして今年１年説教を準備したいと思います。

主の公現（マタイ 2:1-12）

主の公現(マタイ 2:1-12)

あなたの贈り物は、あなた自身です

今日は、「主の公現」の祭日です。占星術の学者たちが幼子を見つけ、ひれ伏して幼子を拝み、贈り物をささげました。わたしたちも、学者たちの心がけを学んで、生活に取り入れることにしましょう。
王の誕生を知らせる星を見つけた占星術の学者たちは、エルサレムへ来てヘロデ王に挨拶をします。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」（2・2）
学者たちは、ヘロデ王が柔和で謙遜な王だと思っていたでしょうか。それはわかりませんが、学者たちの大胆な行動にまず驚きます。目の前にいるヘロデは、曲がりなりにも現在王である人物です。目の前の王に贈り物もしないで、新しい王の居場所を教えてもらおうとしているのです。ヘロデが残虐な性格の持ち主だと知っていたら、挨拶には行かなかったかも知れません。あるいは、ヘロデ王がお生まれになった幼子のことを知らなかったことで、これは大変な過ちを犯してしまったと感じたかも知れません。
いずれにしても、学者たちはヘロデのもとを去って、再び星の導きを受けます。この、占星術の学者たちを導いた星ですが、これは神の導きのしるしと考えるとよいと思います。星が現れて、こちらですよ、あちらですよと導いたと考えることもできますが、星は神の導きのしるしで、神が、最初から最後まで、ユダヤ人の王としてお生まれになった方のもとに、学者たちを導いたと考えるほうがすっきり説明できると思います。ですから学者たちは、神の導きを信頼して、お生まれになった王を探し、ついに探し当てました。「彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた」とあります。イエスは、王でありますから、黄金を献げます。
イエスは、祭司ですから、祭司が礼拝の務めで用いる薫り高い乳香を献げます。イエスはさらに預言者です。これまでのすべての預言者は、預言を受け入れない人々によって命を奪われて来ました。将来、埋葬されることになる預言者に、没薬を献げました。学者たちが献げた３つの贈り物は、このように説明が可能です。
わたしは今年、少し違った説明の仕方も示したいと思います。占星術の学者たちが献げた贈り物は、彼ら自身でもあったのではないでしょうか。学者たちは幼子を礼拝した後に、自分たちの国へ帰って行きました。学者たちのその後のことは何も語られていませんが、学者たちは、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」に自分のすべてを委ねて、それぞれのその後の生活を送ったのではないでしょうか。
ここに、わたしたちが今週注目すべき点があると思います。学者たちは、幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げました。そして自分たちの国へ帰って行きました。まず、この学者たちに注意深く目を注ぎます。

すると、学者たちが表そうとしている態度に気付きます。学者たちは、自分の持つ最高のものを贈り物として献げた、ということです。彼らが献げることのできる最高の物、それは自分自身です。黄金や乳香や没薬は、努力すればもう一度買い求めることができるでしょう。そうではなく、これらの贈り物で示そうとしたのは、幼子の前に、自分自身を献げようとする態度です。お金では買えない、自分自身のすべてを、お生まれになった救い主に委ねたのです。
では最後に、わたしたちは学者の態度を見て、どのように答えて生きてゆけばよいでしょうか。それは、わたしたちも、救い主である幼子に、自分自身を委ねて生きる決心をするということです。わたしの生き方はわたしが決める。それは立派なことですが、そこに、救い主イエスの導きを受け入れて生きる態度が必要です。
学者たちは自分たちの国に帰りました。二度と、ひれ伏して拝んだ幼子を見ることはないでしょう。けれども、学者たちはその後の人生を、幼子イエスに委ねて生きたに違いありません。
わたしたちにも同じことが求められています。わたしたちも、今日幼子を礼拝すれば、また自分たちの生活に帰っていきます。そこで、救い主イエスの導きを願いながら暮らすことを目指しましょう。何かを選ばなければならない。お生まれになった救い主に喜んでもらえる決断を選びましょう。
何かしら、声をかけて上げなければならない。その時、イエスに喜んでもらえるような言葉を選んで、必要としている人に声をかける。このような工夫を取り入れましょう。何かを買う時、誰かと込み入った話を付ける時、いろんな場面で導きを願いながら事を運んでいきましょう。
わたしたちが、今日幼子を礼拝しに来たのは、学者たちの態度を見倣うためです。学者たちは全財産とも言える黄金・乳香・没薬を幼子に献げて自分の国に帰りました。わたしはどうこれに答えるべきでしょうか。わたしたちも、イエスの前に自分自身を洗いざらい委ね、これからの生活で、あらゆる場面で、イエスの導きを受け入れることができるよう、恵みを願うことにしましょう。

主の洗礼（ルカ 3:15-16,21-22）

主の洗礼(ルカ 3:15-16,21-22)

天の父の心に適う生活を探し求める

主の洗礼の祭日を迎えました。今までずっとこの箇所を読んできたのでしょうに、今年になって初めて、気付いた点があります。ヨハネが民衆に語っている言葉です。
「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。」（3・16）
よく読み返すと、「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、（中略）その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」と言っています。同じ１人の人が、２回も洗礼を受けるものなのでしょうか。
洗礼者ヨハネは、自分の授ける洗礼と、「その方」と呼んでいるイエスによる洗礼とを、はっきり区別していたと思います。ヨハネが授ける洗礼は、徹底的な悔い改めのしるしで、道徳的な清さに人を招くものでした。水は、この世の物質であり、この水で人を変化させるのは、道徳的な部分に限られていたのです。ヨハネはそのことを十分理解していたはずです。
ところが、ヨハネが予告する「聖霊と火による洗礼」は、道徳的な悔い改めをもたらすものとはまったく次元の異なる何かを言い表そうとしていました。ヨハネ自身は、「聖霊と火による洗礼」を、「裁きをもらたす力をもった清め」と考えていたようですが（3・17 参照）、いずれにしても、イエスが授ける洗礼は、人をこの世の清さに結び付けるものではなく、神がもたらす清めに人を結び付けるものだと理解していたのです。
ヨハネは、イエスが授ける洗礼を、ヨハネ自身が授ける洗礼とはまったく違うものであると理解していました。同じ物の繰り返しであるなら、２度授ける必要はありませんし、２度授けるべきではないでしょう。
七つの秘跡のことを考えてみましょう。わたしたちは堅信を２度受けることはあり得ません。ところが、叙階は、助祭叙階を受けた人が司祭叙階を受けますし、神がお望みになれば、司祭叙階を受けた人が司教叙階を受けることもあるわけです。「叙階の秘跡」は、７つの秘跡の中のただ１つの秘跡ですが、司教叙階を受けた聖職者は、叙階の秘跡の充満の度合いが違うわけです。
「民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。」（3・21-22）イエスがヨハネから洗礼を受けた時、水で洗礼を受けたことでこの世と結び合わされました。
イエスが清めを受ける必要は一切ありませんでしたが、この世の一切のけがれに死んだのです。そして、「聖霊がイエスの上に降って来た」ことで、天の父と結ばれている姿も示しました。これからは、信じる人がイエスの授ける洗礼によって、イエスが受けた両方の姿、この世のけがれに死に、神のいのちに結ばれて生きることになります。

さて、祭壇脇には、皆さんが初めて実物を見る「イエスの洗礼」を表現した御像があります。「中田ザビエル工房」で制作してもらった御像です。昨年は、まだ着色しないままの段階での写真をお見せしたと思います。今年は、無事に完成し、皆さんにお披露目となりました。
この御像を見ながら、もう一度イエスの洗礼の意味合いを確認してください。イエスは、この世のけがれに死に、聖霊が注がれたことで天の父との固い絆を人々に示したのです。今週は、このイエスの洗礼の姿から、わたしたちの生き方の模範を学必要があると思います。
つまり、ヨハネが予告したように、水を使った洗礼を受けた人はこの世の清めに結ばれるけれども、聖霊と火による洗礼は、人を天上のものに結び付けるのです。イエスの中に、その両方の姿が示されました。
そして、わたしたちの生活にどのように結びつくのかを探ると、天から聞こえた声が、教えてくれると思います。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」（3・22）イエスの姿に、天の父の心に適う姿があるわけです。それは、この世のけがれに死に、神のいのちに生きることです。
もちろん、イエスの姿を完全に写し取ることはできません。そのようなことを天の父の声が命じているのでもないでしょう。それでも、わたしたちは繰り返し、天からの声を自分に言い聞かせることができます。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」
わたしたちの生活には、知りながら、自分の意志でおこなう決断があります。間違いもあるでしょう。けれども、繰り返し、天からの声を心に響かせて考えるわけです。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」わたしの決断は、この天からの声に沿うものだろうか。あえて、天からの声に背くようなことをしなかっただろうか。この点に注意を向けながら生活するなら、わたしたちはイエスと同じ姿を、人々に証しすることができると思います。
大きな証しでなくても構いません。よくわたしが例えに出す、食前食後の祈りでよいのです。食事の時に、人前であっても、祈りによって天に結ばれている姿を証しして欲しいのです。人前だから、祈りを隠す。それは、この世に縛られています。この世の誘惑、けがれに死ぬため、人前でも祈りをするのは立派な証しになると思います。
今週、イエスの洗礼の姿を通して、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という生き方があることを学びました。ぜひ、わたしの生活に、生かしましょう。
頭で分かっているだけでは足りません。だれかの生活に当てはまっているだけでも足りません。他の誰でもない、わたしの生活に当てはめていく。そのための力を、天の父に願いましょう。

年間第 2 主日（ヨハネ 2:1-11）

年間第２主日（ヨハネ 2:1-11）

イエスは最初のしるしで喜びを届ける

今週の福音朗読に選ばれた「カナでの婚礼」の物語は、朗読の最後にあるように、イエスにとっての「最初のしるし」となるものでした。イエスが公の面前で、最初におこなった奇跡です。わたしはこの、「最初におこなった」という点に注目して、今週の糧を探ってみたいと思います。
イエスにとって、最初に取りかかった事柄というものをいくつか指摘できます。まず、公の宣教活動に入るに当たって、第一声というものがあります。最近は長崎では県知事選も話題になっていますし、それぞれの候補が第一声をメディアに向かって発表しています。
そのように、イエスにとっても最初に何を仰るのかは注目してよいわけです。ちなみに、イエスの第一声と思われる言葉は、マルコ福音書によれば、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ１・15）というものです。心を神に向け直すことが、第一声の中で求められていると言ってよいでしょう。
では最初の活動はどんなものだったでしょう。それは、「弟子を選ぶ」ということでした。もちろんイエスは、荒れ野での四十日の試練を経ていますが（マタイ４・1-11）、それは最初の活動というよりも、活動に入る前の準備です。
ですから、最初の活動と言えるのは、やはり弟子をお選びになることでした。その意味では、どんな奇跡よりも、信頼できる弟子を選び、育てることが、イエスにとっては何より大切だったのだなぁと考えることができます。
もしかしたらそれは、わたしたちの教会活動にも通じるのかも知れません。つまり、華々しいわざを展開するよりも前に、教会に寛大に奉仕してくれる弟子を育てることが、何よりも大事なのかも知れません。
さて本題に入りますが、イエスの最初のしるしは、今日の出来事にある「カナでの婚礼で水をぶどう酒に変える奇跡」でした。この奇跡が、婚礼に招かれた人びとに伝えようとしていることが２つあると思います。１つは、ご自分が神であるということ、もう１つは、イエスが最初に取り組んだ奇跡は、「喜びを届ける」という奇跡だったということです。
それぞれについて押さえていきましょう。イエスは、水をぶどう酒に変えてくださいました。水は、どんなに手を加えてもぶどう酒になり得ません。ぶどう酒がなくなって、どうしても調達できなくなった場面で、ぶどう酒を与えることができるのは神だけなのです。この出来事を通して、神がここにおられること、神がともにいてくださる（インマヌエル）ことを、お示しになったのです。
もう１つの点は、イエスはこの「最初のしるし」を通して、「喜びを届ける方」であることを示します。イエスが水をぶどう酒に変えたことで、集まっていた人々の顔は喜びで満たされます。婚礼の世話役の言葉が、そのことを如実に物語っています。

（世話役は花婿を呼んで、言った）「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったころに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」（ヨハネ２・10）
もしかしたら、イエスの奇跡のことを、婚礼の客は気付いてなかったかも知れません。奇跡に気付かなかったとすれば、イエスが神であることに気付くチャンスも失ったのかも知れません。もし、奇跡を目撃しなかったとしても、奇跡の結果は残りました。すなわち、ぶどう酒は婚礼の客すべてが味わい、楽しんだのです。イエスが神であることには気付かなかったかも知れませんが、人々は喜びに満たされたのです。
この出来事から、今週の糧をわたしたち燃えることにしましょう。今年は、できるだけ同じことを繰り返して、説教を進めています。与えられた福音朗読から、もっとも心に響いたみことばをじっくり味わい、そのみことばがわたしたちに何を呼び掛けていて、それにどのように答えるのかを考える。この訓練を１年続けます。
今週の福音朗読にこの手順を当てはめてみましょう。中田神父は、水をぶどう酒に変えるイエスの奇跡が「最初のしるし」であることに目を留めました。そこからイエスが呼び掛けていることは、（1）ご自分がだれであるかを示すこと、（2）この奇跡は「喜びを届ける」ものであったということでした。
ここからわたしたちも考えましょう。わたしたちも、生活の中で２つの点を世に対して示すのです。その２つとは、（1）自分が何者であるか、そして（2）喜びを届けることが、わたしたちの「最初のしるし」なのだということです。
もう少し、説明が必要かも知れません。（1）の、自分が何者であるかということですが、わたしたちはイエスによって神の家族に加えられたものです。まずはこのことを証しします。家族ですから、家族のことを隠すべきではないのです。イエスによって救われた者として、顔を上げる必要があります。
そして、何よりも生活の中で「喜びを届ける者」となることが必要です。圧力を与えるのではありません。人を悲しませる者であってもいけません。何よりもまず、「喜びを届ける者」であるべきです。こうしてわたしたちは、イエスが婚礼の席で示した証しを受け継いで、現代にあって証しし続けます。
かつて、イエスがご自分が誰であるかを示し、何よりも喜びを届ける方であったように、わたしたちも同じ姿をたどることで、イエスの働きを今の世に示すのです。イエスは今も生きている。イエスは今も、わたしたちを通して世に働きかけている。そのことを、わたしたちの生きざまで示しましょう。
肉体労働をしている人も、机に向かって事務の仕事をしている人も、誰でもイエスのわざを今に引き継ぐことができます。イエスの存在を人々に感じさせる。その思いで、今週一週間を過ごすことにしましょう。

年間第３主日（ルカ 1:1-4;4:14-21）

“霊”の力に満ちて語り、行動する

今週与えられた福音朗読箇所は、ルカ福音書の２つの部分が組み合わされています。よく読むと分かるのですが、前半は、著者であるルカが、テオフィロという人物に向かって献呈のあいさつを述べている部分です。後半は、イエスがガリラヤで伝道を始め、ついでナザレに移動される様子が描かれています。イエスの活動の始まりの部分に、献呈の言葉がどうして組み合わされているのか。この部分については、また３年後に考えを巡らせることができればいいなぁと思います。
その部分は横に置きまして、ガリラヤで始まったイエスの活動のくだりに注目したいと思います。この部分、もう少し前後を広く見渡すと、「イエスは“霊”の力に満ちてガリラヤに帰られた」（4・14）とあるのですが、「どこから」帰ってきたのか、これだけでは分かりません。
せっかくなら、この点も朗読に含めてくれればいいのに、と思ったのです。イエスが「“霊”の力に満ちてガリラヤに帰られた」とありますが、その直前で､イエスは荒れ野での 40 日間の誘惑をことごとく退けてからガリラヤに帰られたのです。
イエスが“霊”の力に満ちておられるのは、この 40 日間の誘惑に打ち勝ったことを踏まえて考えるべきだと思います。イエスは耐えがたい試練に、完全に打ち勝ちました。「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」ときっぱり言い切る力にみなぎっています。力を蓄えたその姿が、ガリラヤに帰られたイエスにはあるわけです。
その、“霊”の力に満ちたイエスが、お育ちになったナザレにやって来ます。イエスはここでも、“霊”の力に満ち、その言葉には迷いがありません。のちに弟子たちに語る言葉ですが、「言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる」（12・12）そんな思いで「安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちに」（4・16）なります。
イエスは“霊”の力に満ちています。荒れ野での誘惑を打ち破って、心に曇りのない状態にあります。そんな中で預言者イザヤの巻物が渡され、目に留まった箇所を朗読しました。会堂で聖書を朗読する人は、その与えられた朗読箇所について何かを語ることが期待されています。そこでイエスは、迷うことなく、心にある思いを打ち明けるのです。「言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる。」（12・12）
そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」（4・21）と話し始めました。思ったことを、思った通りに話しました。ここで朗読に選ばれていない部分があります。イエスが「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」（4・21）と話し始められた時、会堂にいる人々がどんな反応を示したかが紹介されていないのです。
実際には、「この人はヨセフの子ではないか。」（4・22）という反応でした。つまり、イエスに拒絶反応を示したのです。「なんだこいつは。自分を何様だと思っているのか」という反応を示したのです。

ここで、１人の人の言葉を思い出します。幼子イエスの両親がイエスを神殿に献げに来た時に現れたシメオンです。彼は“霊”に導かれてマリアにこう言いました。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするためにと定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。――あなた自身も剣で心を刺し貫かれます――多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」（2・34-35）
こういうことです。人が、“霊”の力に満たされ、“霊”に導かれて語る時、そこには大きな摩擦が生じるということです。イエスがきっぱりと「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」（4・21）と話し始められた時、「この人はヨセフの子ではないか。」（4・22）という反応が返ってきました。非常に厳しい摩擦を生じました。それでも、イエスは語ることをためらわなかったのです。
ここでわたしたちの生活の糧を考えたいと思います。ある時わたしたちは、すべての人の目が注がれている中で、何かを語らなければならない時がやってきます。その時、「言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる。」（12・12）と信頼してよいのですが、言うべきことをためらってはいけないと思います。
ある場合には、「これを言ったら摩擦が生じるなぁ」と予見できることもあります。あるいは、「わたしがこういう場に立ってこんなことを言うのは、まったくふさわしくないなぁ」と感じることがあります。けれども、人が、“霊”の力に満たされ、“霊”に導かれて語る時は、口を閉ざしてはいけないのです。
例を挙げましょう。わたしたちは今、礼拝の場に集っています。この場所で当てはまる例として、聖書朗読と、共同祈願が考えられます。聖書朗読は、上手な人が読めばいいと、敬遠している人が多いのではないでしょうか。そうではなくて、聖書朗読は、人が、“霊”の力に満たされ、“霊”に導かれて語る時、それも、またとない時だと思うのです。
聖書を読む時、わたしたちは人間の力だけで読んでいるのではないのです。むしろ、“霊”に導かれて読んでいるのです。ですから、自分の能力に問いかけて、語るのをやめてはいけないと思います。
共同祈願もそうです。共同祈願は聖書朗読に比べるとずいぶん短い役割です。「聖書朗読はできないけれども、共同祈願だったらできる」と言う人がいるかも知れません。わたしは、聖書朗読も、共同祈願も、人が、“霊”の力に満たされ、“霊”に導かれて語るのであって、どちらも自分の能力で語っているのではないと思っています。
これまでの自分の心がけを振り返ってみましょう。わたしは、能力を信じて聖書朗読や共同祈願の務めを引き受けていたかも知れません。わたしの声の力で、わたしの読み聞かせる力で、聖書朗読や共同祈願をしないことです。これからは、“霊”の力に満たされ、“霊”に導かれて語るのだと考えましょう。
人が、“霊”の力に満たされ、“霊”に導かれて語る時、摩擦があるかも知れません。人の反感を買ったり、妬みを買ったりすることがあるかも知れません。それでも恐れないようにしましょう。あなたは“霊”の力に満たされ、“霊”に導かれて語りました。結果は、主にお任せしま

しょう。恐れずに、信頼して務めを果たす時、神のことばはより多くの人に届けられ、響き渡ることになります。

年間第 4 主日（ルカ 4:21-30）

年間第４主日（ルカ 4:21-30）

イエスの語り掛けをもう少し考えてみる

今週は、朗読箇所の「はっきり言っておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ」（4・24）という箇所から学びを得て、生活に活かす糧を持ち帰ることにしましょう。郷里の人々は、イエスにこんな言葉を投げかけました。「この人はヨセフの子ではないか。」（4・22）
郷里の人々は、イエスのことを十分理解しているつもりでした。父親が誰で、母親が誰であるか、もしかしたら親類の人がだれであるかについてまで、詳しく知っていたわけです。イエスが何かを語るなら、イエスを取り巻く環境に影響された言葉を語るだろう。そんな予測を立てています。
ところが、イエスは予想もしない言葉を口にしたのです。「はっきり言っておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。」予想の範囲を超えた言葉を口にしたので、郷里の人々は驚き怪しみ、理解できないだけでなくついには憤慨し始めます。もはや、郷里の人々の心は一歩も前に進むことはありません。冷静さを失ってしまい、考えることができないからです。
たしかにイエスの放った言葉は、郷里の人々には痛みを感じるほど強い言葉でした。ここで大切なことは、イエスがむやみにそんなきつい言葉を放つだろうかと、もう少しよく考える姿勢です。向けられた言葉を、もう少しよく考えてみる。そんなとらえ方が、必要でした。
イエスがきつい言葉を言うからには、それなりの理由があるはずです。優しく語り掛けることも知っている方が、あえて厳しい態度で臨むのですから、それは理由があってのことです。理由があるのだなと考えたなら、さらにもう少しその理由に迫ろうとしたことでしょう。ところが郷里の人々は、イエスの言葉を聞いた時、「何を一！」という反応を取ってしまったのです。
もう少しよく考えてみるというたとえになるかどうか、自信はありませんが、ついこの前 NHK のプロフェッショナルという番組で小野次郎さんという寿司職人が取り上げられていました。この人の並々ならぬ努力を、ちょっと話してみたいと思います。
銀座の一等地に店を構え、今や押しも押されもしない名人芸でお客さんを唸らせる寿司職人ですが、彼はもともと不器用な人だったらしく、人の何倍も寿司を握る努力をして、ようやく自分の境地を切り開いたのだそうです。不器用だったので、どうやったら人並みになれるのかを必死に考えて、彼独特の寿司の握り方「次郎握り」というものを編み出したと紹介していました。
もし彼が、修業時代に「君は才能がないから伸びないよ」と言われて「何を一！」と怒っていたら、もうそれ以上前に進むことはなかったでしょう。業界紙から三つ星の店と認められるような未来もなかったかも知れません。
この寿司職人が並の人物でなかったことは、修業時代に取った態度で分

かります。彼は自分の不器用さに「何をー！」と怒るのではなく、「何か、人並みになる方法があるはずだ」と、諦めなかったのです。
どんなに努力しても、親方が教えてくれる伝統的な握り方を習得できませんでした。それでも、「何か方法があるに違いない」と、必死に道を捜したのです。彼は「次郎握り」を考案し、親方が教えてくれた握り方ではありませんが、自分が納得できる寿司が出せるようになりました。
小野次郎さんは、現在 82 歳ですが、今も、「もっと上達する方法があるに違いない」と考え続けているそうです。この姿勢がなければ、今の年齢まで一流であり続けることはできなかったでしょう。番組を見ていて、すごいなぁと感心しました。
小野次郎さんを例に出したのは、もう少しよく考えれば、きっと道は開けるはずだということを知ってもらうためでした。イエスの郷里の人々も、イエスの言葉をもっとよく考えたら、道は開けたのだと思います。
「はっきり言っておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。」こう言われた時に、自分たちには何が足りないのだろうかと、真剣に考えたなら、違った道に導かれたのではないでしょうか。
そこで、わたしたちも当時のことを参考に自分の生活を見つめましょう。わたしたちが出会うさまざまな場面は、必ずしも人当たりの優しいものばかりではありません。どうしてこんな目に遭わなければならないのだろうかと感じることも多々あると思います。
わたしたちの予想もしない仕打ちを受ける時、「何をー！」と思ったら一歩も前に進みません。「これは何かあるに違いない」「もう少しよく考えれば、意味が分かるかも知れない」そう考える心の準備が必要です。
やみくもに、困難や試練が置かれているはずはない。あの人が、何も考えなしにあんなことを言うはずがない。きっと、何かを教えてくれているはずだ。そんな受け止め方をしつこく繰り返していけば、道は開けるのではないでしょうか。
「きっと何かあるに違いない。」同じ聖書の箇所を何度も与えられて説教をする司祭は、この気持ちがなければ一歩も前に進むことはできません。もっと違う何かを教えてくれているに違いない。何か、新しい気づきを見つけて、信徒に分かち合いたい。その一心で、司祭は聖書の与えられた朗読箇所に向き合っています。
お一人お一人にも、何か行き詰まっていることがあるかも知れません。投げ出したくなるような十字架を抱えているかも知れません。それでも、イエスがむやみに今の困難を目の前に置いているとは思えないのです。何か、イエスのわたしへの思いを知らせようとして、今があるのではないでしょうか。
「もう少し考えてみよう」「何か、考えさせているに違いない」そんな姿勢を保って、イエスに従って歩みましょう。「イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた」（4・30）とあります。立ち止まることなく、先へ進もうとされるイエスを見て、わたしたちも今日の一歩を進めることにしましょう。

年間第５主日（ルカ 5:1-11）

変えられないものを変えるイエスの言葉

先週月曜日から水曜日、司祭の研修会に参加してきました。人権問題を考える研修会で、まず司祭は、人権に配慮した働きが求められるということをこんこんと聞かされました。簡単に言えば、信者に対して「教会法のこんな教えも知らないのか」とか「聖書も知らないくせに口を出すな」みたいな指導の仕方はいけませんという勉強会です。
また、そんなに表立って問題にはなっていませんが、司祭のセクハラとか、パワハラとか、そういうことをも無関係ではないので、自分自身をよく振り返って、懸命に行動してくださいときつく諭されました。人権侵害をしていないかをチェックする質問票で○×を記していったら、わたしはほとんどの項目で、人権侵害をしているほうに当てはまっていまして、恥ずかしいことだなぁと反省しています。
今週の福音朗読に入りましょう。イエスが漁師を弟子にする場面が読まれました。この中でシモン・ペトロが、声をかけられた漁師たちの代表として、イエスと対話しています。今回取り上げたい箇所は、「わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」（5・5）この箇所です。
まずは､ペトロの言い分をじっくり考えてみましょう。「わたしたちは、夜通し苦労しました」と言っています。自分たちの専門分野で、あらゆる知恵を絞って努力をしたわけです。これ以上ないというくらい、努力をしました。それでも、何もとれませんでした。結果を受け入れて、次に期待するのが普通の判断です。
ところがイエスは、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」（5・4）と指示します。大自然が作り出した結果をひっくり返すほどでなければ、網を降ろしても意味がないはずです。それを承知で、イエスはペトロに声をかけたのでしょう。
ペトロも、イエスの指示を受け入れます。イエスの言葉は、大自然が突きつけた結果をひっくり返すだけの力を持っているかも知れない。ペトロにはそう思えたのでしょう。こう言っています。「しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」。イエスの言葉を信じて網を降ろすと、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになりました。
ここでペトロが考えたことを確認しましょう。大自然の厳しさを知っているペトロは、最善の努力をしても、魚がとれない日もあることを受け入れています。ですが、イエスが声をかけ、網を降ろすように指示した時、大自然の結果をも超える何かが体験できるのではないかと思い、イエスの言葉に従いました。
この出来事で、ペトロをはじめ、一緒にいた仲間たちはイエスに従うことにします。それも、すべてを捨ててイエスに従いました。この先、弟子たちはほうぼうの町や村に遣わされていきます。また、イエスの復活後は、死をも恐れずに福音を告げ知らせます。ペトロたちの知識や経験では、絶対に成功しない働きが、イエスの言葉を信じた彼らによって、

多くの実を結んだのです。
今日、午後から26聖人の殉教記念ミサが西坂公園で行われます。26人の殉教者たちも、人間的に見れば目を背けたくなるような残酷な刑に服し、成功を収めたとはとても言えませんでした。けれども、彼らの中で働いたイエスの霊が、大きな実を結んだのです。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」（ヨハネ12・24）
人間のあらゆる努力をつぎ込んでも、とても成功できるとは思えない。もし、この結果がひっくり返るとしたら、イエスの力としか考えられません。弟子たち、また命をかけて証しした殉教者たちは、このイエスの言葉の力を信じたのです。
ここまで、わたしたちが見てきたことは２つあります。人間のあらゆる努力を払っても、結果が期待できない時、そこにイエスの力がもっとも働きます。イエスは、大自然の厳しさをもひっくり返す言葉の力を持っています。また、宣教してもあまり信者が増えないのに、イエスの霊は宣教する人の中で特別に働き、「宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。」（一コリント１・21）
そこで、わたしたちも学びを得て、生活に当てはめたいと思います。ペトロが経験したように、イエスの言葉には、常識や、大自然の法則を超える大きな力が働きます。ですから、わたしたちは大胆に、「イエスの言葉だけが、常識を越える力を持っている」と信じましょう。
具体的に、考えます。「わたしについて来なさい」（マタイ４・19）とイエスは呼び掛けます。わたしはついていけませんと思う時があるかも知れません。これ以上忍耐したり、これ以上愛情をもって接してあげたりできません。そんないっぱいいっぱいの状態かも知れません。けれども、イエスの言葉はわたしたちの常識を覆します。もう忍耐できないと思ったこと、もうこれ以上愛情を示せないと思ったことを、「わたしについて来なさい」というイエスの言葉が、乗り越えさせてくれます。
「あなたがたに平和があるように」（ヨハネ20・19）とイエスは呼び掛けます。人間がいくら努力しても平和はやって来ないように思えます。でもその中で、イエスの言葉が大きく働き、不可能と思える平和をもたらすのです。
今週、わたしたちもイエスの言葉の力に信頼して歩みましょう。目の前に、がっくり肩を落としてしまうような現実があるかも知れません。イエスの言葉だけが、そのつらい現実を乗り越える力となってくれます。乗り越える力、現実をひっくり返し、希望をもたらす力は、イエスから来る。今週の福音から吸収して、生活に活かすことにしましょう。

年間第６主日（ルカ 6:17,20-26）

年間第６主日（ルカ 6:17,20-26）

この世の価値ではかれない真実がある

今週の福音朗読箇所は、皆さんもよく耳にして覚えている「幸いと不幸」についての教えです。マタイ福音書も幸いについての８つの教えを、イエスが山で語ったと記録しています。今年は、ルカ福音書を中心に日曜日は回っていきますので、ルカ福音書に沿って、考えてみましょう。
まず、根本的なことですが、イエスが語る幸いは、神の国で通用する幸いのことを言います。「人にばれなければ何をしてもいい」とか、「人に迷惑が掛からなければ何をしても自由だ」とか、この世の価値に基づいた幸いは前置きされていません。この点は間違いの無いようにしたいと思います。
その上で、与えられた福音朗読に目を向けてみましょう。イエスは神の国でも通用する幸いとして、「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。」（6・20）またこれに続くことを語りました。このイエスの語る幸いは、もしかしたらこの世では通用しないかも知れないけれども、神の国では通用する。そんな理解の仕方で向き合ってみる必要があります。
「貧しい人々は、幸いである。」これはこの世の価値ではかると、まったく通用しない考え方だと思います。「人が羨むような生き方」という意味では、「貧しい人々の生活」にはまったく魅力がありません。けれども、この生き方が、神の国では魅力的な生き方につながっていく。この点をわたしたちが知った時、イエスの言う「貧しい人々は、幸いである。」この言葉の意味が分かるのです。
「貧しさ」から解放されるには、２通りの考え方があると思います。仕事を見つけ、給料をもらって、住む場所を用意し、食べたい物を食べ、したいことをする。これも、貧しさから解放される１つの方法でしょう。ところが、この方法には欠点があります。仕事を失った途端に、貧しさから抜け出せなくなってしまうのです。給料をもらうことも、住む場所を見つけることも、食べたい物を食べ、したいことをするのも、かなわなくなります。いつ今の生活を奪われるか分からないという不安がいつもつきまといます。
貧しさから解放されるもう１つの道があります。仕事を失い、給料を失っても、わたしのよりどころは神である。その信念を決して失わないという道です。収入があるか無いかで、よりどころが変わるのは、神以外の何かを最後のよりどころにしているからです。
収入があってもなくても、神が自分のよりどころである。人間的なものをはぎ取られてしまった時にこそ、神をよりどころにしている人は幸いです。ここに、イエスが言う「貧しい人々は、幸いである。」この本来の意味があるわけです。
同じことは、他の呼び掛けにも当てはまります。「今飢えている人々は、幸いである。あなたがたは満たされる。」（6・21）もし、食べ物が最後のよりどころだったとしたら、飢えに苦しむ人々は決して幸いにはな

れません。それなのに、イエスは「幸いである」と言っています。
飢えに苦しむ時も、最後のよりどころは神であるという変わらない信念が、その人を幸せにするのです。食べ物の飢えだけではありません。ある人は親の愛情を受けられずに育ち、両親への愛に飢えています。愛に飢えている子供が、両親の愛を最後まで受けられなかったらどうなるのでしょうか。両親の愛に変わるものを、必死に求めるのではないでしょうか。
神の愛ではなく、この世の何かで代わりに満たそうとするなら、ある人は満たされずに生涯苦しむかも知れません。神の愛だけが、変わらない愛の泉です。ある人々は、神の愛に気づき、満たされます。
結局、この世の価値ではかると、とても幸せにたどり着けそうにない人々のことが、イエスによって幸いであると言われています。ではなぜ幸いなのか、ほかに考えられることは、イエスが取り上げた人々は、人間による解決に頼らずに、神による解放と救いを信じて待った人々だということでしょう。
神による解放と救いを待つことのできる人々、その人々こそが「幸い」なのです。貧しくならなければ幸いになれないとか、飢えに苦しまなければ幸いになれないと言っているわけではありません。
「今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる。」（6・21）重い病を得て、泣いている人々がいるかも知れません。この世の価値ではかれば、とても幸せな人々とは呼べないでしょう。けれども、病を得たことで初めて、神による解放と救いを信じて待つことも考えられます。
この世に解決を求めずに、神に解放と救いを求めることを知ったとしたら、その人は笑うことができるのではないでしょうか。決して笑うような状況にない人が、神に解放を願った時、笑うことができるようになります。
最後に、今日の福音朗読からわたしたちも糧を探しましょう。イエスは、この世の価値ではかるなら、とても幸せになれそうにない人々を、幸いだと呼びました。この世の価値ではかれない人々は、神の国の価値で解放と救いを求めるまたとないチャンスが近くまで来ているのです。それはわたしかも知れません。
あなたの生活は、すべてがこの世の価値ではかりつくされた生活でしょうか。生活の中に、この世の価値ではかれない部分を抱えている人、その人はきっと、イエスの招きを自分のものとしていくチャンスが近づいています。
この世の価値を絶対と思わず、イエスが示す価値に目を開くことができるよう、ミサの中で照らしを願い求めましょう。

四旬節第１主日（ルカ 4:1-13）

四旬節第１主日（ルカ 4:1-13）

聖霊の守りはわたしたちを離れない

四旬節に入りました。イエスの御受難と御死去、御復活をより深く黙想するために、この四旬節を大切に過ごしていきたいと思います。四旬節第１主日は、イエスが荒れ野で誘惑を受ける場面が朗読されます。四旬節の入り方は、毎年同じですから、意識して、覚えておくとよいと思います。今年の四旬節で、１つ覚えるとしたら、今週指摘した「四旬節第１主日は、イエスの荒れ野での誘惑が朗読される」ということです。

１つ学んだので、今年の四旬節第１主日はもうこれで説教終わってもいいかなぁと思ったりもしますが、学んだことをより確実に定着させるために、この誘惑を受ける場面で、見落としそうな点を指摘して、いっしょに考えることにしましょう。それは、朗読の始まりの部分です。「イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、そして、荒れ野の中を“霊”によって引き回され、四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。」（4・1-2）

「イエスは聖霊に満ちて」とあります。誘惑を受ける四十日間、イエスは聖霊に満ちた状態にあったことが伺えます。危険な誘惑を受ける時に、危険な状態で誘惑を受ければ、人間はひとたまりもありません。イエスもまた、人として誘惑にさらされましたが、聖霊に満ちて、いわば聖霊に守られて、神への信頼を守り通したのです。

ここで荒れ野での誘惑が「四十日間」だったことも、合わせて考えておきましょう。聞いた覚えたあるかも知れません。四十という数字は、聖書の中では意味を持っている数字です。つまり、イスラエルの民がエジプトを出て、砂漠を四十年間さまよったことが、暗示されているのです。四十年、砂漠をさまよっている間、イスラエルの民は神への信頼を取り戻す試練を受けたのでした。

当時の人々にとっては、40 年というのはその人の一生涯の長さに当たる時間だったことでしょう。生涯を掛けて、神への信頼を取り戻す試練を受け、その試練をくぐって、神に信頼する民に生まれ変わる。イスラエルの民は、荒れ野でその経験を積んだのでした。

わたしたち現代人の寿命は、40 年をはるかに超えて、80 年でもまだ足りないくらいに伸びています。それでも、象徴としての意味合いは、失われていないと思います。わたしたちは、それぞれの人生をかけて、神への信頼を取り戻す試練を受け、試練に耐え抜いた人、試練を経て清められた人だけが、神の招きにあずかるわけです。

もう一度、イエスの荒れ野での誘惑を思い出しましょう。イエスは、誘惑を受ける四十日の間、聖霊に満たされて誘惑の試練と向き合っていました。聖霊の守りが、神への信頼を保たせてくれたのでした。この形はそのまま、わたしたちの誘惑との戦いにも当てはまるのではないでしょうか。

そこで今週の糧を、イエスの荒れ野での誘惑から得たいと思います。

イエスは、さまざまな誘惑を受けました。イエスが聖霊に満たされない状態で、誘惑にさらされていたとしたら、誘惑する者がイエスを圧倒する場面もあったかもしれません。けれども、聖霊に満たされて試練の四十日間を過ごしたので、イエスは誘惑をことごとくはねのけることができたのでした。
わたしたちも同じことが言えると思います。イエスが受けた四十日間の試練は、いわばわたしたちの人生のすべての時間です。この人生全体の中で、わたしたちはさまざまな試練、誘惑にあうわけです。こうした場面に、わたしたちが神への信頼を保ち続けるためには、やはり聖霊に満たされていなければ不可能なのだと思います。
もっと言うと、誘惑を強く感じ、打ちのめされそうになったなら、その時に思い出して欲しいのです。わたしたちは、危険な状態のまま、誘惑にさらされたりするのだろうか。いやむしろ、どんな誘惑の時にでも、聖霊に満たされてわたしたちは誘惑をはね返す状態に置かれているのではないか。わたしはそう思ったのです。
それでも、誘惑に負けてしまった、誘惑に飲み込まれてしまった、そう感じる時があるかも知れません。ただそれは、聖霊の守りがなかったのではなくて、聖霊に満たされていたのですが、聖霊の守りを信頼できなかったことに問題があるのだと思います。
イエスは、ご自分が体験した四十日間の誘惑を通して、わたしたちもまた聖霊に満たされてある時誘惑に投げ込まれるのだと教えようとしているのだと思います。あとは、イエスが身をもって教えようとしていることを信頼できるかどうかです。危険なままに、神が自分の命を与え、子供としてくださったわたしたちを誘惑に投げ込むだろうか。そんなはずはない。ぜひ信頼を寄せて、この生涯にわたる誘惑の多い人生を歩き抜く。そんな決意を新たにしたいと思います。
最後に、今年は洗礼を受ける準備をしている大人の方がいらっしゃいます。本人たちと相談した結果、聖木曜日の日中に洗礼式を行うことにしていますが、まだまだ先の長い人生を、イエスに信頼を寄せて生きようと決心して洗礼への準備を進めている人がいることも、合わせて心に留めておきましょう。
わたしたちは、だれもが、聖霊に満たされて人生を歩み、試練、誘惑に際しても決して神の守りは離れないのです。イエスが、そのことを身をもって証明してくださいました。わたしたちも、もう一度自分を振り返る機会にしましょう。誘惑に際して、神が自分を見捨てたのだと希望を失わないようにしましょう。
最後まで、聖霊の守りがある。わたしたちの生涯を掛けて、人々に証しすることにいたしましょう。

四旬節第 2 主日（ルカ 9:28b-36）

四旬節第２主日（ルカ 9:28b-36）

人間の働きの中に神の隠れた計画を見る

最近のケータイは、とんでもなく進化しています。ケータイに、テレビの機能が付いているのですから、時代も変わったなぁと思います。ケータイと言えば、この前ケータイを買い直したというお父さんに会いました。海でケータイを落としたそうです。そのお父さんに、「海ならまだましだよ」と言って、わたしの恥ずかしい話を打ち明けました。
以前わたしは、トイレの中にケータイを落としたことがあるのです。よっこらしょと座った時にですね、長袖シャツの胸ポケットから、スルッとケータイが滑り落ちたんです。あっと思って手を出したのですが、残念ながら中にポチャンと落ちてしまいました。お店に交換に行った時に、どこで落としたのですかと聞かれて、洗面台で落としましたと嘘を言いました。言えませんよね。
さてケータイの話の終わりに、皆さんの中にはメールを使っておられる人もいらっしゃることでしょう。もし、メールを使っておられて、5000文字まで受け取ることができるのでしたら、ぜひ中田神父の説教を毎週受け取って、文字を読みながらじっくり説教を味わっていただきたいと思います。
後ろに、メモ用紙を置いていますので、読んでみたいなぁと思う人は、ぜひケータイのアドレスを書き込んで中田神父に預けてください。メモを渡してもらえれば、来週の分から、さっそくケータイに中田神父の説教をお届けします。
皆さんの励みになるかどうか分かりませんが、あの賄いさんも、ケータイで中田神父の説教を受け取って先週から読み始めているんですよ。あの賄いさんも、といったのはいろんな意味があるのですが、ここでは割愛しましょう。
では福音の分かち合いに入りましょう。ペトロ、ヨハネ、およびヤコブが、イエスの変容の出来事に立ち会うことになりました。「イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた」（9・29）とあります。目に見える形で、弟子たちはイエスの栄光に触れたのです。
実は、今日の出来事、イエスの姿が変わる出来事は、ある重い出来事にはさまれた形で置かれています。今日の朗読箇所の前後は、イエスが弟子たちに、ご自分の死と復活を予告する場面になっています。
イエスがご自分の死と復活について語る時、弟子たちが「イエスの死」について恐れを感じ、悲しみに沈むということは十分に考えられることです。それは、弟子たちが「イエスの復活」について理解し、喜びに満ちあふれることを想像するよりも易しいことです。
つまり、３人の弟子たちは悲しみを引きずったまま、イエスとともに山に登り、光り輝く姿を目撃した可能性が高いわけです。もしそうだとしたら、弟子たちがイエスの栄光ある姿にしがみつこうとするのも無理はありません。
「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋

を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」（9・33）
ペトロは、モーセとエリヤ、それにイエスをとどめておくことで、イエスが苦しみを受けて死ななければならないという悲しみから逃れることができると思ったのかも知れません。また、人々にもイエスは本来はこんなに栄光に輝くお方で、わたしたちがこの方を信じたことも間違っていないのだと知らせるまたとない機会だと思ったのでしょう。ペトロには、この考えはとても良い考えに思えたかも知れません。けれども、父なる神は、御子イエスを通して、別の答えを示します。「ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。すると、『これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け』と言う声が雲の中から聞こえた。」（9･34-35）
この声は、何を意味しているのでしょうか。いろんなことが考えられるでしょうが、わたしは、「これに聞け」という呼び掛けが、ここでは強調されているのだと思います。
「聞け」「聞きなさい」。わたしたちが、人からこう言われた時、どんなことを考えるでしょうか。「人の話を聞け」「よく聞け」。おそらく、「聞け」と言っている中に、「聞いて理解し、従いなさい」ということが含まれているのではないでしょうか。
「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」という声がしたのですから、父なる神は、弟子たちが御子イエスに聞き従うことを求めているということになります。ペトロは、どちらかというと、自分の考えをイエスに受け入れてもらおうとしています。ペトロが、イエスに「聞け」と言っているのです。
これは取るべき態度と正反対です。弟子たちが、イエスに聞き従う必要があるのです。イエスが弟子を前にしてご自分に従うように求めた場面は２つの場面に限られます。復活後に、ペトロに「わたしに従いなさい」と言った場面と、死と復活を予告する時の「自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と言った場面です。
ということは、弟子たちがイエスに聞き従う道は、「十字架を背負って、イエスに従う」この道しかないのです。イエスが予告された死と復活は、避けて通ることができない。たとえ栄光に輝く姿を目の当たりにしたとしても、弟子たちは最後まで、イエスに聞き従う必要があるのです。
わたしたちも学びを得ましょう。父なる神は、御子イエスを示しながら、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と呼び掛けました。この呼び掛けは弟子たちに限らず、わたしたちにも向けられています。
「どこからどう考えても、これが筋道として正しいのではないか」「客観的に見て、わたしが要求されている選択肢は間違いで、わたしの意見のほうが正しいのではないか」わたしたちが、相手に対して「聞け」と言いたくなる場面はいくらでもあります。けれども、首をかしげたくなることの中に、実は見えない神の計画が秘められているのです。神の見えない計画、崇高で奥深い計画が、だれが見ても納得できる人間の働きの中に示されるなら、誰でも喜んで聞き従うでしょう。聞き

従わない人は誰もいません。そうでないことがあまりにも多いのが世の中です。
神の見えない計画は、たいていの場合隠れているのです。それも、なぜこんなことを求めるのだろうかという人間の活動の中に隠れています。ここに、わたしたちが「十字架を背負って、イエスに従う」理由があるわけです。
十字架を背負わないでイエスに従う道はどこにもありません。イエスが示した道の中で、聞き従う信仰生活を完成させる。そのための恵みを、ミサの中で願いましょう。

四旬節第 3 主日(ルカ 13:1-9)

四旬節第３主日（ルカ 13:1-9）

すべての人に「悔い改め」が求められている

長く信仰を保ち続けるということは、それなりの意味があるのだと思います。ある通夜の席で、「苦しみ」について思う所を素直に話したことがあります。その時、喪主を務めたご主人が、「妻は苦しい思いをして亡くなって、どうしてこんな思いをしなければならなかったのだろうかと思い悩みましたが、今日、神父さまの説教を聞いて、苦しみの意味が分かりました」と、参列者に話したのです。
まだ 30 歳にもならないわたしが、苦しみの意味を説き明かしたりできるはずがありません。むしろ、わたしが通夜で話したことを通して、神さまが奥さんを亡くされたご主人に、苦しみの意味を教えてくださったのだと思います。それは、長く奥さんと信仰を共にして連れ添ったことへの報いだったのかも知れません。
今週の福音朗読で、わたしにも長い時間かかっての発見がありました。３月 12 日にはわたしも 44 歳になりますが、ここまで信仰を保ってきて、与えられた朗読箇所の中に、ようやく見えてきたことがあります。それは「悔い改める」という言葉の意味です。
今週の福音朗読は前半と後半とに大きく分かれます。前半で、ピラトに殺害されたガリラヤ人たちが、ほかのガリラヤ人よりも罪深い者だったと言えるだろうかとイエスは問いかけます。同じように、シロアムの塔が倒れて死んだあの 18 人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと言えるだろうかと問うています。
イエスの問いかけは、意味を考える必要があります。イエスはただ問いかけているのではありません。あなたたちは、「自分たちは殺害されたり事故の巻き添えになったりする運命にあるような人間ではない」、もっと言うと、「悔い改めの必要な人間ではない」と、思い違いをしているのではないか、とイエスは人々に言いたいのです。
イエスは、「言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」（13・3，13・5）と告げて、悔い改めの必要のない人間などどこにもいないと言い切ります。すべての人に、悔い改めの必要があるのです。
すべての人が悔い改める必要があることを、前半部分で考えさせました。悔い改めの必要が理解できたところで、「では悔い改めとはどういう態度を指すのか」を後半の部分で教えようとします。
「罪がある人が、罪を認めて立ち帰る」この姿勢を、イエスは「悔い改め」として示しているのでしょうか。後半の朗読をもう一度読み直してみましょう。いちじくの木が、実を付けないことを、ぶどう園の主人は不満に思っています。どうして実を付けないのに、切り倒さないのか。ぶどう園の主人が言っていることももっともです。
ぶどう園の主人の要求は、はっきりしています。自分は、どんな果樹からも、実りを求めるということです。ある果樹にだけ、実を付けることを要求しているのではなくて、すべての果樹に、結果を求めるの

です。
同じことを「悔い改め」に当てはめてみましょう。悔い改めは、ある限られた人に要求されているのでしょうか。今週のたとえからすると、すべての人に「悔い改め」は要求されています。そうであれば、「悔い改め」とは、罪を自覚している人だけのものではないということです。イエスが教えようとする「悔い改め」は、すべての人に要求されている態度なのです。
すると、わたしたちが考えがちな、「罪があるから、悔い改める」という理解では、イエスの問いかけの答えにはなっていないことになります。イエスの言う「悔い改め」とは、どんな態度を指すのでしょうか。
ここで、去年の黙想会のことを思い出してみましょう。聖パウロの回心というのが黙想会のテーマでした。聖パウロは、罪深い生活から回心したのではありませんでした。誰よりも、律法に忠実な生き方をしている中で、生き方を改めるように呼び掛けられたのです。抜きん出て、正しいことを実践していた最中に、です。
イエスが求める「悔い改め」も、このパウロの体験をもとに考えるべきです。人間的に見て、正しい生き方をしている人はたくさんいるでしょう。自慢まではしなくても、自分の生き方に満足できている人はたくさんいると思います。
それでも、イエスはすべての人に「悔い改め」を求めるのです。それはすなわち、「神に照らしを求めて生きる」この生き方に変わっていくことです。イエスの言う「悔い改め」とは、「正しく生きる」こと以上に、「神により頼んで生きる」そういう人に根本から変わることを指しているのです。
ここまで考えると、人間はすべて、「悔い改め」が求められていることが分かります。わたしたちは、この社会を生きていく中で、「自分で努力して自分を守る」「自分のことは自分でする」そんな生き方に完全に支配されて生きています。また自分の努力が、道を切り開いてきたことも確かです。
それでも、イエスはわたしたちに、「神に照らしを願いながら生きる人に変わりなさい」と求めるのです。どんなにうまくいっている人にも、中心に神の照らし、導きを置く人に変わることを求めているのです。
このような「悔い改め」が、今週わたしたちに求められています。「まだまだ、神さまに助けてもらう必要は感じない」。教会との関わりを面倒だと思う人は、態度で、「わたしは悔い改めません」と言っているようなものです。
態度を改めない人には何が待っているのでしょうか。「もしそれでもだめなら、切り倒してください。」（13・9）これが「悔い改めの実を結ばない人」の末路です。とてつもなく寛大な主人と園丁ですが、それでも、最後の最後「切り倒そう」と決断する権限を持っているのです。
わたしたちの学びを得ましょう。「言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」。これは罪人からの立ち帰りだ

けを言っているのではありません。わたしが、神への信頼を中心に据えて生きるように生まれ変わること。これがイエスの求める「悔い改め」です。
イエスの求める「悔い改め」が見えてくれば、出会う人との接し方も変わってくるのではないでしょうか。自分を中心に据えて生きている人が、いかに多いことでしょう。親しい友人にも、「自分がいちばん大事」と信じて疑わない人ばかりです。そんな、たくさんの友人に、「神が、生きる中心になるべきです」と、あなたは語り掛けなければなりません。その心の準備はできているでしょうか。
すべての人に、「悔い改め」が必要です。神を中心に据えて生きる「生き方の大転換」が必要です。この「悔い改め」の必要性に目覚め、自信を持って同じ生き方を証しできる人に生まれ変われるように、ミサの中で恵みを願いましょう。

四旬節第 4 主日(ルカ 15:1-3,11-32)

四旬節第４主日（ルカ 15:1-3,11-32）

御父のあふれる愛を学ぼう

説教に先立って、皆さんに報告しなければならないことがあります。わたしは２月 14 日付で転任の辞令を受けまして、上五島の浜串教会に転任することとなりました。4 月 18 日までには新しい任地に着任しなければなりません。後任の神父さまと相談し、４月 16 日（金）に、いっせいに入れ替わることを申し合わせています。

それに伴い、引越しの準備とか、出発の日にスムーズに入れ替わるためにどうすればよいかとか、いろいろ助けてもらいたいと思っております。最後まで、ぜひご協力をお願いいたします。まだちょっと早いですが、行き先の浜串小教区の住所、連絡先を書いたメモを置いています。参考にしてください。

それから、後任の神父さまですが、わたしが名前まで言って良いものか、転任の辞令を読んだだけでは判断できません。ただ、わたしの後輩で、わたしがこちらに着任した時と同じ年齢の神父さまであると、そこまでは言っておきます。

浜串教会と言っても予備知識はないでしょう。隣の小教区はわたしの出身鯛ノ浦小教区です。鯛ノ浦の実家から、車で 30 分くらいだと思います。九州商船のフェリー、ジェットフォイルの着く奈良尾港からは、車で 20 分くらいです。

どんなつもりで故郷の隣の小教区に転任なのか計りかねますが、行きませんとは言えないので、腹を決めて残りの期間の務めを精一杯果たした

いと思います。まだ時間はいくらか残されていますが、４月以降の日程でいろいろ相談してくださった人に、「うーん、それはちょっとー」と言ってはぐらかしていたのは、喉まで出かかっていたのですが、今日まで公表できなかったためでした。申し訳ありません。

では福音の分かち合いに入りましょう。今週の福音朗読は、おそらく福音書のたとえ話の中で、いちばん親しみを持っているのではないでしょうか。弟は、財産を無駄遣いしてしまい、そのことがきっかけで父の家に帰ります。父にゆるしを願おうとすると、父親が先にゆるしを与えました。

兄は、父の寛大さをどうしても受け入れることができません。受け入れられない口実として、「友達と宴会をするために、子山羊１匹すらくれなかったではありませんか」（15・29）と言っています。ただ、宴会のために子山羊が必要であれば、兄子山羊１匹くらいは自分で用意できただろうにと思います。ですから、単なる文句を言う口実だったかもしれません。

さて、この物語に、味を付けている人物は誰だろうかとわたしは考えます。寛大な父親が、物語を面白くしてくれているのでしょうか。あるいはやっかいな弟が、物語のアクセントになっているのでしょうか。わたしはむしろ、兄の存在が、この物語の重要な鍵を握っているのではないかなと思います。

つまり、兄が、どういう態度に出るのかで、この物語の形が決まってくるのではないかと思うのです。もし、兄が「そうか。それは良かった。

弟が無事に帰ってくるなんて、こんなに嬉しいことはない」と答えていたら、物語は何かを考えさせるたとえ話にはなっていなかったでしょう。実際には、たとえ話にあるように、弟のしでかしたことがゆるせない、また父親の寛大さにも納得いかない、そういう態度だったので、何かを考えさせる物語に仕上がったのだと思います。兄が、この物語から学びを得る鍵だと、わたしは思いました。

まずは、兄と弟が、父親のことをどのように思っているか、この点から出発したいと思います。弟が、我に返って次のように言ってます。「父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。」（15・17）弟は、父親が大勢の雇い人に、寛大に振る舞っている様子を思い出しました。父親の懐の深さ、寛大さを今さらのように尊敬します。

一方兄からは、父親の懐の深さ、寛大さにつながるような言葉は見られません。「このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。」（15・29）これは、「わたしには責められる非は全くない」という言い方ですが、父親への尊敬の念は感じられません。

兄と弟、この２人の違いは何だろうと考えたとき、わたしは、父親の愛を「あふれるほどの愛」と受け取ったか、そう取らなかったかの違いではないかと思いました。弟は、雇い人にも、おなか一杯食べさせてくれている、そんな父親にあふれるほどの愛を感じました。

兄は、弟をゆるす父親の中に、あふれるほどの愛を見ることができなか

ったのだと思います。父親を理解できなかった兄の愛をたとえて言えば、それは「すりきり一杯の愛」です。父親に返す愛として、不足ではありませんが、あふれてはいません。そんな愛しか父親に返せなかったので、弟を見る目も、「すりきり一杯の愛」でしか量れなかったのだと思います。

弟は、もちろん立ち返りが遅かったわけですが、兄には見えなくなっていた父親のあふれるほどの愛に気づいています。自分も、これまであふれるほどの愛で育てられたに違いない。どうしてこんなことをしてしまったのだろう。今からでも、父親が示してくれたあふれるほどの愛を見習って、生きていくことにしよう。これが、弟の立ち返ったいちばんのポイントだと思います。

父親のあふれるほどの愛を理解した弟は、自分が雇い人の１人として扱われても構わないとまで考えます。父親の深い愛を、今は理解しているからです。自分がどんな身分であっても、父親の愛を失うことはないと、理解しているからです。それはまるで、一度死にかけた人が、命を取り戻したあと、もはや恐れるものはないと感じているようなものです。自分が実の子どもという身分を失っても、愛を失わないと知っているので、恐れるものがないのです。

兄はまだ、弟のこうした心の成長を理解していません。まだ、父親のあふれる愛を理解し、自分も父親に倣おうという気持ちになれません。兄に今、答えが求められているのは、「あなたは、父親のあふれる愛を理解し、自分も父親に見習って、あふれる愛を人に示す人になってくれま

すか？」という問いです。

今週のわたしたちの学びも、兄への問いかけからです。「あなたは、父なる神のあふれる愛を理解し、自分も父なる神に見習って、あふれる愛を人に示す人になってくれますか？」すりきり一杯の愛で量ろうと思えば、自分たちの周りには不足とみなされる人もいるかもしれません。その人を理解しようというとき、わたしのほうがあふれる愛で量り返す必要があります。

また、すでにあふれる愛を学んで生きている人を、そんな生き方は認めたくないと拒否すべきではありません。すでに、あふれる愛に生きている人には、わたしも共に喜び合うのです。こうしてわたしたちは、父なる神に倣って生きる人になるのです。先週の説教と重ね合わせて考えると、このような生き方を選び取って初めて、わたしたちは回心を遂げるのです。

わたしたちには、いつも置かれた場所で、あふれる愛を学ぶ機会が与えられています。わたしのこれまでの６年間の生活もそうでしたし、これからもそうです。今ここで、今このときが、父なる神のあふれる愛を学ぶ場です。生活に信仰を根付かせていくために、ミサの中で恵みを願うことにしましょう。

四旬節第５主日（ヨハネ 8:1-11）

四旬節第５主日（ヨハネ 8:1-11）

どうやったら「罪に定めない」共同体になれるか

何の言い訳にもなりませんが、一昨日金曜日は純心高校２年生の黙想会指導をしてきて、「はぁ疲れた、今日は説教考えるのやめとこうかな」という誘惑に負けまして、金曜日は説教が進みませんでした。
そこで土曜日、昨日はどうかというと、朝になってから午前中に教区の本部事務局会議が入っていたことを思い出し、慌てて朝８時 15 分の船に乗ってカトリックセンターに向かいました。午後からは、今度は「よきおとずれ」の２度目の校正作業でして、司祭館に帰ってきたのが夜の６時半でした。
うーん、ご飯食べてから何とか書くぞと思いつつ、うたた寝をしてしまったらしくて、目が覚めたら深夜の１時になっていました。ひさしぶりに、深夜から原稿を書き始めて今朝を迎えています。
これもついでのついでなので話しますが、「よきおとずれ」の編集長としての責任は４月号まででした。どういうことかと言いますと、４月号までは発行人もわたしの名前、「ほしかげ」のコーナーもわたしが書いた内容でしたが、５月号からは発行人の名前が後任の下窄神父さまに代わり、「ほしかげ」も新しい編集長が書き始めるということです。
実はそのことをはっきりわたしは理解してませんで、ぼんやりと５月号まではわたしの責任分担なのかなと思っておりました。そのつもりで「ほしかげ」も少し余裕残しで書いたわけです。
つまり５月号できっちりあいさつしてさようならするつもりだったのですが、どうやらそれはわたしの勘違いだったらしく、ちょっと未練が残る交代劇となってしまいました。そういうことですから、４月号「よきおとずれ」の「ほしかげ」のコーナーは、最後の原稿と思って何度も読み返して欲しいですね。
さて福音の分かち合いに入りますが、イエスの前に、姦通の現場でとらえられた女性が連れて来られます。当時の宗教指導者たちが、どういう方法でこの女性の姦通の現場を取り押さえたのか知りませんが（男性をおとりに使って、罠に陥れたのでしょうか）、どうやら、宗教指導者たちは姦通の罪で引き出された女性にはあまり興味がないようです。
むしろ、イエスを裁判に訴え出ること、イエスを罠に陥れることだけが、彼ら宗教指導者の興味関心の的になっていた感じがします。女性の罪は免れませんが、イエスを訴え出るための単なる道具に使われたのですから、そういう意味では女性も迷惑をこうむったということになります。
イエスは宗教指導者たちの主張をしばらく相手にしませんでしたが、最後に態度を明らかにしました。「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい。」（８・７）
イエスは宗教指導者たちの幾重にも積み重なった罪を暴きます。宗教指導者たちは、イエスを訴え出る口実を見つけるためなら、手段を選ばないという態度でした。目の前に連れ出された女性は、訴える口実を見つける手段に過ぎません。人を人とも思わない扱いをしています。

そこでイエスは、この女性の人としての権利を守ることと、宗教指導者たちの心にある隠れた罪を暴くことの、両方をなし遂げてご自分の権威を示します。「権威を示す」と言いましたが、宗教指導者たちのようにではなく、謙遜と、誰にも覆せない真実をもって、その場にいるすべての人に、神の子としてのご自分の権威を示したのでした。
「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい。」イエスの答えには、目の前に連れ出されたあわれな女性を、人として大切に扱おうとしている様子がうかがえます。同時に、イエスだけがこの場面では罪を犯したことのない人なのですから、誰にも覆せない真実を突きつけているのです。
このイエスの配慮のおかげで、その場にいる人々は去っていきます。「これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った。」（8・9）
わたしはこの場面を、次のように考えました。罪を犯した女性の前には、イエスひとりしかいないのです。それはつまり、罪を犯した女性に必要な答えは、イエスの取った答えしかない、そういうことではないでしょうか。人間が考えつくような解決法ではなくて、イエスが取られた態度、「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」（8・11）これだけが罪を犯した人に対して人間に許される態度なのではないでしょうか。
罪を見つけて、裁きで処理するという方法も世の中にはあるでしょう。それを否定はしませんが、イエスが取られた態度、「わたしもあなたを罪に定めない」という態度は、裁きで答えを出す方法よりもすぐれているのではないでしょうか。
イエスの望みにかなった共同体を造り上げる、イエスの望みにかなった社会を造り上げるためには、「罪ある人間が、誰かを罪に定めない」という方法をできる限り探る必要があるのではないでしょうか。
今週わたしたちに問われているのは、イエスが最後に言われた、「わたしもあなたを罪に定めない」ということだと思います。ある人をじゃまもの扱いして取り除いたり、押さえつけたりするのではなくて、だれもがもう一度立ち帰って生きていけるような共同体、立ち直れる社会をめざす。そのために梶を切ることができるよう、主に願いましょう。

受難の主日（ルカ 23:1-49）

受難の主日(ルカ 23:1-49)

キリストがわたしたちの中心におられる

長い福音朗読でしたが、わたしは十字架上のイエスの姿を、今年の黙想会で感じたことと重ね合わせながら朗読し、同時に朗読に聞き入っていました。イエスは、犯罪人が右と左にはりつけにされる中、真ん中に張り付けにされました。この、イエスが真ん中におられる様子を、じっと黙想してみましたので、今週の説教としたいと思います。
今年の黙想会は、本田神父さまが指導してくれたおかげで、わたしは黙想会期間中のミサに出席するだけで済みました。２人で祭壇に上がってミサを捧げたのですが、本田神父さまに敬意を表してミサの司式をお願いし、わたしは本田神父さまの隣りに立って、一緒にミサを捧げたのです。みなさんもご承知の通りです。
４日間、わたしは本田神父さまの横でミサを捧げたのですが、最初の日から、ある思いがわたしの頭を巡っていました。わたしは、これまでほとんどの場合、祭壇の中央に立って、信徒全員の中心にあって、ミサを捧げていました。それが、今回本田神父さまが祭壇の中央に立ったことで、わたしは祭壇の中央からちょっと横に移動して、ミサを捧げ、同時にミサの様子を観察することになったのです。
すぐに感じたことは、わたしは今まで祭壇の中央に立つことや、信徒の中心に立つことを、疑いもなく当然なことだと思っていたのです。けれども、いざ中心から距離を置いてミサを捧げてみると、わたしが当たり前だと思っていたことが、実はそうでもないのだな、ということが分かってきたのです。
こういうことです。祭壇の中央に立ち、信徒の中心にいるのを当然だと思うわたしの中の意識は、少し強い言い方をすると、わたしが中央にいなければ馬込教会でのミサは成り立たない、わたしが中心にいなければ、馬込教会は成り立たない。そういう意識だったと思うのです。
６年間にわたり、懸命に馬込教会を引っ張ってきたつもりでしたので、「わたしでなければ」という気持ちが無意識のうちに働いていたことは十分考えられます。
ところが、実際にはわたしが祭壇の中央に立たなくても、ミサは進んでいくのです。黙想会中は、わたしがいなかったとしても、ミサは可能だったわけです。同じように、わたしが信徒の中心に立っていなくても、馬込教会は成り立つのです。そのことを、瞬間的にですが、感じ取ったのです。
「ああ、実際問題そうなんだなぁ」これが、ミサの時に感じたことを思い返した感想です。わたしは、これまで自分がミサの中心にいなければ、馬込教会の中心にいなければ、ミサも、馬込教会も成り立たないのだと本気で思っていたのかも知れません。実際はそんなことはなくて、祭壇の中央に別の司祭がいて、その別の司祭が信徒の中心に立って、わたしは、その別の司祭のそばで一緒にミサを捧げても、ミサは成り立つのです。

何を今さら、と思われるかも知れませんが、馬込教会を離れることが決まったこの時期になってようやく、「わたし」という限られた人が中心にいなければミサが成り立たないわけではなく、ましてや、わたしが馬込教会の中心にいなければ馬込教会が成り立たないのでもないということ。そのことを、黙想会のミサではっきり知ったのです。
新鮮な発見でした。どこかで、わたしが馬込教会のミサのためにどうしても必要だ、馬込教会にはわたしがどうしても必要だと思っていたのです。思い込もうとしていたのかも知れません。それが、一歩自分の立つ位置を動かしてみることで、まったく違う答えにたどり着いたのです。中心に立つべき人は、必ずしもわたしでなくても良いということです。
この答えに導かれた後に、さらに２つのことを考えました。１つは、中心に誰が立つべきかということ、もう１つは、本当に中心に立つべき人は誰か、ということです。まず、中心に誰が立つべきか、ということですが、それは、馬込教会の主任司祭に選ばれた人が、馬込教会の中心に立つということです。
当たり前のように聞こえるかも知れません。けれども、わたしは、次の任地の辞令を受けた時点でも、相変わらず馬込教会の中心に立とうとしていたわけです。中心に立つべきなのは、わたしではなくて、馬込教会の主任司祭に選ばれた人、具体的には後任に選ばれた主任司祭が、馬込教会の中心になるべき人です。中田神父という個人ではなくて、その時その時に選ばれた主任司祭が中心に立てば、それでよいのです。
実際には、これまで話したことは黙想会のミサの初日に、すぐに理解できたことでした。中心に、わたしが立っていなくても、ミサは成り立つし、馬込教会は成り立つ。事実、別の主任司祭が選ばれれば、その主任司祭に引き継ぐことで、新しい馬込教会、新しい馬込教会でのミサが始まる。そこまで、黙想会初日のミサで感じ取っていたのです。
ところが、頭でそのことを理解していても、実際に受け入れるのはそう簡単なことではありませんでした。６年間、当たり前のように味わっていた感覚でしたので、その考えを変えるのはなかなか簡単ではありません。残りの時間の中で、わたしが解決しなければならない問題です。
さてもう１つの、本当に中心に立つべき人は誰か、ということです。これはわたしの中では答えは決まっています。本当に中心に立つべきは、イエス・キリストです。あらゆる出来事の中心にあって、出来事を導いておられるイエス・キリストが、中心にいて初めて、物事の本当の意味が見えてくるからです。
ミサに、別の司祭が中心に立ち、わたしがその横に並んで立った時、中心に立っているのは目の前の司祭ではなく、イエス・キリストがそこに立っているような気がしました。このミサが、ミサとしての最高の意味と役割を持つためには、中心にイエス・キリストがいなければならない。じわじわと、その思いが高まってきたのです。
すべてのことについて、本質的には、中心にイエス・キリストが立つべきである。そのことに思いが向かった時、わたしの心は解放され、

自由になりました。誰かが来て、わたしがどこかに追いやられるというのではありません。わたしは、いろんな任命を受けて、いろんな教会に派遣されていきます。けれども、わたしがどこに行こうとも、中心にイエス・キリストがおられる。その思いがわたしを満たし、心は晴れ晴れとなったのでした。
イエスの受難の場面、イエスが真ん中で、十字架に磔にされていることを思い巡らしながら考えたことでしたが、みなさんの生活を振り返るヒントになれば幸いです。みなさんも、中田神父と同じ経験をしたことがあるかも知れません。つまり、「わたしが、中心に立っていなければ、この集まりは成り立たないのだ。」そう思っていた組織や集まりがあったかも知れません。当然のことだと思っていたそのような組織や集まりも、一歩引いて考えてみたら、実はそうでないことに気づきます。
自分が中心にいなくても成り立つのだと気づいた時、悲しみや恐れ、絶望感に襲われるかも知れませんが、極端に悲しむ必要はありません。なぜなら、もっと先の大切なものにあなたが気づけば、本当に中心に立つべき人は、この世界のどんな人間でもなくて、出来事に本当の意味と価値を与える人だと分かります。それはイエス・キリストです。自分が中心にいないことを、何も恐れる必要はありません。出来事の中心に立つ絶対的な存在など、この世界のどこにもいないのです。そうではなく、たった１人の、絶対的な存在が中心に立ってくださり、中心におられるイエスのそばに立って一緒に活動する。その姿を受け入れることができるなら、わたしたちはどこにいても、どこに送られていっても安心です。
十字架のキリスト、中心に磔にされているキリストを眺めながら、恐れるものは何もないと、むしろ平安をイエスから受け取りたいと思います。

聖木曜日（ヨハネ 13:1-15）

聖木曜日(ヨハネ 13:1-15)

すべてを与え尽くす覚悟を学ぼう

聖木曜日は、最後の晩さんの席で、イエスがパンとぶどう酒を用いて、ご自分の御体と御血を人類にお与えになる聖体の秘跡が定められた日です。聖体の秘跡を定めたと同時に、この聖体の秘跡を取り扱う司祭を制定する、叙階の秘跡も同時に制定された日とされています。今年の聖木曜日、特にイエスが弟子たちの足を洗い、奉仕をする姿を示して、司祭に必要な姿を示しておられることをいっしょに考えてみたいと思います。
3 月 30 日、浦上教会で聖香油のミサと叙階 50 周年金祝、叙階 25 周年銀祝の祝いが行われました。50 周年の金祝の司祭が 6 人いたのですが、代表で川添神父さまが講話をしてくださいました。25 周年の銀祝の司祭からは、オプス・デイの尾崎神父さまが講話をしてくださいました。金祝を迎えた川添神父さまは、わたしが司祭になって初めて赴任した浦上教会で、主任司祭としてわたしを育ててくださった神父さまです。
50 年を振り返っての講話は、おもに熊本県の天草と帯山の 2 つの教会に現在まで 13 年間派遣されているのですが、その中からのお話でした。特に天草は、もともとパリミッション会の司祭たちが司牧を担当していた教会で、後にはコロンバン会の神父さまたちがそのあとを引き継いで、ずっと海外からの宣教師たちが担当した教会です。日本人の司祭が天草をお世話したのは、ごく最近のことで、ほとんどの時代を、海外からの宣教師がお世話してくださっていたそうです。
そういう歴史を抱えている教会に派遣されていって、昔から変わらない司祭館の様子、教会の様子をその目で見て、海外からはるばるやってきて、異国の地で働いた司祭たちのご苦労がよく分かったそうです。特に宣教師たちの暮らしは、美味しいチーズを食べたりして立派な暮らしをしていたのかと想像していたけれども、実際には本当に質素な暮らしをして、すべてを日本人の信徒のために献げ尽くしていたことがよく分かったそうです。
今日、福音朗読ではイエスが食事の席に着いてから、途中で弟子たちの足を洗う様子が紹介されました。当時の人々が、外出から帰った時、異邦人の土地を歩いたりして宗教の異なる人々と交わった状態を洗い清めるために足を洗っていたわけですが、それは外出から戻ってすぐのことであって、決して食事が始まってから途中ですることではありませんでした。ですから、イエスのこの動作は、特別な意味を込めてなされたのだと考えるべきです。
わたしは、イエスがご自分のすべてを弟子たちに与え尽くす、その思いを伝えようとして、食事の席を立って弟子たちの足を洗ったのではないかと考えています。
では、どんなことを弟子たちに与え尽くそうとされたのでしょうか。3 つ考えてみました。1 つ目は、聖体の秘跡を制定する最後の晩さんの席ですから、ご自分の命を、与え尽くすためにこの場を設けたということです。この聖体の秘跡のおかげで、わたしたちもイエスの命をすべて、

分け与えてもらうことができます。
2 つ目は、弟子たちの足を洗うことで、イエスはわたしたちのためにどんなことでもするということを示してくださいました。必要があれば、弟子の足を洗うこともする。師匠であるイエスが、弟子たちの前にひざまずいて奉仕することもいとわない。その態度を、今日のこの最後の晩さんの席で教えておられると思います。
最後の 3 つ目は、わたしが、必要とあらば弟子たちのためにどんなことでもしたのだから、あなたがたも互いに、必要があればどんなことでもする覚悟でいなさいと教えてくださったと思います。わたしたちは、ほとんどの場面で、ここまではしてもいいけど、これ以上はしたくない、そんなことを考えています。
けれども、イエスが示そうとしたのは、すべてを与え尽くす姿です。「すべて」というのは、「ほとんど」ではありません。あくまでも「すべて」です。このイエスの態度に、わたしたちの日常を当てはめて欲しいのです。
特に、わたしには今、1 つ心配事があります。わたしは新しい任命を受けてこの教会を離れ、後任の神父さまが引き継いでくださることになっているわけですが、その後任の神父さまの生活の支えをちゃんとしてもらえるだろうかと、そのことをとても心配しています。わたしもたくさん助けてもらってありがたかったのですが、同じように、後任の神父さまにもたくさんの助けの手を差し伸べてほしいと思うのです。
まだ、安心して引き継ぐことができない状況にあることを、今も胸を痛めています。どうか、司祭館での安定した生活のために、主任司祭が安心して働くことができるように、後任の神父さまを助けてあげてほしいのです。わたしはそれが、今のこの教会にとって、すべてを与え尽くしてくれたイエスに見倣う具体的な方法だと思っています。
どうやったら、後任の神父さまを安心してお迎えできるだろうか。真剣に考えてくださるなら、きっと解決の道は見つかると思います。たとえば一ヶ月のカレンダーをみんなでのぞき込んで、主任神父さまが一ヶ月安心して暮らしてもらうために、わたしは掃除をするからあなたは洗濯を手伝ってよ。食事のお世話はこんなふうにしようよと、具体的に考えてほしいと思います。
今年の聖週間、喜びもありました。今日、午後 3 時から、大人 2 人の洗礼式と堅信式を行いました。今日の典礼に、参加しているのではないかと思います。このかたがたが馬込小教区教会家族の中で日々成長し、信仰を確実なものにしていくためにも、合わせてみなさんの理解と協力を願いたいと思います。

聖金曜日（ヨハネ 18:1-19:42）

聖金曜日（ヨハネ 18:1-19:42）

イエスは、この世のはかないものに磔にされた

昨日の聖木曜日の典礼で、非常に興味深い話を聞かせてもらったのですが、今日のイエスの御受難にはちょっと適当ではなさそうなので、また機会を見つけて話したいと思います。
今日、イエスさまの御受難の朗読でした。イエスは十字架にはりつけにされて、お亡くなりになります。わたしは、十字架とは、「この世のもの」を意味していると思います。しかも、はかないものということも意味しているでしょう。
イエスは、この世界をすべて合わせても足りないくらいに尊い「神の子」です。その「神の子」が、十字架にかけられて命をささげることをお望みになりました。イエスはこの世の、はかないものに結び合わされて、最期を遂げられたのです。
わたしは、ここにもう１つのことを見て取りました。実はわたしたちも、この世のもの、はかないものなのです。生まれて数十年で命が尽きていく、本当に弱く小さな命なのです。イエスがこの世のはかないものに磔にされている姿に、イエスが人類と結び合わされた姿を見て取ったのです。
今日、受難の朗読に皆で参加しました。これまでわたしたちは、イエスが、木の十字架に磔にされたと受け止めていたと思います。でも今日からは、もう１つの受け止め方を学びました。イエスが磔にされた木は、わたしたちでもあるのです。この世にあって、限られた時間しか与えられていないわたしたちに、イエスは磔にされたのです。
イエスが磔にされたことで、どうなったのでしょうか。救いのわざが完成しました。この世のもの、はかないものに磔にされて、救いのわざが完成しました。それはすなわち、弱くはかない命であるわたしたちにも当てはまるのではないでしょうか。わたしたちも、イエスに結ばれるとき、救いの恵みを受けるのです。
わたしたちは今日、十字架の崇敬を行います。十字架が偉いから、お辞儀をするのではありません。この世のもの、はかないものに、イエスが結び合わされてくださったから、感謝してお辞儀するのです。わたしたちという、この世の弱くはかない命に、イエスが結び合わせてくださって、わたしたちを救ってくださった。そのことに、感謝したいのです。
イエスが磔にされて、もう１つのことが起こりました。それは、神が、御子イエスを通して、人類をご自分のものとしてくださったということです。イエスの尊い血によって、人類は罪の状態から贖われたのですが、「贖い」とは、買い戻しをするということです。
神は、御子イエス・キリストの尊い血によって、人類を自分のものとして買い戻してくださったのです。原罪をもって生まれ、自分の力では自分を救えないわたしたちを、御子の尊い血によって、自分のものとしてくださったのです。
こうしたことを考え合わせるなら、十字架上のイエスの姿は、わたした

ちから遠く離れたものではありません。十字架の木を見る時、わたしたちがイエスと結び合わされているのだと考えてみましょう。そしてイエスの尊い血によって、今まさにわたしたちは買い戻されたのですから、感謝しましょう。わたしたちのために十字架上におられるイエスを、まごころ込めて礼拝いたしましょう。

復活徹夜祭(ルカ 24:1-12)

復活徹夜祭(ルカ 24:1-12)

思い出し、復活のキリストに従って歩みなさい

主のご復活、おめでとうございます。中田神父が、みなさんと御復活を喜び合うのは、今年が最後になりました。もう、御復活の説教をみなさんにすることはないでしょうから、何か、最後にお役に立つことを話したいと思って今年の説教を考えてみました。
朗読は、週の初めの日の明け方早く、婦人たちが墓へ行く場面から始まります。墓を確かめますが、主イエスの遺体が見あたりませんでした。そこへ、輝く衣を着た二人の人がそばに現れます。そして、途方に暮れていた婦人たちに、イエスは復活なさったのだと伝えます。
復活を知らせるのですが、二人の人は同時に、「まだガリラヤにおられたころ、お話になったことを思い出しなさい」（24・6）と促します。イエスがご死去の直前に話されたこと、それは、「人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている」（24・7）ということでした。
わたしは主の御使い二人と、婦人たちとの出会いの中で、２つ、皆さんに伝えようと思いました。それは同時に、わたしが、皆さんに言い残したい２つのことでもあります。１つは、「（イエスが）お話になったことを思い出しなさい」ということ、もう１つは、「罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている」とのみことばで伝えようとしていることです。
１つ目の、「イエスがお話になったことを思い出しなさい」についてですが、「思い出しなさい」と言うからには、思い出すことができるくらい、繰り返し、確実に話してくれたことがあるはずです。イエスは、弟子たちだけでなく、婦人たちにも思い出してもらえるように、大切なことは残さず話してくださったということです。
もう１つは、「罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている」とのみことばです。わたしはこのみことばは、２つに区別して考えるのがよいと思います。それは、「罪人の手に渡され、十字架につけられ」と、「三日目に復活する」とに分けて考えるということです。
「罪人の手に渡され、十字架につけられる」これは、イエスの命を奪おうとする人々のされるがままになっている状態です。もしここで、イエスに自由がなくなっていて、人々の奴隷になっていたのであれば、イエスは復活することはできなかったでしょう。事実はそうではなく、イエスは「罪人の手に渡され、十字架につけられる」あいだも、完全に自由であり、誰にも隷属していなかったのです。ですから、ご自分で「復活する」のです。
この２つを通してわたしが言いたいことはこうです。イエスは、特別な弟子たちだけでなく、婦人を含むすべての人に、話すべきことは十分話しておかれたのでした。わたしも、思い出せるくらいに、話すべきことは話したと思っています。あとは、「こんな場面では、中田神父はどん

な決断をしただろうか。どんな態度を、求めていただろうか」そういうことを思い出してほしいと思います。
次に、イエスは「罪人の手に渡され、十字架につけられる」場面でさえも、自由を奪われるたり、誰かに隷属したりしていなかったのですから、わたしも、みなさんがどんな困難の中にあっても、自由を奪われない人であってほしいと思います。特に、イエスの復活を信じる教会家族は、悪に引きずり込もうとする誘惑の奴隷に決してなるべきではありません。きっぱりと、「わたしは命を狙われるような場面でも自由を失わなかったイエスを信じている。だから、あなたがたの誘惑には屈しない」そういう決意をもって、復活の主に従って歩んでほしいと思います。
「（イエスが）まだガリラヤにおられたころ、お話になったことを思い出しなさい。」中田神父がまだ馬込教会にいたころ、話していたことを思い出しなさい。少なくとも、前半の３年間については、皆さんの手元にある「取って食べなさい」という文庫本に、信仰生活で気づいて欲しいことを一言一句漏らさず書いています。ぜひ、思い出すために読み返してみてください。
イエスは今日復活し、「話したことを思い出しなさい」それと「罪に隷属することなく、復活の主を信じて生きる完全な自由を保ちなさい」と呼びかけています。命ある限り、この２つを維持して歩むなら、わたしたちはいつも、復活したキリストの証し人となれます。

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

真理を学ぶために、心の部屋を飛び出そう

あらためて御復活おめでとうございます。馬込教会の婦人会に荷造りを手伝ってもらって、かなり作業が進みました。片付けといった場面では、明らかに男性よりも女性のほうが適していると、思い知らされました。たとえば、箱よりもほんの少し高さが高いとか、幅が広いとかいう場合に、男性はどうしても躊躇するのですが、女性軍ははみ出ている部分も力ずくで寄せてくっつけてガムテープで締め付けてしまうんです。
見事だなぁと思いましたが、よくよく考えたら、はみ出ているものを押し込んでしめるというのは、もしかしたら洋服を着る時なんかによくやっているのかなぁと、変な想像までしてしまいました。
それはそうと、おかげさまでみるみるうちに物が無くなりまして、何年ぶりかに床が真っ平らに見えています。テレビ台の上にも、今はテレビとリモコンしか載っていません。これはすごいことです。
片付けを手伝ってもらっている中で、ためになることを会話の中で聞かせてもらいました。箱には中身が分かるように箱の中を写した写真を名札代わりに貼り付けているのですが、「えー、そんな名札の貼り付けかたじゃダメだよ」とある人に言いましたら、別の人が、「神父さま。貼り付けているのは神父さまじゃないんだから、仕上がりも神父さまとは違うんですよ」とあっさり言われてしまいました。
考えてみると、なるほどそれもそうだよなぁと思ったのです。言われなくても実際そうなのですが、言われてみて、事実を目の前にして、初めて「なるほどそういうことか」と納得することってあるわけです。
じつは今日の福音朗読の、ペトロともう一人の弟子もまた、イエスの復活という事実を目の当たりにして初めて、「なるほどそういうことか」と納得したのでした。マグダラのマリアが、「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」（20・2）と告げたのですから、イエスの復活を気付くことができたはずです。それなのに、マグダラのマリアの言葉だけでは納得できず、２人とも墓へ走ったのでした。
墓へ走っても、たぶん報告を受けた以上のものは見ることができないのです。それにもかかわらず、彼らは墓へたどり着いた時に、出来事を理解しました。事実を目の前にして初めて理解できる。物事にはそういうものもあるということなのでしょう。
復活の出来事を空の墓に行ってようやく納得した２人の弟子たちを眺めていてわたしはこう考えました。わたしたちも、イエスの復活を信じることで、いつかは復活の喜びにあずかれるのだと信じています。
ところで、本当にわたしたちは復活するという確信は、どこでどういう時に味わえるのでしょうか。
わたしは、もしかしたらそれは、お墓に行って、その場に立ってみた時に感じることができるのではないかと思いました。次に墓参りに行った時、「わたしたちは皆、キリストを信じてこの世を去るのだから、

復活するのだ」と、墓を見て考えてみたらいかがでしょうか。今までとは違う何かを、墓そのものが教えてくれるかも知れません。
「百聞は一見にしかず」と言います。２人の弟子たちが足を運んだことで学んだ姿を、わたしたちも大切に考えましょう。内向きに考えを閉じこめず、飛び出してみましょう。復活のイエスは、ご自分がその場にいなくても、空の墓を通してでも、人に必要な真理を教えてくださるお方です。

神のいつくしみの主日（ヨハネ 20:19-31）

神のいつくしみの主日(ヨハネ 20:19-31)

イエスが教会の鐘を鳴らし、皆さんを呼び集めています

皆さまと主日のミサをささげるのも最後となりました。今週は「神のいつくしみの主日」という名前が付けられた主日です。長崎教区で転勤の絡む教会は、ほとんど、今週がお別れの説教となっていることでしょう。福音朗読は復活のイエスが弟子たちに現れる場面、特にトマスにあらためて現れる場面が選ばれます。今日の説教、わたしたちすべてが神のいつくしみを感じるための助けになればと思います。
イエスがお亡くなりになった後、弟子たちは心を閉ざし、家の戸にも鍵を掛けて隠れるようにしていました。誰に従って生きていけばよいのか、何を頼りに生きていけばよいのか、全く分からなかったからです。
そこへ、復活したイエスが現れてくださいました。戸に鍵が掛けてあるのにおいでになったのですから、心理的・物理的、あらゆる形で自分を閉ざしていても、復活した主はおいで下さり、わたしたちを解放してくださることが分かります。
復活したイエスはすべてを閉ざしていた弟子たちに現れて、何を仰ったのでしょうか。いちばん印象的な言葉は、「あなたがたに平和があるように」（20・19）というものでした。この点に絞って、わたし自身の考えをまとめたいと思います。
復活した主がおいでになる前、弟子たちの心は不安でいっぱいだったことでしょう。「不安」は、「平安」がない状態です。どんな平安が奪い去られていたのでしょうか。まずは、付き従っていく相手を失ったということです。エマオに向かう弟子たちは、次のようにイエスを言い表しました。「この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。」（ルカ 24・19）誇りを持って、胸を張って付き従っていく相手を失ったのです。
さらに、付き従っていく相手を失ったことで、何を頼りに生きていけばよいのか、全く分からなくなりました。２人ずつ組になってほうぼうの町に出かけ、宣教しましたが、今はそのことも思い付きません。「わたしたちにも祈りを教えてください」（ルカ 11・1）と願って教えられた「主の祈り」を唱えてみることも思い付きませんでした。何かの抜け殻のようになっていたのです。
そこへ、イエスが現れ、「あなたがたに平和があるように」と仰いました。何もかも、奪い取られて呆然としていた弟子たちに、復活したイエスが現れ、すべてを取り戻してくださったのです。弟子たちは、これまで通り付き従っていく相手を取り戻し、頼りにすべき道しるべを取り戻したのです。
イエスは「あなたがたに平和があるように」と言いました。すなわち、間違いなく不安のどん底に突き落とされていた弟子たちを、まずは不安のどん底から引き上げてくださったのでした。細かいことを言う前に、根本的な部分に救いの手を差し伸べてくださったのです。
「弟子たちは、主を見て喜んだ」（ヨハネ 20・20）とあります。喜びが

満ち始めれば、あとは問題ありません。さまざまな指示を与えることで、弟子たちは本来の姿に立ち帰っていきます。
弟子たちの心が喜びに満たされたところで、イエスは矢継ぎ早に指示を出します。「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」（20・21）「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」（20・22-23）弟子たちはもはや以前の抜け殻ではなく、よく準備された状態に変わっていたので、イエスの指示に耳を傾けることができたのです。
トマスは、イエスの最初の出現に立ち会うことができませんでした。それでも、トマスも後のイエスの出現で「信じない者ではなく、信じる者に」（20・27）変わります。トマスの中にも喜びが満ちて、「わたしの主、わたしの神よ」（20・28）と答える人に変わっていたのです。
喜びが満ちあふれれば、人は、イエスの証し人として十分働けるようになります。イエスの復活後の弟子たちがそうでした。同じことは、わたしたちにも当てはまります。わたしたちの心が平安であり、喜びが満ちあふれているなら、イエスの証し人として働くことができるのです。
問題は、どのようにしてわたしたちが平安を得て、喜びに満ちた人に変わるかということです。そこでお願いしたいのは、６年前、初めて皆さんに説教したことです。わたしは今でも正確に覚えています。こう話しました。「どこに、何があるかを知っていることはとても大切です」。つまり、わたしたち信仰者の必要なものが、どこにあるかを知っているなら、当然そこへ行けば、平安を得て、喜びが満ちあふれるはずです。信仰者に必要なものは、どこへ行けば手に入るのでしょうか。疑いもなく、教会へ行くということです。
教会は、皆さんを招き、集会祭儀を開き、秘跡を授け、恵みを与えます。わたしは、それらの最初の合図は、教会の鐘だと思います。高島教会は教会の鐘を鳴らさなくなりましたが、心の中では教会の鐘の音が今でも聞こえると思います。教会の鐘は、始まりを知らせ、信仰者を集めるのです。
そこで、皆さんへの置きみやげに、「あの鐘を鳴らすのはあなた」という歌を歌って最後の説教を終わりたいと思います。和田アキ子さんの代表曲です。教会の鐘を思いながら歌ったとは思いませんが、信仰者を呼び集め、秘跡を執行して恵みを授ける、そのしるしとなる教会の鐘を鳴らす人が必要です。
実際に鐘を鳴らしているのはシスターですが、主任司祭を通してイエスさまがあなたを教会に呼んでいますよ、あなたを教会に呼ぶ鐘を聞いたら、思い出しなさいと、そういう気持ちを込めて歌いたいと思います。

「あの鐘を鳴らすのはあなた」

作詞　阿久　悠／作曲　森田公一

あなたに逢えてよかった
あなたには　希望の匂いがする

つまずいて　傷ついて　泣き叫んでも
さわやかな　希望の匂いがする
町は今　眠りの中
あの鐘を　鳴らすのは　あなた
人はみな　悩みの中

あの鐘を　鳴らすのは　あなた

あなたに逢えてよかった
愛しあう　心が戻って来る
やさしさや　いたわりや　ふれあう事を
信じたい心が　戻って来る
町は今　砂漠の中
あの鐘を　鳴らすのは　あなた
人はみな　孤独の中
あの鐘を　鳴らすのは　あなた
町は今　眠りの中
あの鐘を　鳴らすのは　あなた
人はみな　悩みの中

あの鐘を　鳴らすのは　あなた

まもなく、新しい主任司祭がやってきます。次の主任司祭も、皆さんを祭儀に招き、秘跡を執行し、恵みを届けます。わたしも、新しい教会の鐘を鳴らすために、旅立ちます。

復活節第 3 主日（ヨハネ 21:1-19）

復活節第３主日（ヨハネ 21:1-19）

「ほんなごったい」と言える信者になろう

はじめまして。中田輝次神父と言います。よろしくお願いします。フェリーで長崎の大波止を出て、奈良尾に降りましたが、付き添いの２人は船の中でワンカップをさっそく空けて景気づけしていましたので、その２人も車に乗せ、わたしが車を運転してフェリーを出てしまいました。
降りた時にチラッと外を見たのですが、「誰も、ターミナルにはお迎えに来とらんよね」と確認し、まっすぐ高井旅教会に向かったのです。ターミナルの待合所では、横断幕を準備して、さらに桐教会の神父さま、真手ノ浦教会の神父さまがお迎えに出ていたそうですが、全員を置き去りにして出発してしまいました。申し訳ありませんでした。
わたしは鯛之浦出身です。小さい頃、耳で覚えた言葉がたくさんあります。「あっぱよ」「ざぁまよ」「ほんなごてや」「なんのそん」これ、全部わたしの体に染み付いています。すごくいい言葉だと思います。こんな言葉で、聖書の解き明かしができたら、どんなにすばらしいだろうと思い、今日の説教を考えてみました。
すると、意外や意外、今日の福音朗読の中に、「あっぱよ」「ざぁまよ」「ほんなごてや」「なんのそん」が隠されていることに気づきました。実は１ヶ月くらい前から、「あっぱよ」「ざぁまよ」で説教ができないものかなぁと、浜串教会の皆さんのことを思いながらずっと考え続けていたのです。まさかとは思っていましたが、考えているうちに、「あー、これはいけるかもしれんぞ」という感触をつかんだのです。
では少しずつ、わたしたちが昔から使ってきたすばらしい言葉を掘り出してみましょう。イエスが、夜に漁をしたのにさっぱり魚がとれず、しょんぼりしている彼らにこう言いました。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ」（21・6）そこで、網を打ってみると、「魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。」となっています。
ここに、１つ目の言葉が隠れています。分かりますか？「魚があまりに多くて」これは、「ざぁまに魚のとれた」ということですよね。「あまりに多くて」と言っているのを「ざぁまにとれた」と言えば、２千年前の遠い話ではなくて、すぐ近くの、わたしたちの誰もが親しみを持てる出来事になるのではないでしょうか。
２つ目の言葉を探しましょう。「ざぁまに魚のとれた」それを見て、イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言いました。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、「上着をまとって湖に飛び込んだ。」（21・7）とあります。わたしは正直に言うと、ペトロの行動は理解に苦しみます。
皆さん、よくよく考えてみてください。人は、本当に裸同然だったら、湖に飛び込むのでしょうか。あなたは、裸同然で舟に乗っていて偉い

人とばったり会ったら、海に飛び込みますか？わたしは少なくとも、飛び込んだりはしないと思います。でも、何かがあって、ペトロは湖に飛び込んだのです。何があったのでしょうか。
わたしは、「あっぱよー！」と思ったから、湖に飛び込んだのだと思います。あまりにもびっくりして、「あっぱよー！」と思ったので、思わず湖に飛び込んだのではないでしょうか。きっと、「あっぱよー！」としか言えないくらい驚かないと、あんな理解に苦しむ行動はしないのではないでしょうか。
３つ目の言葉を探しましょう。シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいになりました。問題はここからです。「それほど多くとれたのに、網は破れていなかった」（21・11）らしいのです。大きな魚が百五十三匹です。大きな魚って、１キロくらいでしょ？だったら水揚げは 153 キロにもなります。
細い糸で編んだ網に、言ってみればお相撲さんが乗っかっている状態です。網が破れないということがありえるでしょうか？わたしたちは内心こう思うはずです。「なんのそ～ん。」それが、正直な反応です。「なんのそ～ん」と言いたくなるほど、とても信じられないことですが、神の特別な計らいがあったのかもしれません。
そして最後、今日の福音朗読から４つ目の言葉にもたどり着きます。残る１つの言葉は「ほんなごてや」です。これは今日の福音朗読のどこに見つけることができるのでしょうか？それは、あなたが、誰かに、今日の物語を話して聞かせたときです。あなたにとって身近な人で、異なる信仰を持っている人や、何も信仰していない人に、今日の話を語り聞かせるとき、聞いたひとはおそらく「ほんなごてや？」と問い返すことでしょう。
わたしはそのとき、なんと答えるでしょうか？夢物語だと返事するのでしょうか？いえ、違います。「ほんなごったい」と答えるべきです。ただし、「およー。ほんなごったい」と答えるためには、わたしたちが聞いて知っていることが、恥ずかしくないものであり、自信を持って話して聞かせることができるものなんだと納得していなければなりません。
つまりこういうことです。わたしたちが自信を持っていることに失敗し、下を向いているときに、イエスは必ずわたしたちに声をかけ、必要な指示を与え、わたしたちを助けてくださる。しかも、あふれるほど豊かに恵みを与えてくださるということです。このことを福音から学び、生活の中でも体験しているなら、「ほんなごてや？」と言われたときに、「およー。ほんなごったい」とはっきり言うことができるのです。
最後に、わたしたちのこれからの目標を示しておきましょう。それは、まずイエスの一生涯について書かれた福音書に、わたしにもその経験はある、そう言えるくらいに親しむことです。そして、誰か異なった信仰の人に、イエスがわたしたちを助けてくれるんだと話します。きっと相手は、「ほんなごてや？」と聞き返すでしょうから、「およー、ほんなごったい」と返事ができる。これが、わたしたちが目指す目標

です。
ぜひ、今話した目標にたどり着けるよう、一緒に信仰の道を歩いていきましょう。わたしは、説教を通して福音書の中にある「なるほどそれなら分かる」という部分、今日の説教で言えば「あっぱよ」「ざぁまよ」を拾い出して皆さんに示しますから、それを材料にして誰かに伝えてください。
誰かが「ほんなごてや？」と聞いたなら、「ほんなごったい」と答える。そのときわたしたちは、イエスに耳を傾ける、新しい仲間を網ですくうことができるのではないでしょうか。

復活節第４主日（ヨハネ 10:27-30）

復活節第４主日（ヨハネ 10:27-30）

イエスはわたしをまるごと受け入れてくださる

最初に、中学１年生の時の経験から話したいと思います。わたしは中学１年生で神学校に入りましたが、神学校に入って最初の夏休み、夏休みの最初の日曜日の出来事です。その日わたしはミサが始まる前にトイレに行ってなかったため、たまたまトイレに行きたくなって、ミサを抜け出してトイレに行ってきました。
戻ってみると、玄関で知らないおじさんが２人、話し込んでいました。そのおじさんたちの横を通り過ぎたとき、たまたま、おじさんたちの会話が耳に入ったのです。おじさんたちはこう言っていました。
「輝あんちの息子の神学校に行ったってや？」「おう」
「ほんなごてや？」「ほんなごったい」
「なんのそん。輝あんちの息子の神父にならうっとっちかよ」
何とわたしのことを、おじさん２人は噂していたのです。しかも、わたしが目の前を通っているのに、そのことも知らずに、悪口を言っていたのです。わたしは、顔が真っ赤になるくらい恥ずかしい思いをしました。それと同時に、「見とれよ」という対抗心もメラメラと燃えてきました。「絶対にこのおじさんたちを見返してやる」それが、わたしの最初の頃の召し出しの原動力だったかもしれません。
２年前に亡くなったわたしの父親は輝明と言うのですが、確かに、鯛ノ浦ではよく知られたガキ大将だったようです。あとで聞いた話ですが、自己紹介でわたしが父の名前を出すと、みんな決まって「輝明さんの息子ですか？輝明さんは悪かったもんねぇ。」と、口を揃えて言うのです。鯛ノ浦だけではなく、船隠でも、佐野原でも言われました。ですから、父親を知っている人からすれば、あの父親の息子が、神父になれるはずがない。有り得ないと言うのも無理はないのです。
あのときのおじさん２人は、わたしの父をよく知っている人だったに違いありません。けれども、だからと言って、おじさんたちがわたしを知っていることにはなりません。確かに、名うての荒くれ者の息子ですが、すべてを知っているわけではなかったのです。その証拠に、わたしが横を通り過ぎたときも、おじさんたちはわたしのことを悪く言っていたわけです。
人が、どんなに相手のことを知っていると言っても、限界があります。何十年の付き合いがあっても、すべてを知り尽くしているとはいえません。夫婦であってもそうでしょう。50 年連れ添った夫婦であっても、知らないことはあるのではないでしょうか。
ですから、わたしたちが誰かのことを知っていると言った場合、「ある程度知っている」ということであって、どんなにおまけをしても、せいぜい「よく知っている」という程度のものなのです。誰も、誰かのことをすべて知っているなどと言うことはできないのです。
そのことを踏まえた上で、福音に目を向けてみましょう。イエスははっきりこう言います。「わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに

従う。」（10・27）イエスは、ご自分の羊を知っているのです。その際、何も言葉を付け加えず、ただ「知っている」とだけ言います。
どれくらい知っているのか。これは押さえておく必要があります。イエスが「知っている」と言うからには、「すべてを知っている」という意味だと考えるべきです。「だいたい知っている」というのでも、「かなりよく知っている」というのでもありません。すべてを、余すところなく知っているのです。
すべてを、余すところなく知ると、新しい関わりができあがります。聖書の中で、「知る」という言葉は、特別な意味を持つことがあります。聖書の中では、「知る」ということが、「愛する」という意味も持つことがあるのです。そのことがここで当てはまります。イエスはご自分の羊を「知っている」だけでなく「愛している」のです。
「知る」ということが「愛する」ということと同じ意味になるのは、特別な場合です。つまり、「すべてを知り、すべてを受け入れる」そういう場合でなければ成り立ちません。結婚を前提としている人同士が、相手の長所も短所も、すべて知った上で受け入れる。この場合は、相手を知るということが、相手を愛するということになるわけです。
そう考えるとき、イエスが仰った「わたしは彼らを知っている」というのは、すべてを知り、愛してくださっているという意味になります。きっとそれは、わたしたちが欠点も多々あるけれども、イエスは十分承知の上で、愛してくださっているということではないでしょうか。もっと言うと、イエスから愛してもらうにはあまりにも釣り合わない弱い人間を、それでもかまわず愛してくださる。そんな計り知れない奥深さが含まれているのではないでしょうか。
「わたしは彼らを知っている。」当時のおじさんたちは父親から推理してとてもじゃないが神父になれっこないと、断定しました。ところがイエスは、まだ海のものとも山のものともつかぬ少年を知ってくださり、「うん、輝明の息子だから手が掛かりそうだけど、それでもわたしはあなたのことを知っているよ。そして、あなたのことを愛しているよ。だから、わたしに従ってきなさい」と呼び掛けて、使ってくださったのだと思います。
イエスは、わたしがどんな素材か、十分わかった上で、愛してくださった。だから、わたしにも働きの場が与えられました。これはわたしに限ったことではないはずです。「なんのそん。あれが役員の勤まっとっちかよ。」冷静に考えればそうかもしれません。けれども、イエスはわたしたちを長所も短所も丸ごと愛してくださることで、わたしたちの働きの場を用意してくださるのです。
向き・不向きはあるかもしれない。けれども、イエスが丸ごと愛してくださって、わたしたちにイエスに従うための場所、活躍の場所を用意してくださったのですから、精一杯神さまが置いてくださった場所で働いてみる必要があるのではないでしょうか。
「わたしは彼らを知っている。」イエスのこの言葉を、どこまで信頼するか。これが今週わたしたちに求められていると思います。イエスの言葉をどこまでも信頼し、従っていく。そのための力を、今日のミサの中で願い求めましょう。

復活節第5主日(ヨハネ13:31-33a,34-35)

復活節第５主日（ヨハネ 13:31-33a,34-35）

イエスの掟はなぜ新しいのか

司祭になりたてのころ、ゆるしの秘跡で忘れられない経験をしました。告解場に座っていると、１人のお父さんがやって来て、「神父さま、昔の仕方でお願いします」と言うのです。わたしは 18 年前に司祭になりましたが、そのお父さんの言う「昔の仕方」がよく分からなかったのです。
告白に来たお父さんは、わたしが面食らっているのもかまわず、自分のペースで告白をし始めました。「前の告解はいついつしました。罪はこれこれです。おわりです。」
これを聞いてわたしはさらに面食らいました。わたしの知っている範囲では、昔の告白は、「我、霊父の御祝福をこいねがう」と前置きしてから告白が始まっていたと思うのです。それがいきなり、「いついつしました、罪はこれこれ、終わり」とやられたものですから、わたしのほうが腰を抜かして、「このお父さんの告白の仕方のほうが、よっぽど最新式じゃないか」と思ったのでした。
告白はそれで終わりませんでした。「神父さま、終わりです！」と催促されまして、それでわたしは夢から覚めて、あ～、わたしの指示を待っているのだなと理解し、「償いはこれこれの祈りを唱えてください。」「それでは、『悔い改めの祈り』を唱えてください」と言ったのです。
「悔い改めの祈りを唱えてください」と言ったのはよかったのですが、お父さんの祈りが始まりません。耳を澄ましてみると、向こうでぶつぶつ何かを言っているようなのです。「悔い改めの祈り？悔い改めの祈り・・・知らんなぁ」あー、そうかぁ。「悔い改めの祈り」では意味が分からなかったんだなと察して、「それじゃあ、『痛悔の祈り』を唱えてください」と言い直したのです。
すぐに反応が変わりました。「あー、『痛悔の祈り』ね。それなら分かる。」そう言って、こう唱えました。「神よ、わたしはあなたに罪を犯したことを心から悔やみ、お助けによってこの後再び罪を犯さないと、固く固く決心いたします。」「痛悔の祈り」と言って、「悔い改めの祈り」を唱えるのも傑作ですが、「固く固く決心いたします」と答えたのがわたしには面白いなぁと感じました。
わたしはこのときに、「昔の仕方」とか「新しい仕方」ってなんだろうなぁと考えました。あとでこの話は説教の終わりにつながってきますので、記憶しておいてください。ひとまず、福音の学びに入りましょう。
イエスは弟子たちに掟を授けました。しかも、「新しい掟」と念を押しました。「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」（ヨハネ 15・34）
イエスが「新しい掟」と念を押していることに注意しましょう。「新

しい」の受け取り方に注意が必要です。何かを新しいと言うときは、２つの場合が考えられます。１つは、「何がどう新しいのか」です。もう１つは、「なぜ新しいと言えるのか」ということです。
お魚で考えてみましょう。日曜日ごとに子どもたちは賄いのシスターに「シスター、釣りに行こう」とせがんでいるようです。どうやら大人が同伴していないと磯に行ってはいけないというのが理由のようですが、今日釣ってきた魚は、釣って３日経過した魚より当然新しいわけです。これは、「何がどう新しいか」に入ります。
他方、仮に釣ってきた魚がアラカブだとして、もしもこのアラカブが「卵から育てたアラカブ」だとしたら、それは画期的に新しいアラカブのはずです。もしもこの「卵から育てたアラカブ」が釣って１週間経っていたとしても、「卵から育てた」ものであるとしたら（そんなアラカブがいればの話ですよ）、新しいと言えます。これは、「なぜ新しいと言えるか」に入る新しさです。２通りの新しさ、みなさんも違いは分かると思います。
そこで、イエスが言われる「新しい掟」について考えてみましょう。「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」これは、２通りの新しさのどちらに入るのでしょうか。
「新鮮」という意味の新しさで考えると、「互いに愛し合う」ことはまったく新しくありません。旧約聖書の中のレビ記という書物に、こう書かれています。「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である」（レビ 19・18）イエスがおいでになるはるか前から言い伝えられているのですから、いまさら何が新しいのか、と言うくらいに古い掟なのです。
そうだとすると、残る１つの新しさを考えなければなりません。「なぜ新しいと言えるのか」ということです。なぜ新しいと言えるのか。それは、「隣人を愛する」だけではなく、「敵をも愛する」、もっと言うと、互いにすべての人を愛しなさいと言っているところが画期的なのです。これまで誰も、「敵を愛しなさい」とは教えられてこなかったのです。違う国の人、違う信仰の人を愛しなさいなどということを聞いたことがなかったのです。
ところが、イエスはまったく新しい相互愛を求めます。「互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」隣人も、敵も、違う国籍、違う宗教、豊かな人も、貧しい人も、分け隔てなく愛しなさい。今までこんなこと誰も求めなかった。これが、イエスの求める新しさです。
なぜ、そんな相互愛を求めるのでしょうか。イエスはなぜすべての人を愛する必要があるかも説明します。それは、「わたしがあなたがたを愛したのだから」ということです。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」イエスは、誰も分け隔てなく愛した。これが新しく示された互いに愛し合うお手本です。イエスのお手本は、十字架の上に完全に現されました。イエスは正しい人のためだけに命を捧げたのではないのです。イエスの右と左に磔

にされた殺人犯のためにも、イエスの十字架のそばで泣いていた婦人たちのためにも、磔の場面から逃げ去った弟子たちのためにも、すべての人のために命を捧げたのです。すべての人のために命を捧げたのでしたら、わたしのためにも命を捧げてくださったのではないでしょうか。
そのイエスが、掟を授けます。「互いに愛し合いなさい。」分け隔てなく愛し、全人類のために命を捧げたイエスが「互いに愛し合いなさい」と命じたのであれば、わたしたちがあの人は愛さなくてよい、あの人は嫌ってもかまわない、あの人には文句を言ってもよいということになるでしょうか。決してそうであってはならないと思います。すべての人を、互いに愛し合うのでなければ、イエスの命令を果たしたことにはならないのです。
今日、わたしたちはここにミサに集まりました。考え方の違う人が集まりました。礼拝に参加するという目的は同じですが、わたしと考えの違う人が集まっています。「わたしと考え方が真っ向から食い違うので、あの人は愛せません」この言い分は、本当に通用するでしょうか。
中田神父にとっても、考え方が真っ向から食い違う人はいるのです。ここにいるという意味ではありませんが、18年、５つの教会を巡回して、真っ向から食い違う人が誰もいなかったといったら嘘になります。わたしは、「互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように」というイエスの新しい掟の、足元にもたどり着いていなかったと思うのです。
ここで説教の最初に話したことを思い出して欲しいのですが、「昔の仕方でお願いします」と告解のときにお願いしたお父さんがいました。「昔の仕方」とか「新しい仕方」にこだわることこそが、もはや鮮度を失っていると思います。もしも、誰かが「昔の仕方でお願いします」と願ったら、司祭は慌てることなく、その人にとって神のゆるしが十分伝わるような接し方をしてあげる。これこそが、画期的な新しいゆるしの秘跡ではないかなぁと思いました。
イエスは、わたしたちに新しい掟を授けました。分け隔てなく、互いに愛し合う生き方です。自分の信念と合わない人と、互いに愛し合いましょう。わたしが正しいと思っていることに異議を唱える人と、互いに愛し合いましょう。
イエスが、「わたしがあなたがたを愛したように」とのお手本を示したのですから、わたしたちには「この人は愛せません」「ミサに来ている中で、この人は受け入れられません」などという限界を設けてはいけません。まったく新しい、画期的な相互愛の生き方を、困難を感じても一歩ずつ進めていくことができるように、ミサの中で助けを願いましょう。

復活節第６主日（ヨハネ 17:20-26）

復活節第６主日（ヨハネ 14:23-29）

あなたの今は一緒に住んでいる御父と御子イエスのおかげ

わたしの記憶の中には、決して忘れないだろうと思える人々が何人かいます。大人であったり子供であったり、出会った時の年齢はさまざまですが、当時の記憶のままに、一生涯忘れないだろうという人がいます。
ある教会での侍者の話をします。２人１組で侍者をしたいという子供が名乗りを上げて、前日に一通りの練習を終え、いよいよ翌日の日曜日から侍者デビューをしました。２人とも低学年の同級生でしたが、１人はとても賢い子で、もう１人はふつうの子でした。
侍者デビューを無事に果たしたのですが、その日はとても賢い子のほうが、鈴を鳴らしたり聖体拝領の時の受け皿を司祭のそばで持ったり、とてもテキパキと立ち回りまして、さすがこの子は気が利くなぁと感心したのです。
それでも、同じ日に侍者デビューをすれば、いつかは同じことをしたくなるわけで、もう一方のふつうの子も、鈴を鳴らしたりさせようかなぁと思いまして、ある日曜日に向けてこう言いました。「今度は、右と左の役割を交代しようか」。
わたしにはある考えがありました。皆さんも同じことを考えるかも知れませんが、気が利く賢い子がそばにいるのだから、役割を交代しても、ちゃんと合図して導いてくれるだろう。そういう計算で、役割を交代させて侍者に就かせたのです。
狙いは半分的中しました。とても気が利く相方が、すべて指示を出してもう一方を助けてくれています。その様子は、祭壇中央でミサを捧げてはいても、わたしにも十分すぎるほど伝わりました。そしていよいよ、鈴を握って鳴らす場面がやってきました。鈴を握りしめて、いつでも鳴らせますよという張り詰めた雰囲気が伝わってきます。
司祭がパンとぶどう酒に手を差し伸べ、最初に鈴を鳴らす場面です。その時、緊張して鈴を握っている子供が隣の相方にこう言いました。「ねぇ、もう鈴を鳴らすところかなぁ？」「鳴らせ。鳴らせって」そうしているうちに、最初の鐘を鳴らすタイミングを外してしまいました。
次に鈴を鳴らすのは、御聖体に変化したパンを、高く掲げる場面です。わたしが「これは、あなたがたのために渡される、わたしの体である」と唱えている時に、鈴を握りしめた子供は相方に「今度はちゃんと鳴らすけん。もうそろそろかなぁ」という声が聞こえていました。
相方はまた「鳴らせってば」と催促しています。今度こそは鳴らしてくれるものと思っていたのですが、御聖体になったパンを掲げても、深くお辞儀をしても、御血に変化したぶどう酒を高く掲げてもさらにお辞儀をしても、いっこうに鈴は鳴りません。
相方は懸命に「鳴らせ。鳴らせってば」と教えてくれているのに「今鳴らすと？もう、鳴らすと？」と言っているうちにどんどん鳴らす場面はなくなり、最後に司祭が御血を拝領する場面が近づきました。
そこへ、わが子の初めての鈴デビューを楽しみにしていた両親が、たま

らず会衆席から合図を出しまして、司祭が御血を拝領する間際に、「鳴らさんか！鳴らさんか！」と身振り手振りで伝え始めました。それを見た、鈴を握っている息子は何を思ったか「お母さん、ここにいるよ」と手を振ったのです。
結局、この日鈴は一度も鳴りませんでした。最後の最後、司祭が御血に変化したぶどう酒を拝領したあとに、チリンと鳴ったので「なぁんだ。やればできるじゃないか」と思って振り返ったら、鈴を片付ける音でした。
この、子供の侍者たちは、わたしの心の中で今も生き続けています。ただの記憶なのではありません。わたしにとっては今でも生きているのです。ここで、今日の福音朗読の１節を思い出しましょう。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む。」（14・23）特に、「一緒に住む」というところを考えてみましょう。
２人の子供たちは、懸命に侍者の務めを果たしてわたしに応えてくれました。愛らしいなぁとわたしはこの子たちを思いました。そして２人は、一生涯消えない生きた出来事として、わたしの中で一緒に住むことになります。
これは、イエスを愛する人の中に、御父と御子イエスが一緒に住むと言われているのと似ています。イエスを愛する人にとって、御父と御子イエスの姿は単なる歴史なのではなく、自分の中に一緒に住んでくださっていると言えるくらい確かなのです。同じように、中田神父にとっての愛らしいあの２人の侍者は、単なる思い出で残っているのではなくて、その存在が、今も生きているかのように確かなのです。
誰にとっても、今も生きているかのようにその存在がはっきり感じられる出来事が、１つや２つはあると思います。その、鮮やかな出来事を持っている皆さんに語りかけたいのです。御父と御子イエスの存在は、わたしの中で「一緒に住んでおられる」と言えるくらいに鮮やかに刻まれているでしょうか。
御父と御子イエスの姿が、わたしの中で一緒に住んでおられる実感がないという人もいるでしょう。その人のために、２つのことを示しておきたいと思います。どうしても理解できない出来事や受け入れられないことを抱えている人が、わたしの抱えている悩みはどんな意味があるのですかと神に問いかけ、問いかけ続けた結果その意味が説き明かされたとしましょう。
それは、あなたの中で御父と御子イエスが一緒に住んでくださっているしるしです。イエスはこう仰っています。「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」（14・26）あなた自身の力ではどうしても理解できなかったことでも、一緒に住んでおられる御父と御子イエスが、聖霊を通して抱えていたものの意味を説き明かしてくださったのです。
また、さまざまな心配を抱えて暮らしながらも、心の中に大きな平安を感じているとしましょう。周りの人からも、「どうしてあれだけの難しい中で暮らして、そんなに心を落ち着けて暮らせるのか知りたい」と声

を掛けてもらったとしたら、それは、あなたの中で御父と御子イエスが一緒に住んでくださっているしるしです。
イエスはこうも仰っています。「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」（14・27）あなた自身の力では平和を取り戻せない困難の中で、一緒に住んでおられる御父と御子イエスが、聖霊を通して平和を与えてくださっているのです。
もし、「わたしが今の暮らしができるのは、御父と御子イエスが一緒に住んでくださっているおかげかも知れない」と感じることができるなら、あなたには十分に証しをする材料があります。その材料を携えて、今週新たな生活に入ることに致しましょう。

主の昇天(ルカ 24:46-53)

主の昇天(ルカ 24:46-53)

主は天に昇られ、いちばんよいものをくださる

わたしは５人兄弟の第一子長男です。父は巨人の星のスパルタ教育が理想でした。わたしは元来左利きだったのですが、箸と鉛筆を左で持つのはおかしいということで矯正させられました。刃物を扱うのと、スポーツは変わらず左利きです。
父は 40 代まで遠洋漁業の乗組員でしたので、月夜間の３日間しか家にいなかったのですが、帰ってきてわたしが左で箸を持っていようものなら、「何で言われた通りにせんとか」と叱られ、ご飯の入った茶碗のほうを投げ捨てられていました。
最初に断っておきますが、父は巨人の星のスパルタ教育が理想の教育でしたので、ちゃぶ台をひっくり返すといったことは日常茶飯事でした。夫婦喧嘩で物が飛ぶ光景もよく見ました。
そんな怖い父でしたが、子供と遊びたい気持ちはあったようで、わたしを星飛雄馬に見立てて野球を教えてくれました。残念ながらわたしは運動音痴で、野球よりも学研の「科学」と「学習」が大好きな少年だったので、父はストレスがたまっていたに違いありません。
野球を無理やりやらされた挙句に、「はよー、月夜間の終らんかなぁ」という顔をしてキャッチボールをしていました。そんな顔で相手をされても面白いはずがなく、そのうちに父も「もうよか」と言ってグローブもバットも山に投げ捨てたりしていました。
２年前の５月 31 日に父は 71 歳で亡くなりました。肺ガンでした。今になってみると、もっと父を喜ばせてあげられたらよかったのになぁと思います。周囲の話では、野球のときは名サードだったそうです。絵を描かせても惚れ惚れするような絵を描きましたし、メジロの巣箱も、竹ひごを作ることから始めてそれはもう芸術品でした。なぜもっと、もっとたくさんのことを父に習わなかったのだろうと、後悔することばかりです。
けれども、生きていて残してあげることのできるものもあるでしょうが、亡くなって初めて、子供たちに残すことのできるものもいろいろあるのではないでしょうか。一般に財産分与は亡くなってからです。亡くなることで、与えてくれるものに意味と価値が出てくる場合もあるのだと思います。
わたしの父は、たいした財産も残せませんでしたが、わたしは父が亡くなる数か月前に、振り返りをするためのノートを買ってきて、父に覚えていることを書いてくれるように頼んだことがあります。
長男息子の願いだからと、父はまじめに自分史を書き残そうとしていました。病気があっという間に進行して、思い残すことはないというところまでは書けなかったようですが、その時々の喜びや苦労をノートに書き遺してくれていたので、今は大切な形見です。
父の振り返りの中で、わたしの目にとまった部分がありました。わたしが司祭になったときのことを書き残した部分です。病気と闘い、症状が

刻一刻と悪化する中で、わたしのことを忘れず書き残してくれた、それだけでも感謝の気持ちでいっぱいです。少し、紹介します。
「わたしはこれから自分の生活を極める者として、悔いのない、より高い信仰生活に没頭するつもりで毎日のミサに行っていれば神父さまの良い教えが神学校の子供にも、養護学校に入所している子どものためにもあると信じていた。
それから、鯛之浦の神父さまは説教で自由意志という言葉をよく使った。それはイエスさまの生き方を自由に、のびのびと生きることかなと受け止めた。また、地区集会のときにも、自我を捨てることなど大切なことを教えてもらった。（中略）
そうこうしている間に、新司祭をわたしの家に迎えることになった。夢のようだった。それまでにスータンをいただくことから始まって、その１年後には聖書をいただく式にあずかったり、またその１年後には聖体を配るようになり、それから長崎の浦上教会で助祭式にあずかり、１年後に司祭の恵みをいただいた。
貧しさの中にもうれしくてうれしくてたまらなかった。これが神のお恵みであると確信した。その時からわたしはお祈りを切らさないで生きようと決めた。」
地域でも指折りのやんちゃな父でしたが、息子が無事神父になれるように毎日ミサに通うと決心し、そのために給料のいい船の仕事をあきらめて、全くのゼロから牛飼いの仕事を始めたのだと知りました。
多くを捨てて、１つを選び、わたしに残してくれていた。父が亡くなってからようやく、はっきり知りました。生きているときに、口に出して褒めてもらおうとは思わなかったのだろうか。名誉心はなかったのか。今になって、亡くなることで残った父の遺志を思い返すのです。
長くなりましたが、とにかく、生きているうちに残すものもありますが、亡くなることで残してくれるものがあるということです。わたしは自分自身のこの経験から、イエスが昇天したことを考えたいのです。
イエスが天に昇られた。それはイエスにとって素晴らしい出来事でした。けれども、弟子たちにとってはある程度覚悟はあったとしても十分受け止めることのできない出来事だったはずです。
第一朗読を思い起こしてください。使徒言行録でしたが、「イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた」（使１・10）となっています。つまりこれは、弟子たちはイエスが天に昇られるのを、口をぽかんとあけて見ていたということです。
弟子たちが突っ立ったままなので、白い服を着た二人の人がそばに立って、言うのです。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」（使１・11）
イエスは、亡くなって、天に昇られたことで、またおいでになるのです。キリストの再臨は、復活し、昇天したキリストが、再びご自分をお与えになるということではないでしょうか。イエスは亡くなって復活し、昇天したことで、最後にとっておきのものを与えることを計画されたのです。昇天という、完全にお姿がこの世から取り去られるこ

とで、最高のものを与えようとしたのです。
主の昇天は、天に昇って行かれる様子に見とれているだけでは、その意味を理解することはできません。天に昇る、その向こうにあるものは何だろうと考える人にならなければなりません。
亡くなることで、初めて与えることができるようになるものがあります。イエスも、この世からすべて奪い去られたことで、わたしたちにご自身を与え、聖霊降臨を通して聖霊をお与えになろうとしています。イエスさまが弟子たちのもとを去って、最後にお与えになるものは一番よいものに違いありません。もちろん、今日の天気も、イエスさまがお与えになる最高のものでしょう。今日から聖霊降臨までの数日を、楽しみに待って過ごしましょう。

聖霊降臨の主日（ヨハネ 20:19-23）

聖霊降臨の主日(ヨハネ 20:19-23)

聖霊を、一人一人の真ん中に迎える

誰でも、人によって感じ方は違うものです。何に感動するか、何が心に残るか、人それぞれです。聖書の朗読を聞いたとき、どこに心が動くか、これも人それぞれで、中田神父が注目して取り上げている箇所が、必ずしも全員に関心を持ってもらえるとも限りません。
そんなことを踏まえた上での話ですが、小学生の教会学校を受け持っている中で、聖霊降臨の出来事を一緒に学ぶ機会がありました。第1朗読の出来事です。わたしは、この使徒言行録の記録の中で、「すると、一同は聖霊に満たされ、”霊”が語らせるままに、ほかの国の言葉で話しだした。」(使徒2・4)という部分に興味を持ったのですが、生徒たちはそうでもありませんでした。
生徒はこう質問してきます。「神父さま、『炎のような舌が別れ別れに現れ、一人一人の上にとどまった。』と書いてあるけど、髪の毛は燃えんやったとね？」「髪の毛は・・・燃えんやろうなぁ」「どうして？ねぇ、どうして？」
まぁ、ふつうにわたしたちは「心が燃える」と言ったりしますから、”霊”の炎は、心を燃やす炎だと考えれば、髪の毛の心配はいらないわけです。けれども、子供たちはとても興味があったようでした。
聖霊降臨の日に朗読される福音についても、どこに注意が向くかは、人によってさまざまです。わたしは、次の部分に目を留めました。「そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。」特に、「真ん中にお立ちになったこと」が、わたしには強く心に残りました。
今日朗読した箇所は、復活後に弟子たちに現れたイエスを、ヨハネが書き残した場面でしたが、「そこへ、イエスが来て、『あなたがたに平和があるように』と言われた」と書き残してもよかったわけです。「真ん中に立つ」というのは、よほど意識しなければ、気が付かない動作なのではないでしょうか。
そのことから、わたしはこう考えました。ヨハネ福音記者は、出来事を、ただイエスが復活後に弟子たちに現れたとは見ていなかったのだと思います。そうではなく、弟子たちの真ん中に立ったこと、ここに注目していたから、あえて付け加えたのではないでしょうか。端っこに立ったのではなく、真ん中に立った、ということです。
ここにはいろんな意味が込められていると思いました。イエスが来て真ん中に立つわけですから、弟子たちがいた家の真ん中は、ぽっかり空いていたはずです。それは、中心となるべき精神的な支柱が失われていたということでもあるし、弟子たちがイエスを自分たちの真ん中にお迎えしたという意味もあると思います。
彼らは、復活したイエスを自分たちの真ん中に迎えたとき、平和に満たされたのです。家の戸に鍵をかけるほど、恐怖におびえていたのに、イエスが真ん中に来てくださったことで、恐怖は去り、本来のあるべ

き姿を取り戻したのでした。
復活したイエスは弟子たちの真ん中に立ち、彼らに息を吹きかけてこう言いました。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」（ヨハネ 20・22-23）
イエスは弟子たちに、「聖霊を受けなさい」と促します。ここですでに考えてきたことを思い出す必要があります。イエスの招きは、弟子たちの真ん中に、聖霊を迎えなさいということではないでしょうか。もっと言うと、弟子たち一人一人の中心、精神的な支柱として、聖霊を受けるように促されているのではないでしょうか。
その結果、弟子たちはイエスと同じように、罪を赦すという偉大な業を行うことになります。「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」聖霊が、弟子たち一人一人の中心にいてくださるのでなければ、このような偉大な業を行えるはずがありません。
弟子たちへのこうした促しを、イエスはわたしたちにも求めていると思います。あなたがたが平和に日々を暮らすために、わたしを真ん中に迎えなさい。わたしがあなたたち一人一人の真ん中に立つとき、あなたには平和がもたらされます。聖霊を、生活の中心に迎えなさい。聖霊があなたがた一人一人を導いて、偉大な業を行う人にしてくれます。イエスはそうわたしたちに促しているのではないでしょうか。
イエスを自分たちの真ん中に迎えるということで、ついこの前興味深い経験をしました。第１と第３木曜日に病人訪問を行っていますが、ある病院を訪ねてご聖体を授け、帰ろうとしたときに、帽子を忘れたまま帰ろうとしていたのです。
そのご婦人は、わたしが帽子を忘れているのに気づき、「神父さま、帽子忘れていますよ」と声をかけてくれました。よく気が付いたなぁと感心してご婦人に礼を言い、帰りました。話のついでに、しばらくその帽子をかぶっておきたいと思います。
帰り道、わたしは車の中で、いつものように日曜日の説教をどうまとめるか考えながら司祭館に戻っていたのですが、さっきのご婦人とのやりとりを思い出したのです。わたしが病人の立場だったら、帽子を忘れていますよと声をかけることができただろうか？後で思い出して、あぁ、声をかけてあげればよかったなぁと後悔するのが関の山ではないだろうかと思ったのです。
どうしてこのご婦人はよく気が付いて教えることができたのだろうか。あれこれ考えてみて、こんな思いにたどり着きます。あのご婦人は、わたしを真ん中に迎えてくれたから、帽子のことにも気づいて声をかけることができたのではないか。
つまり、こういうことです。そのご婦人は、ご聖体のイエスを携えたわたしを真ん中に迎えて、わたしが無事にその場を立ち去るまで、その場の中心にわたしを置いてくださっていたということです。わたしと言うよりもむしろ、ご聖体のイエスを中心に置いてくださっていたのでしょう。そして当然、中心にいる人を最優先に物事を考えるわけですから、わたしが無事に帰っていくまで、そのすべての動作に注意

を払ってくれた、ということです。
もし、ご聖体を携え、見舞いに来たわたしを中心に置いてくださっていなかったら、結果は違っていたことでしょう。自分の脇に中田神父が座っているという感覚だったら、帽子にも気づかず、後で気づいても「あー、神父さまも忘れっぽいなぁ」で終わっていたかもしれません。ご聖体を運んできたわたしをその場の中心に置いてくださった。それが、小さな出来事の中に、すばらしい意味を見つけることに結びついたのだと思います。
ちょっとしたことですが、そのちょっとしたことの中にすばらしい意味を見つけることができるのは、中心にイエスをお迎えするかどうかにかかっています。今日は聖霊降臨ですから、聖霊を自分の中心にお迎えすることができるかどうかにかかっている、と言い換えてよいでしょう。同じことは、わたしたち皆に、起こりうることなのです。
１つの祈りを、今週１週間の道しるべにしましょう。祈祷書の中にある、「始業の祈り」です。「聖霊来りたまえ、信者の心に満ち給え。主の愛熱の火を、我らに燃えしめ給え。」「聖霊来てください」と願うとき、ぜひ生活の真ん中に、一人一人の真ん中に来てくださるように願いましょう。聖霊を、真ん中に迎えることで、わたしたちはなすべきこと、歩むべき道を、正しく導いてもらうことができます。

三位一体の主日（ヨハネ 16:12-15）

三位一体の主日（ヨハネ 16:12-15）

三位一体の神秘に生活の中で触れる

今日は三位一体の主日です。今回の説教は、ずいぶん苦労しました。水曜日の出張の時から、何を話そうかなぁと考えてきたのですが、木曜日に福見の司祭館に泊まった日にもまとまらず、金曜日の晩にもまとまらず、これは困ったなと思いながら土曜日の朝を迎えました。
土曜日の朝から、気分転換に髪を洗おうと思いまして、シャンプー１回分を手に取り、頭を洗面台に突っ込んだときに、聖霊が降りまして、あっ！これで何とかまとまりそうだと直感しました。この日のシャンプーと、三位一体が、わたしの中では１本の糸でつながったのです。
まず、三位一体の神秘を思いめぐらしてわたしが感じる神の姿を示したいと思います。それは、父と子と聖霊が、完全に一体でありながら、どの面を取り上げても、同じであるという姿です。
唯一の神で、父と子と聖霊の三つのお方（位格）でおられます。それは、三位一体の神は、どの面を取り上げても、まったく同じ神であるということです。御父の姿から眺めても、御子の姿から眺めても、聖霊の姿から眺めても、同じ唯一の神が見える、ということです。これが、わたしの今回の黙想で得られた答えです。
この黙想の実りが、シャンプーとどうつながるかと言いますと、シャンプーの中身は、全体が均一に混ぜあわされていますから、どこをとっても同じシャンプーです。1回目にポンプで押し出した部分も、50 回目に押し出した部分も、同じ効果を持っています。人間の作ったものですから、完全ではないかもしれませんが、どこを選んで取り出しても、同じシャンプーの効果を得られるのです。
洗面台に頭を突っ込んで、頭を洗っているときに、あー、これは使えるなと思いました。三位一体の神は、もちろん混ぜあわされたものではありませんが、父と子と聖霊の三位の神でありながら、唯一の神でおられます。そして、どの姿から眺めても、同じ唯一の神を見ることができるのです。
わたしたちのほとんどが、御子イエスから神の姿を眺める人々だと思いますが、聖霊から神の姿を眺めようとする人々、たとえばそれは、聖霊運動に熱心な人々も、思い込みを取り除いて神を見出そうとするなら、同じ神を見つけ出すはずなのです。
ちなみに、全体と、部分とが、同じでないものもこの世の中にはあります。いちばんわかりやすいのは、お札です。お札は、50 分の 1 に切ったものと、全体とでは同じとは言えません。シャンプーや石鹸や、豆腐やジャガイモは、50 分の 1 でも同じと言えますが、お札はそうはいきません。全体で価値がありますが、ほんのわずかの切れ端では、価値がなくなってしまう種類のものです。
ここから、三位一体の神のお姿を考える材料になるものは、シャンプーでも石鹸でもよいのですが、ある部分だけでは全体と同じと言えないものは、材料としては使えないということです。そこで、わたしたちの生

活の中に、三位一体の神秘に心を向けるものを見つけてみましょう。
すぐに思いつくものは、家族の愛です。家族が互いに持っている愛は、それが真実なものであれば、保護者のほうから眺めても、子供のほうから眺めても、同じ愛であるはずです。夫婦の愛、同じ志で生活をしている人、たとえば修道生活をしている人々の相互愛も、真実なものであれば、一方から見たものが、他方から見て食い違っているということはないはずです。そういう愛の中で、共同体が、夫婦が、家族が暮らしているなら、そこから三位一体の神の愛を学ぶことができます。互いの愛でありながら、唯一の愛なのですから、そこに生きる人々は、三位一体の神の愛をすでに生きているのです。
もし、唯一の愛を生きていないとしたら、その愛にとどまっていても三位一体の神の愛に向かうことができません。この子を独占して、わたしの思い通りに支配しよう。そうした考えの保護者がもしいるとして、その人の愛は子供の目から見たら迷惑この上ない愛なのですから、どれだけその独りよがりな愛を続けても三位一体の神の愛に触れることはできないのです。
生活に結びついていて、ぜひ考えてほしいものをもう１つ示したいと思います。それは、ミサ聖祭です。ミサに、週に１度参加している人も多いと思います。中には、参加できるのに、年に数回とか、あるいは申し訳程度に年に１度だけ通っている人もいるのかもしれません。
すべての人にもう一度考えてもらいたいのは、日曜日を含む主日のミサと、それ以外の週日のミサには、違いがあるだろうか、ということです。三位一体の神を学ぶ材料は、全体として唯一であり、部分を取っても全く同じものが学ぶ材料に適していると言いました。
わたしは、ミサもまた、最高の学びの場ではないかと思うのです。全世界で、365 日絶えずミサがささげられていますが、主日のミサは恵みがいっぱいあって、週日のミサはちょっとしか恵みがないなどということがあるでしょうか？
主日のミサの中でイエスは、ご自分を完全に御父にささげているけれども、週日のミサでは部分的にしかイエスはご自分を御父にささげないというようなことが、起こりうるでしょうか？決してそんなことは起こり得ないと、だれでも分かります。
そこで、無理をしない範囲で結構ですから、週日のミサに参加してみましょう。高井旅教会は、物理的に無理なのですから、たとえば今話したミサのことを、祈りに換えて、主日には祈りをするけれども、週日には祈りをしないなぁと感じたら、祈りは主日と週日で効果が変わるだろうか？そんなはずはないから、毎日祈りをささげよう。そんなふうに当てはめてみてください。
週日のミサに参加してなかった人が、１週間のうち１日でも参加するようになれば、どの日を取り上げても全く同じ恵みであるミサを通して、三位一体の神をより近くに感じることができるようになると思います。
三位一体の神の神秘は、決して雲の上の遠い遠い教えではありません。日々の生活で生きることのできる教えです。ぜひ、今日示したことを１つの参考にして、わたしたちは三位一体の神のお姿に、生活の中で触れることができるのだと、自信を持って派遣されていくことにいたしまし

よう。

キリストの聖体(ルカ 9:11b-17)

キリストの聖体(ルカ 9:11b-17)

わたしたちも人々のための食べ物になろう

今日は、「キリストの聖体」の主日です。今日のキリストの聖体の主日で、一連の特別な名前の付いた日曜日が終わり、来週からは「年間の主日」に移ります。念のため、名前の付いた主日を思い出しますと、ご復活の後のご昇天から始まって、聖霊降臨、三位一体、キリストの聖体、この４つが、連続してやってきます。皆さんもぜひ、４つの主日の名前と並び順を覚えてほしいなと思います。
さて、キリストの聖体の主日に当たってわたしが考えた要点は、「食べ物は、食べられたら、目には見えなくなる」ということです。この、一見当たり前のようなことを鍵に、聖体について黙想してみたいと思います。
まず、ふだんの食事を考えてみましょう。おいしくいただいた食事は、すっかりおなかの中に入って、ほとんど何も残りません。けれども、何も残らないと言っても、何も食べなかったのとは違います。食べた物は栄養となり、体を養うのです。
では、聖体も同じように考えることができるでしょう。ミサに参加し、聖体を拝領すると、わたしたちは恵みに満たされます。食べ物となったキリストは、わたしたちが拝領してしばらくすると見えなくなりますが、拝領しなかった人とは明らかに違いがあります。拝領した人は確かにキリストに養われるのです。
また、食べ物は、食べてしまえば消えてなくなるけれども、要らないとは決して言えません。補助食品も含めて、どうせ消えてなくなるものだから、毎回毎回食べなくてもよいなどとはだれも考えないでしょう。同じように、わたしたちの心を養う聖体も、見えなくなってしまうのだから要らないではないか、とは言えないのです。
むしろ食べ物は、食べても食べてもなくなってしまうものなのに、わたしたちの生活になくてはならないものなのです。聖体も、拝領して 30 分もすればおそらく見えなくなってしまうものですが、わたしたちの心の糧として、命の糧として、なくてはならないものなのです。
ここから、もう１つのことを考えたいと思います。イエスは、わたしたち人類すべてのために、十字架の上で命をささげ、お亡くなりになりました。わたしたちの目から、消えてなくなったのです。食べ物が、食べられることで消えてなくなるように、イエスは、十字架の上で命をささげることで、わたしたちのために消えてなくなられたのです。
十字架の上で命をささげたことで、見えなくなるというのは意味深いと思いました。目には見えなくなりましたが、復活したイエスが弟子たちを、婦人たちを、信じるすべての人を生かし続けました。食べ物が消えてなくなっても、食べた人を生かすように、イエスは十字架上で亡くなられて復活し、わたしたちも含めすべての人を生かしてくださいます。つまり、十字架の上で命をささげた姿の中に、聖体の恵み、聖体がわたしたちにもたらす働きが、示されているわけです。

食べ物は、人間になくてはならないものだと言いました。聖体も、信じる人にとってなくてはならないものです。そしてすべての人にとって、イエスが十字架で亡くなられたことは、なくてはならないものだったのです。
そこで、わたしたちの生活を振り返ってみましょう。わたしたちは食べ物の大切さを知り、聖体も信じる人にとって必要であることを十分わきまえています。もう一歩踏み込んで、生活する中で出会うすべての人のために、体の食べ物でない、心の食べ物を指し示してあげる必要があるのではないでしょうか。すべての人の命の糧として、十字架の上で亡くなられたキリストを、何かの形で指し示す必要があるのではないでしょうか。
食べ物の大切さも知っています。聖体に養われる素晴らしさも知っています。では、出会うすべての人のために、聖体に養われる素晴らしさを、どうやって示していけばよいのでしょうか。
次のような方法はどうでしょうか。「わたしたちが、この社会にあって聖体となる」という方法です。イエス・キリストそのものになりきることはできませんが、わたしたちが、出会うすべての人の食べ物となることは可能だと思います。
わたしたちが出会う人々は、「すべてにこえて、神を愛する」という食べ物を知らないかもしれません。わたしたちが出会う人々の中にあって、「すべてにこえて、神を愛する」姿勢を示すなら、出会った人々はわたしを通してイエス・キリストの第一の掟を食べることになります。
「隣人を、自分のように愛する」という食べ物を、「そんなもの受け入れられない、食べられない」と思っているかもしれません。そんな中で、わたしたちが隣人を自分のように愛することで、イエス・キリストが与えてくださった第二の掟を知り、「受け入れてみよう、食べてみよう」と考えるかもしれません。
つまり、出会う人々の真ん中で、イエス・キリストが示した食べ物を食べ、「これは食べることができます。これを食べると豊かになります」と証しをすることで、わたしたちは出会う人々の食べ物、人々のための聖体となれると思うのです。
食べ物は大切です。体の食べ物も、心の糧も大切です。わたしたちはイエス・キリストという、最高の命の糧をいただいているのですから、その恵みを出会う人々に届けましょう。まずそうな食べ物ではいけません。わたしたちがおいしそうな食べ物となって、出会う人々にイエス・キリストに養われる素晴らしさを証ししましょう。わたしたちが拝領する聖体が、この証しのわざを可能にしてくれます。

年間第 11 主日(ルカ 7:36-8:3)

年間第 11 主日(ルカ 7:36-8:3)

多く赦された者としてイエスに従う

教区司祭の黙想会に参加してきました。高見三明大司教さまに、期間中１度だけ声をかけていただきました。「新しい任地には慣れたかね」とか言ってもらえるのかなぁと思ってましたが、「君、太ったんじゃないかね。」これだけでした。それだけかい？と思ったんですけど、まぁいいです。
さて、今週の福音朗読は、「罪深い女を赦す」という物語が含まれた箇所です。わたしはまず、イエスが示したたとえ話からもう一度考え直してみました。イエスがファリサイ派の人に示したたとえ話の登場人物は、「金貸し」と、「金を借りた２人」しか登場しません。
わたしはこのたとえは、ファリサイ派の人に考えさせる一般的なたとえとして示しているのだろうと思っていましたが、もしかしたらイエスは、「金を借りた２人」を、一方をファリサイ派の人、もう一方を罪深い女と断定していたのではないかと考え直したのです。
すると、金貸しはどう考えてもイエスご自身ということになります。イエスがお金を２人に貸しているはずはありませんから、ひとまず「何かを貸しているのだ」としておきましょう。そして、２人とも、イエスが貸し与えたものを返す当てがないのです。
50 デナリオンとは、一般的な労働者の賃金 50 日分ですが、これは、返そうと思えば、返せる額のはずです。けれども、たとえ話の中では返すことができません。ということは、イエスから借りている「何か」は、その大小にかかわらず、人間が返せないものだということになります。
「二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。」（7・42）
イエスの問いかけにシモンは的確に答えました。「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います。」そしてイエスは、「そのとおりだ」と言われました。これも、「ファリサイ派の人と罪深い女のうち、どちらが多くイエスを愛するだろうか」と聞いているわけです。シモンは、その答えを的確に知っていました。自分よりも、罪深い女のほうが、イエスを愛していたのです。
ここで、引っかかっている疑問を解きましょう。罪深い女とシモンという名のファリサイ派の人、この２人はイエスにどんな貸し借りがあるのでしょうか。そもそも、２人ともイエスと初対面なのに、いつ貸し借りができたのでしょうか。皆さんはどう考えますか？
わたしは、人はすべて、イエスに借りがある、そう思います。それは罪です。ことの大小はあるでしょうが、大きな罪はもちろん、どんなに小さな罪でも、人間は神であるイエスに犯した罪を償えないのです。イエスが、帳消しにしてくださらなければ、髪の毛一筋ほどの罪でも、わたしたちはその罪を消し去ることはできないのです。
この、決して返すことのできない罪の赦しに、ファリサイ派の人は気づかず、罪深い女は気づいた。その違いを、イエスはたとえ話になぞ

らえて話しかけたのではないでしょうか。イエスを神と認め、罪深い女であるがゆえに、罪の代価を払えないことにいち早く気づいた。イエスのもとに涙ながらに近づいた女性は、どんなに小さな罪でも、償えないことに気づいた人間の代表だったわけです。
イエスは女に、「あなたの罪は赦された」（7・48）そして「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と声を掛けました。「罪深い女」と町中で噂されていた女性でしょうから、「あなたの罪は赦された」というのはすんなり理解できます。問題はそのあとの、「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」（7・50）という呼び掛けです。彼女の行動から信仰が読み取れるのでしょうか。
この女性は、どんなに小さな罪でも、人は償えないのだと気づいたのでした。すると、目の前におられる神の子イエスに、憐れみを願うしかない。彼女はそう考えて、あのような大胆な行動に出ます。そこにイエスは、彼女の信仰を見いだしたのです。ファリサイ派の人シモンにも、自らの罪を悔いる機会はあったはずですが、イエスにすがるだけの信仰は持ち合わせていませんでした。
この物語が、わたしたちに呼び掛けていることは何でしょうか。それは、わたしたちは、神であるイエスに、すべてを委ねなければ、「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と言ってもらえない、ということです。
わたしたちは、どんなに小さな罪でも、自分で消し去ることのできない被造物です。神が、帳消しにしてくださらなければ、借りを返せない存在です。そのことがはっきりわかれば、「あの人より自分はましだ」などと、誰かと自分を比べても仕方がありません。誰かと自分を比べることなく、まっすぐ神に心を向けて、「世の罪をのぞきたもう神の子羊、われらをあわれみたまえ」と申し上げましょう。
ところで、わたしたちが犯した罪を決して拭えないとすれば、「何をしても無駄だ」と、諦めてもよいのでしょうか。今日の福音朗読のもう１つの出来事が参考になります。マグダラのマリア、ヨハナ、スサンナ、そのほか多くの婦人たち。彼女たちはイエスと弟子たち一行に奉仕していました。「わたしたちはこれくらいしかしてあげられない」そういう気持ちだったのではないでしょうか。これは大いに参考になると思います。
皆さんの身の回りを考えてみてください。大それたことをする機会はそんなにないかもしれませんが、ちょっとしたお手伝いの機会はたくさんあると思います。それも、「これくらいしかできんけん」と言えるような、小さな手伝いの場は、きっとあると思います。ぜひ、そんな協力の場面を逃さないでください。そうした小さな場面で、確実にお手伝いすることが、神の深いあわれみを体験する近道だからです。
わたしたちは、神への借りを、これっぽっちも返せない存在です。よくそのことをわきまえ、できる小さな奉仕を、「こんなことくらいしか、わたしにはできません」そんな謙虚な心で確実に積み上げていきましょう。
一行に奉仕する婦人たちの中に、わたしたちの教会の守護聖人であるマグダラのマリアが登場しました。返せない借りがあるからこそ、イ

エスへの真の信仰が芽生えます。聖女に倣い、すべてを主イエスに委ねて、従っていくことができるよう、恵みを願いましょう。

年間第 12 主日（ルカ 9:18-24）

年間第 12 主日(ルカ 9:18-24)

試練の中でも信仰告白しよう

今日の福音朗読は、「ペトロの信仰告白」の場面です。イエスは弟子たちに、「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」（9：20）と問いかけました。すでに人々がイエスのことを、「洗礼者ヨハネ」とか、「エリヤだ」とか、「だれか昔の預言者が生き返った」と噂していました。そんな評判を知った上で、弟子たちに自分の言葉で、イエスをどう思っているのか、答えてほしかったのです。
イエスを誰かに例えるというのは、「すでに認められている人」「すでに敬われている人」と比べて考えようとするものです。イエスは弟子たちにそのような答え方を望みませんでした。自分の言葉で、誰とも比べずに、どう思っているのかすなおに言ってほしかったのでしょう。
わたしも、自分の言葉で答えることはすばらしいと思います。心の底から、神に対して思っていることが言えた時、それはすばらしい信仰告白になると思います。たとえ、言葉がつたなくても、自分が心から言った言葉には重みがあるのです。
こんなことがありました。中学生の堅信組を担当していた時でした。その日、堅信式前の試験を受けるために中学生が集まっていました。わたしは祈りを覚えているか尋ねる担当でした。たいていの中学生は、覚えてきた祈りをすらすらと唱えます。
内心わたしは、「これは、すらすら言えるかどうかの試験じゃなくて、これからもずっと、祈る場面で祈ることができるかを問うものなんだけどなぁ」と思っていました。すらすらと、祈りを唱える中学生たちに、正直退屈していたのです。
そこへ、うってつけの中学生が目の前に座りました。祈る習慣が身についていないのか、どの祈りを言わせてもうろ覚えです。「すらすら言えるかどうかの試験」であれば、とっくに不合格でした。
途中わたしは、「食前の祈りを唱えてごらん」と言いました。その中学生は一言も口を開きませんでした。きっと、食前・食後の祈りを家庭で唱えていないのでしょう。そこでわたしはこう言ったのです。「神さまに感謝してから、ご飯を食べることはすばらしいと思わないか？その気持ちを、言葉に表してごらん。それが、あなたらしい『食前の祈り』だよ。」
するとその中学生は、しばらく考えてから、「神さま、わたしはいままで神さまに感謝して食べたことがありませんでした。これから、神さまに感謝してご飯を食べようと思います。いただきます。」と答えてくれたのです。
本来、この子の「祈り」の試験の点数は、ひどい点数がつくはずだったのですが、わたしは、中学生の最後の祈りに心を打たれまして、30点のうち20点をつけてあげました。あとで合格不合格の判定会議に呼び出され、なぜこの中学生が20点ももらっているのだと、ずいぶん責

められました。
もう一度、ペトロの信仰告白の場面を振り返ってみましょう。イエスが弟子たちに、自分のことをどう思うか尋ねた場面、実は前置きになる出来事が起こっていました。それは、5千人に食べ物を与えるという奇跡です。普通であれば、これほどの奇跡を目にして、イエスが誰であるかを言おうとするなら、「奇跡をおこなえる人」と言ってしまいそうなものです。
けれども、イエスが奇跡をおこなうことをご自分の中心であるかのように考えるのは望んでいなかったと思います。弟子たちも気づいていました。なぜなら、すでにいろんな例え方をされていることを説明して、それでもなお、「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」と問いかけてきたからです。
弟子たちの口は黙ってしまいました。そんじょそこらの（ありきたりの）答え方では、イエスは満足してくれないことは明らかでした。何をどう言っていいのか、ためらってしまったのです。弟子たちも、下手なことを言って、「そんなことしか答えられないのか」とは、言われたくありませんでした。
そこへ、ペトロが弟子たちを代表して答えます。「神からのメシアです。」（9・20）ペトロには、答えがイエスにとって満足できるものかどうか、自信はありませんでした。ただ、弟子たちの誰もが何も言えなくなった時、何か答えなくちゃと思って、必死に答えたのです。
ペトロの答えは、実際には素晴らしい答えでした。イエスがもし、5千人に食べ物を与える奇跡をおこなってなくても、いろんな華々しい活躍をしてなくても、わたしにとってあなたは「神からのメシアです。」それだけ言えれば十分なのです。
ではわたしたちも考えてみましょう。わたしが信頼し、信じているイエスは、華々しい奇跡をおこなってくれなかったら、輝きはなくなるのでしょうか。もし、輝きがなくなれば、もう信じられなくなるのでしょうか。
わたしたちの信じるイエスは、華々しい人でなくても、信じるに値する方です。そのことをどこまで確信を持てるか、それが今日問われていると思います。わたしたちがイエスを信じ、従っていく道のりは、ちやほやされたり、自慢できたりできるような道のりでないことは明らからです。
そんな、世間的なものは何もなくても、「あなたは神からのメシアです」と答えることができるか、そのことが問われています。今すぐに、イエスにきっぱりと信仰を表す力は備わっていないかもしれません。それでも、「あなたは神からのメシアです」と繰り返し答えて、わたしの答えをゆるぎないものにしましょう。わたしたちの信仰告白が揺るがないなら、イエスは必ず、わたしたちに答えてくださいます。

年間第 13 主日(ルカ 9:51-62)

イエスのまなざしを最優先に置いて生きる

金曜日、マリア文庫という活動団体からお会いして話したいことがあるということで、長崎に行きました。どんな話をしたいということは聞かされずに行ってみたら、目の不自由な方々のために活動している自分たちマリア文庫は、現在代表者が修道会のシスターになっているけれども、現在のシスターは高齢で、健康状態に不安があり、この先、代表者として体を張って活動に関わっていくことは困難ですという話を聞かされました。
まぁ、だいたいそういう場所に 40 代のわたしが連れてこられたということは、今後の安定した活動継続のために、神父さまにマリア文庫の代表を引き継いでもらいたいというお願いをしたいということなのですが、わたしははっきりと、お願いの仕方が乱暴過ぎやしないかと言いました。考えてもみてください。待ち合わせの場所と集合時間を知らされて、行ってみたら新しく代表を引き受けてくださいというのですから、そんな話があるかと言いたくなるのは皆さんも理解してくれるでしょう。
けれども、30 年も、全国の目の不自由な方に録音を通して奉仕しているこのマリア文庫に 8 年間関わってきたわたしが、代表が続けられなくなろうがそんなこと関係ありませんとも言えないことはうすうす気づいてはいました。活動 25 周年の記念行事にも関わりましたし、30 周年の祝いは前任地の馬込教会で行い、ここまで続けてこれて本当によかったと、会員の皆さんと喜び合ったのです。だから、わたしに今後の代表となって引っ張ってほしいという気持ちはわからないでもありません。
ただ、今後目指していく道筋の資料もきちんと準備していたらしいのに集まった目の前で渡され、肝心の「代表者の選任でたいへん困っている」という実情も知らされずに呼ばれてみたら、「さあ代表になってくれませんか」と言われても困るのだと、きっぱり言ったのです。
それでも、2 時間も駄々こねたあげくに、近い将来、目の不自由な方々に奉仕する「声の奉仕会マリア文庫」の代表にならざるを得なくなりました。
ふくふくしながら、その日長崎で外食をし、それでも目の前の仕事である日曜日の説教の準備を考えている間に、マリア文庫の現在の代表者と、中心になって働いてくれるメンバーとが持ってきた難題は、ひょっとしたらイエスさまから今のわたしに突きつけられている挑戦なのかもしれないなぁと思うようになったのです。
福音朗読を読み返してみましょう。イエスはエルサレムに向かう決意を固め、途中サマリアの町を通ります。サマリア人はイエスを歓迎しません。そこで弟子たちはイエスさまのお通りだと見せつけるために、天からの火で町を焼き払いましょうかと提案しますが、イエスはそれを望みませんでした。弟子たちはイエスとともに、歓迎されていない

町の人々の間を通っていく屈辱を一緒に味わうことになります。イエスが通る道を、弟子にもついてきなさいと求めるのです。
また、弟子の覚悟を求めるさまざまな出来事も起こりました。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」（9・58）それでもあなたはついてこれるかと、尋ねている部分です。ほかにも、家族に不幸が起こったとき、あなたはわたしについてこれるかと尋ねます。これも、イエスの呼び掛けにまっすぐに従う覚悟を問うています。家族にお別れを言いに行かせてくださいという場面も、おなじです。
わたしはこれらの福音朗読箇所を読み返しながら、イエスがあなたの歩く道に目を注いでおられると気づいたとき、それにまっすぐについてこれるかと尋ねているのかなぁと思ったのです。「わたしに従いなさい」とイエスが声を掛けられた。同時に、家族を送り出してからついて行こうとしたら間に合わないとわかったとき、あなたに注がれているイエスのまなざしに、まっすぐついてこれるか。そう問いかけているのだと思いました。
そして、自分自身金曜日の出来事を振り返ったのです。「あなたにこういう十字架を担いでもらうことで、わたしに従ってもらいたいのだが、引き受けてくれるか。」そういう問い掛けだったのかなぁと、今になって思ったのです。いろいろ文句を言うことはできるでしょう。話の持って行きかたが乱暴過ぎやしないか。どうして事前の連絡ができないのか。ほかに誰かと話し合った上でのことなのか。いろいろ難癖をつけることは可能ですが、30年間のマリア文庫の歩みのうち4分の1も関わってきたわけですから、イエスさまはわたしにも目を注いでくださり、イエスのまなざしにまっすぐに従ってくれるかどうかが、今試されているのかなぁと思いました。
では皆さんにも、同じことを考えてもらいたいと思います。イエスは、すべてのことに目を注いでおられます。そのイエスのまなざしに、わたしたちはまっすぐに従おうと思っているでしょうか、ということです。福音の朗読の中で、さまざまな人が、何かを優先してから、それからイエスに従いますよと答えますが、イエスはきっぱりと、「最優先はわたしだ」と言うのです。つまり、イエスが目を留めてくださった出来事に、イエスのまなざしに、最優先に答えてほしいのです。
わたしの経験から言いますと、イエスのまなざし、イエスの望みを最優先しないなら、そのときわたしはイエスの望みをいちばん最後に回しています。イエスの期待を最優先しないなら、2番目にしているということは起こらず、たいていいちばん最後の後回しなのです。だから、イエスはご自分の望みを最優先にしなさいと言っているわけです。
わたしたちは、はっきりとであれうすうす気づいている場合であれ、イエスのまなざしを感じることがあります。このイエスのまなざし、イエスの思いに気づいていながら、それを横に置くことは、2番目3番目に回しているのではなくて最後尾に回しているはずです。そうではなく、きっぱりと、最優先に考えて答えようとするとき、わたしたちの信仰の歩みはまっすぐなものになるのではないでしょうか。
「あなたはわたしに従いなさい。」イエスはご自分のまなざしに、ま

っすぐに従う人を探し求めておられます。イエスの思いに従うとは、最優先に従うことと同じなのです。その覚悟を、１人でも多く祭壇上のイエスに言い表すことができるよう、恵みを願いましょう。

年間第 14 主日（ルカ 10:1-12,17-20）

年間第 14 主日(ルカ 10:1-12,17-20)

宣教者とは身をもって神の働きを示す人

人間は面白いもので、最初に習った人、その人から習ったことなどをとても大切にする傾向があります。わたしは初聖体の勉強を、自分が通っていたお告げのマリア経営の保育所の、園長先生から習いました。わたしの中では、この初聖体の準備をさせてくれたシスターが「シスターの鏡」であり、「マリアさまもきっとこういう人に違いない」と思っていたものです。
大人になり、司祭になって、初聖体の準備をさせてくれたシスターと再会しました。白髪交じりのおばちゃんになっていました。わたしはその時こう思ったのです。「初聖体の時に教えてくれたシスターは、マリアさまのようにステキだったのに。」記憶の中のシスターがずいぶん変わっていたのでびっくりしたのです。20 年ぶりに再会したのですから、無理もありません。
話が面白いのはここからで、それでも、今でも、わたしにとってマリアさまはこんな人に違いないというのは、今はおばあちゃんになっているそのシスターなのです。永遠に、シスターの鏡はシスターの鏡で、変わらないのです。ここが不思議だなぁと思います。
30 年以上経った今になって思うことは、わたしは幸いに初聖体のけいこを受けながら、シスターを見ていたのではなくて、シスターの中に何かを見ていたのだろうということです。だから、実際のシスターが年齢を重ねても、シスターの中に何かを見る態度が変わらないので、今でもステキなシスターであり続けるということです。
ただ、その人の中にも、何かがなければ、見ることができないのも確かです。わたしが、その人を見ているのではなくて、その人の中にある何かを見ると言っても、その「何ものか」が備わっていない人には、見ようと思っても見ることはできないわけです。
今週の福音は、イエスが七十二人という大勢の弟子を、町や村に二人ずつ派遣し、その結果報告を聞いて、また次の準備をさせるという内容です。その、二人ずつ派遣する場面で、目に留まった部分があります。２つ取り上げると、１つは、「財布も袋も履物も持って行くな。途中でだれにも挨拶をするな。」（10・4）との命令があります。
「それでは、何を持って行けというのだろうか。」皆さん疑問に思うことでしょう。それがわたしが最初に例を挙げた「何かを」持っていく、ということです。財布や、袋や、履物ではなくて、イエスの弟子である、イエスに派遣されているという何かの証しを、持って行きなさい。それこそが、あなたが人々の前に証しをする道具になります、ということなのです。
もう１つは、「どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。」（10・5）という命令です。これは単なる挨拶ではなくて、「神の国が、遣わされた弟子たちを通して、もうそこまで来ていますよ」というよい知らせのことです。遣わされた弟子た

ちが神の国を与えてくれるのではありません。遣わされた弟子たちの中に、イエスから受け取った「何か」があるので、神の国の喜びが人々に届くのです。
そこで、わたしたち自身に当てはめて考えましょう。わたしたちがどこかへ出かけるとき、出かけた先で証しができるかどうかは、わたしが「イエスから託された何か」を持っている人かどうかにかかっています。イエスの弟子として、「イエスの何か」を持っている人かどうか。例を２つ挙げておきましょう。
１つは、人生で上向きの時期に考えてほしいことです。充実して、何不自由ないと感じていても、「イエスの何か」を備えているとは限りません。イエスが充実して、満ち満ちているときに何をしたか考えてみましょう。イエスは父なる神に感謝しました。たとえば、食事をするとき、御父に感謝の祈りを唱えてから、パンとぶどう酒を弟子たちに分け与えました。
こんな場面もあります。親戚のラザロが死んでしまったとき、墓の石をとりのけさせて、「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。」（ヨハネ 11・41）と言ってから、ラザロをよみがえらせたのです。どんなことにも、神に感謝できる。この心がけを持っている人は、確かに「イエスの何か」を持っている人で、どこにいてもイエスを証しできる人だと思います。
もう１つ、すべてをはぎ取られ、不安のうちにある時期に考えてほしいことです。そんな中でも、「イエスの何か」を持っている人は、証しをする人になれます。例えば、病院に入院しているときは、すべてをはぎ取られ、不安の中にいるはずです。そんなときでも、「祈り」を忘れない人は、たとえベッドに張り付けになっていても、イエスに遣わされた立派な証し人だと思います。
わたしは、お見舞いをした時、病人の枕もとに祈祷書が置いてあるのを見ると、とても慰められ、また勇気づけられます。「あー、この人は、このベッドから離れられないけれども、イエスの弟子として、立派に証しをしている人だなぁ」と、大いに励まされるのです。
毎日大声で祈ってなくてもかまいません。ページをめくり、静かに心を神に向ける。その姿が、同じ病室の人、勤務している人、ときには医者に対しても、証しをすることになるのです。
２つ、例を挙げました。殉教にあっても、逆境にあっても、わたしたちはイエスの弟子として、自分のいるその場所で証しを立てましょう。そのためには、「イエスに託された何か」を、保ち続ける必要があります。日々の暮らしで、イエスのどんな部分を、わたしは受け取って保ち続けようか。保ち続けることができそうなものは何だろうか。考えておきましょう。
今日、霊名のお祝いを皆さんがしてくださるということで、本当に感謝の心でいっぱいです。わたしも、「これだけはイエスに託されたタレントだから、失わないようにして証しを続けたい」そう言える部分に磨きをかけていきたいと思います。

年間第 15 主日(ルカ 10:25-37)

何と書かれているか、それをどう読んでいるか

２つの用事で、長崎に出ました。１つは、８月１日に浜串小教区の子供たちを佐世保地区主催のドッヂボール大会に連れて行こうと計画しているのですが、１日が日曜日なので、ピンチヒッターに直接交渉に行くためでした。もう１つは、選挙のことです。まだ転勤して３か月経っていないので投票用紙が来ていません。伊王島に期日投票しに行くことを思い立ちました。
８月１日（日）のピンチヒッターをお願いしたのは長崎コレジオの神父さまです。幸いに、引き受けてくださったので、長崎まで来た甲斐があったのですが、生徒たちを預かる神父さま方のご苦労を聞くにつれ、本当に大変な仕事だと感じました。
さて福音は、「善いサマリア人」のたとえです。わたしには次のイエスの言葉が響いてきます。「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」（10・26）律法に書かれていることは、律法の専門家であればよく知っているに違いない。だが、それをどう読んでいるのか知りたいと、イエスは求めています。
たとえ話に、３人が半殺しの目に遭っている人の前を通ります。「隣人を自分のように愛しなさい」との勧めは知っていますが、それを実際の場面で、「どう読んでいるか」が問われています。祭司とレビ人は道の向こう側を通っていきました。教えについて、頭の上での理解でしかなかったのです。
ところが、旅をしていたあるサマリア人は、その人を見て憐れに思い、近寄ったのです。このサマリア人は、生活の中で掟を実践すべきだと、行動に出たのです。サマリア人は、「教えは実行して初めて意味がある」と理解していたのです。
先の長崎コレジオの話をもう一度思い出して欲しいのですが、長崎教区の司祭で、今の時代に司祭が減少していることを知らない司祭は誰もいないと思います。それに伴って神学生の養成がどれほど緊急の課題か、知らない人はいないはずなのです。
それなのに、たとえばわたしが大司教さまから「君、神学校に行ってくれないか」と言われたら、「とんでもない」と、言ってしまうのです。どれだけ神学生の教育が大事かを痛いほど知っているのに、現実には道の向こう側を通ろうとするのです。
けれども、今実際に神学生の養成にたずさわっている神父さま方は、神学生を見て、心を揺さぶられ、近寄ってお世話をしている人々なのです。ですから、わたしたちの何倍も、神学校の神父さま方は善いサマリア人なのだと思っています。
考えても見てください。神学校にはギャルもいませんし、黄色い声をあげる女性もいません。ミサの依頼が神学生からあるわけでもないし、小教区の司祭とは大違いなのです。そういう身ぐるみはがされた状態の中に、逢えて近寄ってくださる神父さま方は、どれだけ尊いことで

しょう。
そこで、わたしたち自身も、イエスのたとえ話と、土曜日に持ち帰ったばかりの神学生養成にたずさわる神父さま方の話を、わたしたち自身に当てはめて欲しいのです。「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」ということです。
律法の専門家に、「律法には何と書いてあるか」と問うのは、毎日律法と向き合っている人に尋ねているのですから、日常生活そのものだとも言えます。ですから、イエスがわたしたちに問うているのは、「あなたは、目の前の生活をどう見て、どう理解しているのか」と問うているのではないでしょうか。
これに対し、たとえに登場したサマリア人は、今必要なお世話を施した上に、完全にケガが治るまでのこれからの時間にまで配慮してくれています。言わば通りすがりの人なのに、自分のことのように心を痛めることができました。目の前の現実を見て、どう読み取ったかの違いがはっきり現れています。
わたしたちは、現実の生活があります。この生活の中に、神に対して人に対して、守るべきことがあるわけです。そして、こうした守るべきこと、実行すべきことが見えた時に、あなたはそれをどう形にしているのかと、問われているのではないでしょうか。
神学生の養成、司祭の召命の増加。これらがどれほど緊急の課題であるかを理解していながら、神学校という直接の場所に対して道の向こう側を通るようではいけません。どんな無理難題でも、わたしにできることがあれば、神学生のために手を差し伸べる。それが今のわたしの課題です。
これはわたし自身の反省ですが、お一人お一人、実際の生活の中で、「それをどう見て、どう理解しているのか」と自問して欲しいと思います。生活のただ中で、わたしたちが何かを見た時に、心を動かされて行動に出る。そういう信仰者となることができるよう、今週一週間、恵みを願うことにしましょう。

年間第 16 主日（ルカ 10:38-42）

年間第 16 主日(ルカ 10:38-42)

良い木は良い実を結ぶ

主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」(10・41-42)
今週朗読されているマルタとマリアの姉妹の物語の中で、イエスが出来事に意味を与えるために語った結びの言葉です。
わたしはこれまで、どうしてもマルタとマリアを比較して、マルタのかいがいしい奉仕と、マリアの静かにイエスの言葉に耳を傾ける姿と、どちらが優れているでしょうかという視点に縛られてしまって、この朗読箇所を考えてしまっていました。もちろんそのこともあるのでしょうが、違った視点が与えられないと、この問題は永遠に答えが出ないのではないかと思います。
わたしは今年、少し違った視点を皆さんに示すことができればいいなぁと思っています。それは、「マルタとマリアの行動が、何を生み出すか」に注目しようというものです。マルタのような行動を取ると、マルタからは何が生み出されるのか。マリアのような行動を取ると、マリアからは何が生み出されるのか。そこに注目することが、イエスの結びの言葉を理解する鍵ではないかと思いました。
「マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」マリアが良い方を選んだと、イエスははっきり仰いました。出来事だけを追うなら、マリアがイエスの足元に座り、じっと話を聞いたことを、「良い方を選んだ」と取ることもできます。ただし、それでは、本当に限られた態度だけをイエスが「良い方」として指摘されたことになります。本当にそうなのでしょうか。
わたしは、もう少しイエスの言葉には広がりがあるのではないかと思っています。つまり、「良い方を選んだ」とは、その人がとった態度が生み出すものが、良い実りであるなら、その人の選んだ態度は、イエスの望みにかなった「良い方」なのではないか、そう思っているのです。イエスの足元に座って話を聞くことだけを言っているのではなく、「良い実りを生み出すあらゆる態度」が、イエスの言われる「良い方を選んだ」ということになるのではないでしょうか。
マルタの態度にも目を向けてみましょう。マルタがイエスと弟子たちを喜ばせようとしたことに疑いの余地はありません。ただし、マルタの取った態度が何を生み出すか、ということを考えると、もしかしたら、十分とは言えないかも知れません。マルタの行動が生み出す実りと、マリアの行動が生み出す実りには、明らかに違いがあるように思うのです。
マルタの行動が生み出すもの、それは満足感や達成感、誇らしさや名誉でしょう。マルタの行動の実りは、マルタにのみ意味のあるもので、他者に分け与えるようなものはないのかもしれません。それに対しマリアの行動が生み出すものは、イエスへの深い信頼、イエスに導かれ

ることの深い喜び、イエスと共にいる深い安らぎなどです。マリアの中で生み出されたものは、人に分け与えることもでき、周りの人を豊かにします。
この、「良い実りを生み出す態度」が、イエスの仰る「良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」につながるのであれば、わたしたちの生活にマルタとマリアの物語は無関係ではなくなります。わたしの取る態度が、良い実りを生み出し、周りの人をも豊かにするのであれば、それは、「良い方を選んだ」とイエスに認められるのです。反対に、自分だけの実りしか生み出さないような態度を取る人は、イエスに認めてもらえないことになります。
わたしたちの生活はどうでしょうか。わたしが選んだ決断、わたしが選んだ時間の使い方、そうしたものが、「良い実りをもたらす態度」につながっているでしょうか。もしそうであれば、わたしたちはイエスから、「あなたは良い方を選んだ。それをなくさないようにしなさい」と声をかけてもらえるのではないでしょうか。
もし、わたしの選んだ決断が、わたしにとっては喜びであっても、人に分け与えることもできず、自分だけにとどまるのであれば、それは本当に「良い方を選んだ」と言えるかどうか、考えてみる必要があると思います。あなたの決断、時間の使い方が、イエスへの信頼、イエスから来る喜び、イエスと共にいる安らぎにつながらないのなら、考え直すことも必要かもしれません。
「必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」わたしたち一人一人が、イエスにこのように言われる選択を続けて生きることができるよう、恵みと照らしをこのミサの中で願いましょう。

年間第 17 主日（ルカ 11:1-13）

年間第 17 主日(ルカ 11:1-13)

すべての方法で神に求め、神を探す

今週の福音朗読はいくつかの材料が組み合わされています。まずイエスの弟子たちが、イエスに祈りを教えてくださいと願う場面です。「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」（11・1）
次に、旅人をもてなすためのパンを、友人にしつように頼み、手に入れる場面が入っています。ここでの要点は、「その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。」（11・8）です。
最後に、祈り求めることの大切さを教える結びの言葉をイエスが添えています。「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」（11・9）
これらは別々のものが組み合わされているようにも見えますが、わたしは、すべてが１つの箇所に結びついていくと考えています。それは、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」です。
朗読を順にたどってみましょう。弟子の一人がイエスに、「わたしたちにも祈りを教えてください」と願いました。洗礼者ヨハネとその弟子たちは、独自の祈りを持っていたので、他の人々とは区別されて、注目を浴びていました。イエスの弟子も、もしかしたら自分たちが独自の祈りを持つことで、自分たちはみんなと違ってイエスの弟子だ。そういう優越感を感じようとしていたかもしれません。
イエスは、弟子たちの思惑には一切構わず、主の祈りを示しました。今日は、主の祈りの解説みたいなことは省きますが、祈りによって、「求め、探し、門をたたく」という道を示してくださいました。
次に、旅行者をもてなすパンがどうしても必要になった時、真夜中に友人を訪ねてパンを分けてもらう話です。友人だからお願いに行ったのでしょうが、お願いに行くにはかなり無理な時間に訪ねていきました。お願いする本人も、そのことは十分承知でしょう。
けれども、背に腹は代えられず、お願いに来たのでした。彼の唯一の交渉手段は、「しつように頼む」ということでした。イエスは、このたとえを通して、しつような行動によって「求め、探し、門をたたく」という道を示してくれました。
朗読の最後は、何かをすることで「求め、探し、門をたたく」というのではなく、全面的に信頼する、希望し続けるという道です。イエスはこうおっしゃいました。「あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」（11・13）
これは、希望し続ける人には必ず答えが返ってくることを教えていま

す。子供は、まだ祈りで「求め、探し、門をたたく」ことも、しつような行動によって「求め、探し、門をたたく」こともできない弱い存在です。けれども、どんなに弱く小さい存在でも、全面的に信頼すること、希望を持ち続けることは可能なのです。この方法によっても、人は神に「求め、探し、門をたたく」ことができると、イエスは教えてくださいました。
まとめると、わたしたちが神に対して「求め、探し、門をたたく」方法は３つ考えられるということです。それは祈りによって、しつような行動によって、全面的な信頼によってです。３つの方法が示されましたが、３つの方法はわたしたちにどのように関わってくるのでしょうか。
わたしは、誰にとっても、３つの方法すべてが、神に対して「求め、探し、門をたたく」方法として必要ではないかと思っています。まずは祈ることによってですが、祈りによって「求め、探し、門をたたく」ことは、何を神に求めるかを教えてくれる大切な方法だと思います。つまり、「求めなさい。そうすれば、与えられる」と言っても、むやみに求めなさいと勧めているわけではないのです。ほしいものがあって、それを買ってくださいと求めることは、あまりふさわしいとは言えません。「主の祈り」を唱えて、祈りを通して求めるなら、本当に求めるべきは何だろうかと、よく考えることができるでしょう。
次に、しつような行動によって「求め、探し、門をたたく」ことについてですが、たとえの中ではパンを必要としていて、しつように頼み、分けてもらいました。わたしはこの話で大切なことは、「親切心」を友人から引き出した、この点が大事なのだと思います。
イエスさまの生活の場であったパレスチナ地方は、親切心はとても大切な価値観で、親切心を欠いた人と呼ばれるのは非常に恥ずかしいことでした。たとえの中でパンをお願いする人は、相手が親切心をきっと示してくれると信じて、しつような行動に出ました。とった行動は相手に迷惑だったかもしれませんが、親切心をくすぐるしつような行動を、無視することはできなかったのです。
同じくパンをお願いされた人も、断りたい事情が確かにありましたが、親切心を欠いた人と思われることは最大の恥でしたから、親切心を示したのです。ここから、「主の祈り」を通して神に何を求めるべきかが分かった人は、神の親切心を信じて、しつような行動に出るようになるのです。神が親切心を忘れることは決してない。これがわたしたちのしつような行動の力の源です。
そして最後に、自分が弱く小さな存在と感じるとき、全面的に信頼する、希望し続けることで「求め、探し、門をたたく」こともできます。わたしたちは誰もがしつように行動し続ける力や健康を与えられているわけではありません。祈りによって、何を求めるかがわかっていても、それを行動に移すことのできない弱いときもあります。そんなとき、この信頼の態度、希望する態度は、神に必要なことを求める賢い手段になります。
たとえばそれは、病気で床についている人、１日を終え、眠りに就く人などを考えることができます。行動の時ではありませんが、深い信

頼によって、神のお世話に身を置くことができます。こうして、朗読に示された３つすべての姿が、わたしたちの「求め、探し、門をたたく」ための必要な道具になるはずです。
わたしたちに祈りを教えてくださった主は、祈り、行動し、深い信頼を寄せる、このすべてが「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」（11・9）ということにつながると教えています。まずは祈ることから始めて、求めたことが与えられた、探したものが見つかった、門をたたいて開かれた、この体験を積むことにしましょう。わたしたちが積む経験は、信仰を深め、人に、証しを立てる力の源となっていきます。

年間第 18 主日（ルカ 12:13-21）

年間第 18 主日(ルカ 12:13-21)

現代も、神の前に豊かな生活は必要

８月になりました。暑い盛りに、今日の福音朗読はよく選び抜かれているなぁと思います。「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」（12・21）こんなに暑いと仕事にならない。じゃあエアコンをつけよう、こんなに不便では仕事にならない。ではあれを買い直そうこれを買い足そう。わたしもこちらに来てからちょこちょこ物を買い直したり買い足したりしました。
けれども、これらは、自分のために富を積んでいるだけの話です。これではいっこうにイエスの説く「豊かさ」には近づかないわけです。
「神の前に豊かになる」このことが必要ですが、皆さんお一人お一人、「神の前に豊かになる」お手本のような人はいらっしゃるでしょうか。
わたしにとっては、母方の祖母が、「神の前に豊かな人」のお手本でした。わたしは土曜日になると山をひとつ越えて母方の祖母の家に泊まりに行かされていました。感覚としては、浜串から福見に泊まりに行かされているような感覚です。
祖母の家には白黒テレビが１台ありましたが、それはプロレスを見るためだけのテレビだったらしく、他にはテレビがついていたのを見たことがありませんでした。冷蔵庫もなく、炊飯器もなかったように記憶しています。そんな祖母の家に泊まって、孫のわたしに楽しむものがあるはずがありません。
ところが、わたしは祖母の家に泊まりに行くのを嫌がる様子もなく、よく言いつけを守っていたようです。祖母の家で待っているのは、決まって長い長い祈りと、信仰にまつわる様々な話でした。元気を出して歩くために、一歩踏み出すたびに「天に、ます、我らの、父よ、願わくは、御名の、尊まれん、ことを」と唱えながら歩いていました。ある意味、がばいばあちゃんのようなばあちゃんでした。何にも持っていませんでしたが、信仰の話、祈る量についてはとてつもなく豊かでした。昔の小学校上がりで、カタカナしか読めない祖母でしたが、祈りは何でもすらすら唱えていました。わたしにとって、「神の前に豊かな人」のお手本は、まずは母方の祖母なのです。この祖母が、わたしの信仰を鍛え上げてくれたのだと思っています。
ついこの前、中学生と小学生の黙想会が終わりました。中学生は黙想の学びを、インターネットブログに掲載するところまでを取り組んでみました。玄関口の掲示板に、「浜串小教区中学生ブログ」の URL を掲示していますので、よかったら自宅に戻って覗いてみてください。
小学生は、「ペトロはこたえます」という聖歌を材料に、学びを得ました。教会入口に黙想で得た学びを絵で表現していますので、ごらんください。
わたしは、この子供たちが、これから先どうやって、「神の前に豊かになる」という経験を積んでいくのかなぁと思うことがあります。今、目の前にいる子供たちの祖父母の方々は、まだ、何かしらの仕事をし

て、忙しく活躍しているのではないでしょうか。とても、祈りに明け暮れる日々というような生活ではないと思います。
ではご両親に期待をかけられるかというと、わたしが幼いころでも食べるために両親が精一杯働いていた時代でしたから、今はなおさら、夜遅くまで仕事をしているに違いありません。そうなると、いったいどこで、「神の前に豊かになる」経験を積むのでしょうか。
やはりそれは、教会が主催している行事や、集いなどではないでしょうか。5月と10月、ロザリオを唱えることが大いに進められていますが、今は教会でのロザリオの信心に参加しなければ、家庭でロザリオを唱えることはないかもしれません。
もしかしたら、朝の祈り、晩の祈りを決して欠かさずに唱えている家庭ももう見つからないのかもしれません。祈りの中には、「聖マリアの連祷」など、かつてはどこの家でも唱えていた祈りもありましたが、今ではこの連祷を唱えることも、教会でしか行わないかもしれません。
そうなると、今まで以上に教会での取り組みは大きなものになってきます。かつては、教会でしか味わえないものは、ミサとか、洗礼式結婚式、あるいは葬儀など、特に教会という場所がかかわって来る祭儀に限られていました。そのほかのほとんどのことは、家庭の中で経験できていたのですが、残念ながらそうはいかなくなりました。
それでも、みことばの重みは何ら変わりません。「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」神の前に豊かになる経験が、どうしても家庭で不足してきたとすれば、神の前での豊かさを得るために、積極的に教会を利用すべきだと思います。こんなこと、あんなことを教会で体験させることができないか。主任司祭ももっと考える必要がありますし、信徒の皆さんも、積極的に申し出てほしいです。
ここまで触れてきませんでしたが、現代の忙しい中でも、神の前に豊かになるために、ぜひ考えてほしいことがあります。それは、「聖書に親しむ」ということです。祈りによる豊かさが、かつては大きな部分を占めていました。けれども現代は、聖書のみことばに親しんで、聖書を通して神の前に豊かになることが、もっと大切になってきていると思います。
長崎教区では、聖書マラソンという取り組みを熱心にしていますが、聖書マラソンも本当に読んでいる人のためになっているのかは疑問があります。義務的に、次の人に渡すために読んでいるというのでは神の前に豊かにはなれません。
わたしがお勧めしたいのは、新約聖書から読み始めるとして、食事の前に、１ページ読んでから食事を始める、そういう取り組みをしたらいいのではないかなぁと思っています。実はこの勧めは、前任地の教会から言い続けていることなのですが、だいたい新約聖書のページ数が500ページを切るくらいです。
１年が365日あるわけですから、朝食をいただく前に、１ページか、２ページ、区切りのいいところまで読むと、１年で確実に新約聖書を読みあげると思います。聖書は確かふりがなが振ってありますから、小学校の高学年から、確実に実行できる取り組みです。仮に５年生か

ら始めたとして、小学校を卒業するまでに、２回は新約聖書を読み終えることになるでしょう。
これこそ、現代にあって幼い時から神の前に豊かになる方法ではないでしょうか。人にばかり言いっぱなしではいけませんので、さっそく、わたしも今日から食事の前に１ページ読んで、食事に入りたいと思います。朝食の時に、読むことにします。１年後、あるいはもっと早くに、読み終わったら皆さんに報告します。

年間第 19 主日（ルカ 12:32-48）

年間第 19 主日(ルカ 12:32-48)

目を覚ましている僕であり続ける

説教もずっと作り続けていますが、いつ準備しても何かしら新しい発見があります。新しい発見があるのか、わたしの勉強不足でまだ知らないことがあるのか分かりませんが、今週の福音朗読箇所について、今年は新しい発見がありました。
与えられた朗読箇所ルカ 12 章の、35 節から 40 節の部分に、「目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。」という言い方が２回繰り返されています。２か所とも引用しておきましょう。
「主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はっきり言っておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。」（12・37）
「主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。」（12・38）
わたしはこの個所を読むといつも、「主人に使ってもらっている僕なのだから、目を覚ましていることに不平不満はないけれども、いったいいつ眠りにつけばよいのかなぁ」という疑問を持っていました。「主人が帰って来たとき」目を覚ましている。「主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、」目を覚ましている。これはなかなか大変だなぁと思っていたわけです。
ここで取り上げている「目を覚ましている」という姿は、キリスト者にとって大切だと考えられていた姿勢でした。教会の始まりのころをよく伝えてくれる聖パウロも、テサロニケの信徒への手紙の中で、「あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです。わたしたちは、夜にも暗闇にも属していません。従って、ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいましょう。」（一テサ 5・5-6）と述べています。
さて、わたしたちが一般的に目を覚ましているのは、一日のどの時間でしょうか。ふつうに考えると、わたしたちが目を覚ましているのは「日中」です。日中とは、どんな状態の時間でしょうか。それは、太陽に照らされた、昼の時間のことです。
ここまで話せば、賢い方々はお気づきでしょう。わたしたちキリスト者が目を覚ましている「日中」は、キリストに照らされて過ごす時間のことです。キリストが太陽として、わたしたちの心を照らしておられる。その時間が、照らされて目を覚ましている時間なのです。
さらに考えてみましょう。目を覚ましている「日中」という時間帯は、何時から何時までと、決まっているのでしょうか。時計で刻む時間であれば、何時から何時までと時間を区切ることができるでしょうが、ここまで考えてきたように、キリストに照らされている時間が「日中」なのであれば、何時から何時までと時間を区切ることなく、あらゆる時間が、キリストに照らされて「日中」となりうるのではないでしょうか。
体験談を一つ紹介します。ある夫婦の話です。この夫婦は、結婚するとき、奥さんがカトリック信者で、ご主人がカトリックでない方でした。

男性は、女性側の親族から洗礼を受けて結婚するようにそうとう強く言われたそうですが、実現しませんでした。当時は、カトリック信者同士でなければ結婚は難しい時代でしたので、この夫婦は教会での結婚式を挙げずに結婚生活に入りました。
長い長い結婚生活も晩年を迎えた時、奥さんに異変が生じました。この夫婦は自営業を営んでいましたが、異変を感じた奥さんが健康診断を受けたところ、病はすでに手の施しようのない状態になっていました。ご主人はそのことを奥さんには知らせず、知り合いの教会信徒に連れられてまずわたしのところにやって来たのです。
ご主人はこう言いました。「神父さん。わたしは縁があってカトリック信者の妻と結婚しましたが、洗礼を受けることにどうしても抵抗があって、そのため教会での結婚式もしないままここまで来てしまいました。ところが、妻に異変が生じ、診断の結果は余命いくばくもないというものだったのです。わたしは妻に何不自由ない生活をさせてきたつもりですが、カトリック信者の妻に対しては、たくさんの迷惑をかけてきたと思うのです。
そこで、今さらのようですが、お勉強させてもらって洗礼を受け、結婚式をさせてもらえないでしょうか？妻が、教会での結婚式をしないまま旅立ってしまうなら、わたしは死んでも死にきれません。」ご主人はわたしの前で、男泣きに泣いたのでした。
すぐに勉強が始まりました。わたしの提案で、洗礼名は「聖ヨアキム」としました。奥さんの洗礼名が「聖アンナ」だったからです。みなさんよくご存じと思いますが、ヨアキムとアンナは、聖マリアの両親の名前です。
無事、ご主人は洗礼を受けました。そしていよいよ、教会での結婚式を挙げる日がやって来ました。誰も、この日を予想できませんでした。奥さんでさえも、この日が来るとは思っていなかったでしょう。けれども神さまは、これらのすばらしい日々を、このご夫婦のために用意してくださっていたのです。
奥さんがまだ歩くことのできるうちに、夢が叶い、ご主人は最後の日々、けんめいに奥さんを介護してくれました。その後奥さんは寝たきりになり、お腹に水がたまり、最後のその日を迎えて旅立ちました。
わたしは、イエスの言葉を重ね合わせて考えるのです。「主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。」夜昼寝起きして、いつ結婚したご主人が洗礼を受けてくれても、喜んで迎えることができるように、奥さんは目を覚まして用意していたのではないでしょうか。
一睡もしないという意味ではありません。実際には何十年もあとにやってきたご主人の喜びの日を、今日やって来ても、何十年後にやって来てもよいように夜昼寝起きしながら待ってくれていた。こういう姿を、イエスはわたしたちに期待しているのではないでしょうか。
目を覚まして用意している人への報いを、イエスはこう述べています。「はっきり言っておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。」（12・37）お話しした奥さんのご主人は、最後の最後の日まで帯を締めて、奥さんのためにすべ

ての給仕をしてくれました。
神も、わたしたちが目を覚まして用意する僕のように人生を全うした暁に、わたしたちのために神の国の宴会に招いてくださり、わたしたちを食事の席に着かせ、そばに来てあらゆる給仕をしてくれることでしょう。
どこを切り取っても、主であるイエスに信頼を置いて生きること。それが、イエスの言う「目を覚ましている僕」の姿だと思いました。起きているときも眠っているときも、神への信頼が土台になっているだろうか。今一度、生活を振り返ることにいたしましょう。

聖母の被昇天(ルカ 1:39-56)

聖母の被昇天(ルカ 1:39-56)

主がおっしゃったことは必ず実現する

聖母の被昇天の祭日が、日曜日、主日と重なりました。とても珍しいことだと思います。クリスマスが日曜日に重なるのも珍しいと思いますが、司祭にとっては、聖母の被昇天、クリスマスが日曜日に重なっている年は、最高の祝い日です。理由は１つ。説教を余計にしなくて済むからです。

皆さんの家庭では、この聖母の被昇天の祝いに合わせて、ふくれ餅を作ったりしているでしょうか。まさか、「ふくれ餅とは何ぞや」という人は五島にはいないと思いますが、写真が手元にありますので、ごらんになって思い出してください。このふくれ餅、鯛ノ浦の実家でもよく作ってお祝いしてもらったものです。小さいころからごちそうの少なかった家庭ですから、こうして祝い日に作ってもらったふくれ餅は、懐かしいごちそうの味の１つです。

皆さんの家庭にも、こうした習慣があればいいなぁと思います。必ずしも、ふくれ餅を作る必要はないのですが、８月 15 日、聖母の被昇天のお祝い日には、わが家はこういう料理で祝うのだ。そうした習慣が定着すればいいなぁと思います。ぜひ、取り組んでみてください。

福音朗読の学びに入りましょう。マリアが、エリザベトを訪ねる場面から始まっています。マリアの挨拶を受けたエリザベトは、喜び、声高らかに言いました。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。」（1・42）

日本語ではあまり意識しないかもしれませんが、「祝福された方」という表現は、「誰かに祝福された」ということが必ず背後にあります。誰に祝福されているか。それは言うまでもなく、神によって祝福されているということです。

神の祝福を受けて、人は幸いを得ます。神の祝福が、その人のものの考え方、行動の仕方に影響を与えます。エリザベトはマリアを次のようにたたえました。「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」（1・45）マリアの心には、神の祝福を受けた結果、「主がおっしゃったことは必ず実現する」との思いが、芽生えていたのです。

朗読の後半は、「マリアの賛歌」と呼ばれる部分ですが、わたしは、このマリアの賛歌は、「主がおっしゃったことは必ず実現する」との思いを具体的に言い表したものではないかなぁと思いました。

マリアはご自身のことをこう歌います。「身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人もわたしを幸いな者と言うでしょう、力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。」（1・48-49）

マリアも、救い主の到来を待ち望んでいたわけですが、マリア自身を通してその期待が実現しようとしています。ここにすでに、「主がおっしゃったことは必ず実現する」との思いが表されています。

マリアも、マリアが訪ねていったエリザベトも、人間の目には低いと考えられていたもの、取るに足りないと思われていた者たちです。マリアは、だれも見向きもしないガリラヤの町ナザレの出身でした。エリザベトは「結婚していながら子を産まない女性」として見られていました。神は人間の目に高いとみられている者たちを通り過ぎて、マリア、またエリザベトのもとにおいでになったのです。人間の目に低いとみられている者、取るに足りないと見られている者に、神はおいでになる。その光景を、マリアはわたしたちに見せてくださいました。
51 節から 53 節の、「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。」という部分も、マリアがわたしたちに示してくれた、「主がおっしゃったことは必ず実現する」光景です。
マリアが子の賛歌を歌ったとき、ほかの人にはこの低くされた人が高くされ、飢えた者が良い物で満たされる光景は見えていなかったかもしれません。ですが、神の祝福に照らされたマリアの目には、将来実現される姿として、はっきり見えている光景なのです。
マリアが指し示した光景を、わたしたちも眺めることにしましょう。人間の目に低いとみられている者、取るに足りないと見られている者に、今もまだ神の憐れみと祝福は届いていないと感じるかもしれません。
また世界平和に目を向けた時、まだまだ低くされた人が高くされ、飢えた者が良い物で満たされる光景は実現していないと感じるでしょう。なぜこれほど知識人がいながら、世界に真の平和は訪れないのか。希望を失いかけることもあるでしょう。
けれども、マリアが歌い上げた光景は、「主がおっしゃったことは必ず実現する」と信じて歌い上げた光景です。わたしたちは、マリアを通して、神が必ず実現する世界を信じましょう。
マリアは、最後まで神への信頼を失わずに、最後には神によって天に上げられました。わたしたちもマリアに倣うことで、「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」という称賛を受けることができます。

年間第 21 主日（ルカ 13:22-30）

年間第 21 主日（ルカ 13:22-30）

信仰の道は迷わず選ぶの繰り返し

今年の夏は、たくさん泳ぎました。最初のきっかけは、わたしが生活習慣病検診を６月 30 日に受診して、その結果高脂血症で、毎日散歩程度の運動が必要ですと言われたことでした。子供たちは子供たちなりに知恵を働かせて、これは夏休みになったら神父さまを水泳に誘ってあげなければならない、そういう結論に達したのでしょう。
おかげでこの夏は子供たちから何度もお誘いがかかり、一緒に泳ぐことができました。ただし、「泳ぎましょう」と誘っておいて、喜び勇んで出てきたら、「今日は泳いじゃダメって言われました」と言い出し、それにつられて「じゃぁあたしも泳がない」と手のひらを返され、１人寂しく泳いだこともありました。
その一方で、２人でわたしを誘っておいて、１人が泳ぎに来なかった時、１人残されて入りづらくなった子供をなだめて、一緒に泳いだこともありました。これは、取り残されたその子と触れあうための貴重な体験となりました。
たくさん泳ぐ機会を作ってもらった点は、子供たちに感謝したいと思います。確かに素晴らしい運動の機会になりましたので、夏の間の健康づくりには貢献してくれました。でも内心は、昼のど真ん中にピンポーンとお誘いを受けるわけですから、いろんな仕事も取りかかっている真っ最中ということが多いわけです。
「あー、ピンポーンと来たかぁ・・・どうしようかなぁ。」そう思いながら海に出て行ったことも２度や３度ではありませんでした。仕事は最初からやり直し、泳ぎから帰って来れば３時間は時間を取られる。ますますもってしなければならないことが追いつめられるわけです。
ですが、結論から言って、机に座って３時間を無為に過ごすよりも、はるかに仕事は進んだのでした。物理的に時間が取られてしまったのですから、もう他に選択肢はないわけで、しなければならないことと向き合わざるを得なかったからです。それまでは「昼に仕上がらなければ、夜に仕上げればいいさ」という調子でしたが、昼は泳いだのですから、「もう夜には、何が何でも書くぞ」と、迷わずに仕事をすることができたと思います。
今週の福音朗読でイエスは、「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」と言う人に答えて、「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。」（13・24）とおっしゃいました。これは、「救われる道の選択肢はそう多くはない」ということだと思います。
間口が広いあいだは、「あー、いつでも入れるさ」と思っていますが、実際には入れなくなることがあり得るのだから、狭い戸口であっても入れるうちに迷うことなく入りなさいとわたしたちに促しているわけです。あとになればいろんな方法が思いつくと高をくくってはいけないのです。選択肢が少なくても、道があるなら、ためらわずにその道

を選ぶ必要があります。
考えてみれば、今年の夏はこのイエスの戒めをよくよく考えさせてもらう期間だったような気がします。この夏に、子供たちと触れ合うことがなければ、その後何年間この小教区にいても、目の前の子供たちと触れ合うことはできなかったでしょう。「来年触れ合えばいいさ」というのは幻想です。
同時に、泳いでいればだんだん時間も迫ってくるわけですから、自分に任せられた仕事、小教区の仕事であれ、「よきおとずれ」といった教区レベルの仕事であれ、あるいは全国レベルで読まれているカトリックの読み物の原稿依頼であれ、「迷わず取り掛かる、他に選択肢はない」そういう経験を積ませてもらいました。
つまり、案外「選択肢は少ない、狭い戸口しかない」ということなのです。皆さんがいちばんよく口にする言葉で、このことをさらに踏み込んで考えましょう。しばしば耳にする言葉ですが、「あとでゆっくりなったら、信仰はするさ。」あなたの周りにも、こういうことを言う人がいないでしょうか。本当に、信仰の歩みは人が言うほど間口が広いのでしょうか？
わたしは、信仰の歩みこそ、「狭い戸口から」入っていく必要があるのではないかと思っています。先ほどから何度も繰り返していますが、「狭い戸口から」と言うのは、「選択肢はそう多くはない」という意味です。今、ほんのわずかでも祈りを学ぶ時間があるなら、学ぶべきです。
今、聖書を読んでみようかなぁと思ったのなら、ためらわずに読み始めるべきです。そう言えば８月１日の説教で聖書を１ページずつ食事の前に読み続けましょうと勧めましたが、わたしのほうはもうすでに「マタイ福音書第 13 章」まで来ました。
他にもあります。先週は聖母の被昇天でしたが、長崎教区のカトリック信者の人たちは、聖母被昇天の前にはしばしばゆるしの秘跡を受けて、お祝い日のための準備をしていました。ゆるしの秘跡はしばしば億劫になりがちで、これもまた「狭い戸口から」入るべき秘跡です。後回しにすると、「入ろうとしても、入れない人が多い」ということになってしまいます。聖母被昇天に間に合わなかったかもしれませんが、来週でも全く問題ありません。思い立ったそのときに、行動を起こしましょう。
家庭で、仲たがいを起こしている人がいないでしょうか。「そのうちに、仲直りできるさ」と思っているかもしれませんが、本当に「そのうち」というチャンスは巡って来るのでしょうか。「チャンスが回ってこなかった」では、取り返しがつかなくなってしまいます。
しばしば、選択肢は多くはないのです。イエスが「狭い戸口から入るように努めなさい。」と言っているのは、本当のことなのです。実際には、もう一度チャンスが巡って来るかもしれません。けれどもわたしたちは、その「もう一度巡って来るかもしれないチャンス」を、自分で用意できないのです。
自分で作り出せないものを当てにできるはずがありません。むしろ、「今日できることなら、今日取り組む」「今できることなら、今取り

組む」こういう姿勢で、信仰の歩みを積み重ねていきたいものです。

年間第 22 主日（ルカ 14:1,7-14）

年間第 22 主日(ルカ 14:1,7-14)

空の手で、報いを求めない

今日の福音では、「へりくだる者は高められる」というのがポイントだと思います。まず身近なところで、「へりくだる」というのがうまくいった例と、失敗した例を挙げてみたいと思います。
まずは、「へりくだる」の成功例です。この夏の高校野球特別なドラマが待っていました。沖縄県代表の興南高校が、春夏連覇を果たしました。NHK の夜 9 時のニュースで、キャスターが我喜屋優監督にインタビューしたときの様子が流れていましたが、春に優勝した生徒たちをもう一度リセットして出発することがとても大変だったと語っていました。
そうだろうなぁと思います。春に優勝したチームに、初心に立ち返って練習しようと呼びかけても、「自分たちは春に優勝したんだ」という驕りとか心の油断とかがどうしても頭をもたげてくると思うのです。全部取り払ってやりなおそうとしたって、それは簡単ではないと思います。「春は春だから」と頭では思っていても、「優勝したことがあるんだぞぉ」という気持ちを決して出さないというのは並大抵のことではなかったはずです。その点を監督の指導でうまく乗り越えて、春の優勝チームなのに、まったくの振り出しに戻って選手を鍛え上げることができた。その結果が、今回の優勝に結びついたのだと思いました。
次に、「へりくだる」の失敗例です。わたしは、前の前に赴任していた教会で恥ずかしい思いをしたことがあります。この教会は、わたしが初めて主任司祭となって赴任した教会でした。それから新しい辞令をもらい、前任地に転勤していったのですが、転勤して間もなく、前の前の教会の御婦人が亡くなって葬式のミサに出席することになりました。
その方は、長崎教区の神父さまのお母さんでもありました。ですから、葬儀ミサにはたくさんの神父さまが出席していて、わたしもその中の 1 人としてミサをささげていたのです。
亡くなった方や、司式をしておられた息子さんの神父さまには失礼な話ですが、「あー、ついこの前までここにいたんだなぁ。お、あの人も来てるなぁ。」そんなことを思ってずいぶん気を散らしながら、同席の神父さまと一緒にいたわけです。
ミサの途中、ちょっとした問題が発生しました。典礼の係の人に指示を出せば、すぐに対処できることでしたが、いっこうにその問題に対処する様子が見えませんでした。わたしは思わず、典礼係の人の名前を呼んだのです。「〇〇さん。ちょっと、対処してあげてよ。」
つい、声を出して言ってしまったのですが、言ってから気付きました。「あっ、わたしは数カ月前に、もうここの主任神父ではなくなっていたんだ。わたしが口を挟んではいけない。」けれども、もう後の祭りで、静まり返った聖堂に、前任者に過ぎないわたしの声が響いてしまったのでした。
とっさのことでしたが、今でもその時のことは思い出すと申し訳ないなぁと思います。わたしの後任でやって来た神父さまも、その教会で初め

て主任司祭になったのでした。その神父さまを差し置いて、係りの人に指図したのですから、後任の神父さまに面目が立ちません。本当に恥ずかしいことをしたなぁと思います。
今週の福音朗読で、イエスは神の前にへりくだることの大切さを教えます。「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」（14・11）たとえ話の中では、婚宴に招待された時、末席に座れば、人々の前で面目を施すことになるではないか。だから、神の前にへりくだることは、神に高めてもらう何よりもよい方法だと促します。
しかも、見逃してはいけない小さな付け加えがあります。「だれでも」です。「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」のです。わたしは、前の前の教会の主任司祭でした。確かに数カ月前までは、そうでした。それでも、「ほら典礼係、何ばしよっとや」というような態度をとってはいけないのです。
きっと、数カ月前まで主任司祭だったのですから、わたしが指示を飛ばしたほうがすぐに解決するでしょう。けれどもそれは、踏み越えてはいけない部分だと思うのです。「だれでも」へりくだる必要があるのです。あの場面、どうしても典礼係に指示を出そうと思うなら、今の主任司祭にそっと伝えて、それから典礼係に動いてもらうべきだったと思います。
「へりくだる」ことの大切さがわかると、イエスのもう１つのたとえ、「お返しのできない人を、招待してあげなさい」も理解できるようになります。お返しをしていただくことは、報われるということです。報いを手に受けた人は、それ以上、報いを手にすることはできません。すでに、報いを手にしているからです。
いっぽうで、お返しのできない人を招いたとき、わたしたちの手は報いを受けないのですから、いつまでも手は空っぽのままです。それでいいと、イエスさまはおっしゃいます。その空の手に、イエスさまが最後の報いを用意してくださるからです。手が空いてる、空の手だからこそ、わたしたちは報いを手にできるのです。
こんな聖歌を思い出しました。「空の手で、はだしのままで、ついて行きたいキリストに。ついて行きたいキリストに。」わたしたちは、手に報いを得ることばかりを目的にして奉仕すべきではありません。手に報いが得られない働きこそ、あなたにとって願ってもないチャンスです。誰も報いてくれないその働きに、イエスが報いを用意してくださいます。

年間第 23 主日(ルカ 14:25-33)

神のために放棄し、与え返してもらう

ついこの前、スチールの本棚を大量に買い込みまして、あるだけの本を広げてみました。４月にこちらに来てから９月まで、まったくと言っていいほど本を開けずに過ごしていたのですが、ようやく開いてみる気になったわけです。ざっと１週間ほどで開いてしまいましたので、早くに取り掛かればこんなことにはならなかったのにと思っております。
本を開いてみると、いくつかのことが見えてきました。まず、使いもしない本がずいぶん含まれていて、これについては処分しようと心に決めました。次に、開いただけでは本の山の中で迷子になってしまいますから、関連する本は近くに並べて、使える本棚にしなければならないということです。
そして最後に、「この本を、よく取っておいたなぁ」という種類のものが出てきたのです。本に限らず、資料とか、メモとか、そのたぐいのものです。そしてその中に、なぜか知りませんが、鯛ノ浦教会での地区集会に参加して熱心にメモをとったと思われる、父親の手書きのノートが見つかりました。
父親はわりと几帳面な人だったようで、地区集会の中で当時の主任神父さまが熱心に聖書の解説をしているのを、真剣にメモを取っている様子がうかがえました。考えすぎかもしれませんが、いつかは、わたしが地区集会で聖書の話をして、それを熱心に聞いてメモを取るというようなことを夢見ていたのかなぁと、貴重な手書きのメモを読みながら思いました。
今週、福音朗読は弟子の条件についてイエスが話しておられる部分です。「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。」（14・26-27）
非常に厳しい要求ですが、イエスはこの要求を引き下げるつもりはないようです。わたしも、イエスの要求は非常に厳しいと感じますが、考えようによっては、これくらいの要求があっても不思議ではないと言えます。
おそらく、皆さんがいちばん引っかかっているのは、次の部分でしょう。「～であろうとも、これを憎まないならば、わたしの弟子ではありえない。」「憎む」という部分は、相当引っかかるだろうと思います。この部分をどう理解するかが、今週の福音朗読を理解する鍵でしょう。
わたしはこの「憎む」という態度を、「淡い期待を一切放棄する」というふうに考えてみました。だれかがイエスについて行くと決めた時、イエスに期待することとあわせて、家族にもいろんな期待をすることが考えられます。家族だから支えてくれるだろうとか、家族には甘えながらイエスについて行きたいとかです。
けれども、家族につい期待してしまいそうな部分を、「一切放棄する」

これが、イエスの求める「憎む」ということかなぁと思いました。本来であれば、家族はどんなときにも味方になってくれる存在ですが、味方になってくれることを期待しながら、イエスについて行くのではどこまでも付いていくことはできないのです。イエスに最後までついていくためには、イエスのほかにだれも味方になってくれない。だから必死にイエスについて行く。その覚悟が必要なのです。
一方で、家族もイエスの弟子になろうとする者をおささげしなければなりません。家族としてとどまっていれば、大変心強い存在だったはずです。その頼もしい存在を、イエスのために手放します。イエスにささげてしまえば、それは自分たち家族のものではなくなるのです。
わたしも、ひょっこり出てきた父親の地区集会でのメモを通して、父親がわたしを神さまにささげて手放したのだということをしみじみ感じました。ただ、ささげて手放しましたが、神のために手放したものは、神によって返してもらうのではないかとも思います。
旧約聖書の中では、アブラハムが一人息子イサクを神さまの命令に従って手放しましたが、手放したことで神からイサクを返していただきました。わたしたちの中では、何よりもまず司祭・修道者になるために子供たちを手放すことが、この福音の勧めを考える近道だと思います。
一人息子とか、一人娘とか、いろんな形があるでしょうが、神さまのために手放す人は、神さまからその子を与え返してもらうのだと思います。手放したのですから、両親の思い通りにはいかないと思いますが、神の望む姿に造りかえられてもう一度取り戻すわけです。神さまにおささげして手放したものは、決して失うことがありません。
また、家族が神さまにささげて手放したその子供は、いつかイエスにまっすぐに従うために家族からの期待を一切放棄することになります。お母さんにかわいがってもらったことも、お父さんに大切にしてもらったことも、イエスにすべてを期待する生き方に切り替わる時が来ます。
けれども、家族からの淡い期待を一切放棄したその子は、イエスにまっすぐに従う中で、家族をイエスから与え返してもらうのではないでしょうか。わたしのほんの少しの体験ですが、父親がいよいよ最期を迎えようとしていた時、週に一度見舞いに行って、病室でミサをささげることができました。
年に一度か二度、家に帰ればよい方だったわたしが、父親との時間を頻繁に与えてもらうことができたのは、先に家族からの淡い期待を一切放棄した結果だったと思うのです。もしわたしにも家族があって、家族と家族付き合いしていたなら、むしろ父親との大切な時間は、与えてもらえなかったかもしれません。
弟子の条件として、司祭や修道者に少し焦点を当てて考えてみました。弟子になるために、家族から期待できることすべてを放棄します。それも、小学６年生とか、中学３年生で、おぼろげながらその覚悟を持つことになります。長い長い時間、イエスにまっすぐに従って家族をおささげしますが、弟子になれば、今度はイエスによって家族を与え返してもらうことになります。
家族も、イエスにまっすぐに従う子供を、寛大に神さまにおささげします。子供を手放しますが、神さまにささげた子供は、神さまに与え返し

てもらうのです。きっと、イエスのために他のすべての期待を放棄する人は、どのような形でイエスの弟子になるにせよ、いつかイエスを通して放棄したものを与え返してもらうのです。
この世の淡い期待を憎みつつ、イエスにまっすぐに従おうと自分の十字架を背負う人は、失うことを恐れません。イエスが与え返してくださるからです。

年間第 24 主日(ルカ 15:1-32)

年間第 24 主日（ルカ 15:1-32）

一緒に喜ぶことを学ぶ

今週は、有名な「放蕩息子のたとえ」を含む３つの「あわれみのたとえ」が福音朗読に選ばれています。その中で今年の説教の材料として、「見失った羊のたとえ」「無くした銀貨のたとえ」を取り上げてみたいと思います。
本日、浜串教会では永久礼拝の当番となっています。信徒の皆さんは永久礼拝まであって大変だなぁと思っていることでしょう。けれどもわたしは、午前中永久礼拝を済ませて、昼からは上五島地区のシスターたち全員を対象にしたミニ黙想会を指導することになっています。
そうなると、今話しているこの説教と、永久礼拝での短い話と、シスターたちへの 45 分の講話と、３つをこなさなければなりません。そのことを考えれば、皆さんはまだ、永久礼拝で終わりなのですから、ましなほうだと思ってください。もしかしたらシスターたちが、１日に３回もわたしの話を聞かされて、いちばんの犠牲者かもしれません。
今年取り上げようと考えた２つのたとえの中で、特に目立っている言葉は、「一緒に」という言葉です。「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」（15・2）とイエスに不平を言う場面、「見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください」（15・6）と言っている場面、「無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください」（15・9）と言っている場面です。
どの場面も、喜びを分け合う場面です。イエスは、徴税人や罪人と神の国について語り合い、喜びを分け合います。いなくなった羊を見つけた人も、大きな喜びを友達や近所の人々と分け合います。銀貨を見つけ出した女性も、友達や近所の女性を呼び集めて喜び合うのです。
大事なのは、一緒に喜び合うことです。もしわたしが、「喜んでください」と言っている人の気持ちを喜べないなら、大きな喜びに加わることができません。神の国の喜びを知るためには、どうしても、「悔い改める一人の罪人を喜ぶ気持ち」が必要となるのです。
ところで、たとえにされている話を思い出すと、そんなに大げさに喜ぶことだろうかと疑問を感じる人もいるでしょう。百匹の中の一匹ですから。あるいは、家の中で銀貨が一枚行方不明になったに過ぎないのですから。そんなに驚くことだろうかと思うのも無理はありません。
けれども、１人の人の回心や、神の家族に加わる出来事などは、たった１人でもかけがえのない１人なのではないでしょうか。たとえば、わたしたちの教会で大人の洗礼が１人与えられたとしましょう。それは、50 分の１の出来事かもしれないし、100 分の１の出来事かもしれません。それでも、わたしたちの教会を喜びで満たすのには十分な出来事ではないでしょうか。その１人の人が教会家族に加えられることは、すでに教会家族である 50 人 100 人に十分刺激となる出来事のはずです。「誰それが、洗礼を受けたからって、それがどうしたの」こんな受け止め方をする人はまずいないと思いますが、もしいるとしたら、一緒に喜ぶこと

を学ぶ必要があると思います。
そこで、わたしたちもイエスのたとえ話をもっと身近に感じる努力をしてみましょう。わたしたちはほとんどがカトリック信者という集落の中に生きていますが、それでも、１人の人が教会家族に加わるとか、１組のカップルが結婚するという場面は残されているはずです。そこでまず思い浮かぶのは、「あー、あの人は事情があるから、教会に近づくことはまずない」こんなことかもしれません。
けれども、その１人を「無理」と決めてしまうのではなく、大きな喜びを一緒に分け合う１人と考えるなら、努力のし甲斐があるのではないでしょうか。たとえ話では、羊も、無くした銀貨も、自分からはこちらにやって来ることはありません。探しに行って、見つかるまで探さないと、喜びの輪に加わることはできないのです。
一緒に喜ぶために、その１人のために、どれだけ苦労しなければならないことでしょう。けれども、イエスはその苦労を厭わないようにと促しているのです。一緒に喜びを分け合うため、大きな喜びを味わうためにです。
「今集まっている人だけで続けていけばよいではないか。」そう考える人もいるかもしれません。けれども、もっと大きな喜びを分け合うためには、あと１人に、声をかけ、促す必要があると思います。今のままでも結構ですが、イエスがあと１人、あと１人と一緒に喜び合う人を探して行ったのですから、わたしたちも目をそむけてはいけないと思います。
ファリサイ派の人々や律法学者たちは、一緒に喜ぶことを学びませんでした。イエスが示す「大きな喜び」の中に入ることができなかったのです。「あんな人と歩調を合わせたくない。」自分よりも低く思っている人々の中にイエスは入って行き、喜びを分け合います。
あとはわたしたちが、イエスのなさりかたに賛成して、「喜んでください」と言っておられるイエスと共に喜ぶことができるかどうかです。わたしたちはファリサイ派の人々や律法学者たちの過ちを繰り返さず、イエスの中に行動の基本を見続けるようにしましょう。イエスについていけなくなった時、わたしたちは一緒に喜び合う輪から、外れてしまうのですから。

年間第 25 主日（ルカ 16:1-13）

年間第 25 主日(ルカ 16:1-13)

敬老者は、神のぶどう園で現役です

今日は、敬老者のためにお話をさせていただきます。この浜串小教区で敬老者とは、75 歳以上の方々です。他の人のことじゃありませんよ。皆さんの話です。そして中田神父は、敬老者の方に教会でゆっくりしてくださいとは言いません。教会は敬老者の方にとって社会よりももっと活躍できる場所です。今日の話をよく聞いて、できることを教会家族のために取り入れて生きていってください。
今日の福音朗読は、管理人をやめさせられた人が、賢い振る舞いで運命を切り開いていくたとえ話が紹介されています。イエスはこのたとえを通して、その人その人の知恵を発揮して、自分の居場所を確保するように促しています。
主人に雇われていた管理人は、だれかの告げ口があったために、管理人の仕事を取り上げられてしまいました。今日、敬老の日の呼びかけにこたえて、ミサにあずかっておられる皆さん、他人事と思わずにしっかり話を聞いてください。たとえ話の人は、仕事を取り上げられてしまいました。
また、この仕事を取り上げられそうになっている管理人は、こう話しています。「土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。」(16・3)あらためて仕事を探すのも難しいし、なりふり構わない生活もできない立場になっているのです。敬老者の皆さんにとっては、他人事とは思えないのではないでしょうか。
そこでたとえ話の管理人は、一つのことを思いつきます。管理の仕事をやめさせられても、周りの人々に迎え入れられるように準備をしたのです。それは、「わたしの主人にいくら借りがあるのか」と尋ねて回ることでした。「あなたは、いくら借りがあるのか。」そうして主人に仮のある人に恩を売って、主人にも収穫が入るように計らったのでした。
わたしは、ここに敬老者の皆さんが心がけてほしい姿があると思っています。たとえ話の管理人は、管理人の仕事を取り上げられそうになっています。普通であれば、仕事を取り上げようとしている自分の主人に、最後のご奉公をする理由はないかもしれません。
けれどもこの管理人は、「あなたは、主人にいくら借りがあるのか」と尋ねて回ったのです。わたしは、この姿には、神さまのために最後のご奉公をする素晴らしいお手本が示されていると思うのです。敬老者の皆さんが最後のご奉公として期待されているのは、「あなたは、神さまにいくら借りがあるのか」と、尋ねて回ることだと思います。
わたしは、教会の中では、すべての人が神さまに呼ばれた働き人だと思っています。教会というぶどう園の中で、どんなにわずかな働きであっても、神さまが報いを用意しておられる働き人だと思うのです。それは、今日お祝いを受ける敬老者もです。
もちろん、敬老者の皆さんは、高い所に登ったり、重たい物を持ち上

げたり、夜遅くなるまでの仕事はできないかもしれません。けれども、教会家族の中にだれか神さまに対して貸し借りのある人があって、「あなたは、神さまにいくら借りがあるのか」と尋ねて回ることは、できると思うのです。
中には、たとえ話に出てくるような、大きな借りが神さまに対してある人もいるかもしれません。その時こそ、敬老者の皆さんの出番です。百の借りがある人を五十と書き直させて、主任司祭のもとに行かせるのです。できれば、敬老者の方が付き添いできてくださるのが一番効果的です。
そうすると、主任司祭はまだ小教区の事情を知りませんから、敬老者の皆さんがこの人の神さまに対する借りは百じゃなくて五十ですと言えば、間違いなく信じます。主任司祭は子供と敬老者のお願いには弱いんですよ。
そうして、神さまに百の借りのある人を五十と書き直しさせて連れて来れば、敬老者の皆さんは連れて来た人にも、神さまに対しても、相当恩を売ることになります。土を掘る力がなくても、なりふり構わず物乞いをしなくても、大きな働きを神さまのために果たして、神さまの前での居場所を確実にすることができます。
遠慮は何もいりません。「あなたは、神さまにいくら借りがあるのか。」気になる人を思い出したら、そう尋ねてください。そして、連れて来てください。百の借りがあっても、敬老者の皆さんが「この人の神さまに対する借りは五十です。」と言ってくだされば、わたしはそれを真に受けます。
どうぞ、神さまに、「あなたは賢い働き方をするね」とほめてもらえる敬老者であってください。これからも、そして命のある限り、神さまと若い人々をつなぐ管理人の働きをしてください。「あなたは、神さまにいくら借りがあるのか。」なかなか、若者には言えないこの言葉を活かして、神さまにほめられる人生をまっとうしていただきたいと思います。

年間第 26 主日（ルカ 16:19-31）

年間第 26 主日（ルカ 16:19-31）

神の国のルールに沿って生きる

いよいよ来週ミニバレーの日がやってきます。９月に入ってからはよく練習をやりました。日曜日、福見と高井旅のチームの練習、火曜日と金曜日は浜串チームの練習で、時々サボってはいましたが、いけるときはちゃんと参加して、おかげで体もずいぶん絞れて軽くなりました。
それ以前にも、転勤してからすぐに、ミニバレーの練習には参加していたのですが、今回のカトリック婦人会のミニバレーでは、普通のバレーの試合のルールとは違ったルールが用いられていて、最初ずいぶん戸惑いました。まず、味方同士で３回ボールを回すこと。これがなかなか身につかずに苦労しました。ほかにも、アタックは飛んではいけないし、サーブも必ずアンダーサーブを入れなければなりません。面倒だなぁと思いますが、ルールがある以上、ルールを守らなければ試合を進めることはできませんし、ルールを守らないのであれば勝ち残ることはできません。これは当然のことです。ルールは初めから示されているのですから、「わたしたちは独自のルールで試合をします」と言っても通用しないわけです。
どんなことにも、ルールがあると言ってよいでしょう。そのルールが納得できるかどうかは別ですが、ルールを受け入れられなければ、その中に入れない、とどまっていることができません。実は、今週の福音朗読は、この「ルール」について考えると、学びが得られるのではないかと思っています。もっと言うと、「神の国のルール」についてです。
金持ちと、ラザロの物語。この物語についてはかなりの人たちが、話の内容を知っているだろうと思います。ラザロは死んで、神の国の宴席に招き入れられますが、金持ちは陰府でさいなまれながら苦しんでいます。先ほどの「ルール」ということを当てはめると、金持ちは神の国のルールに当てはまる生活をしなかったので、宴席に入ることができませんでしたが、できものだらけの貧しい人ラザロは、神の目から見て、神の国のルールに当てはまる人でした。
まず、ラザロが神の国のルールに当てはまっていたこと。この点から確認してみましょう。ラザロが、何かふさわしい善行をしていたから神の国のルールに当てはまったのではありません。彼は貧しい人で、誰からも報いを得ることなく地上で生きていたのです。
ただし、神の国には次のようなルールがあります。「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。」（6・20）ラザロのように誰にも報いを得ることのできなかった人たちは、神が報いを与えるために神の国の宴席に招いてくださいます。神がそのようなお方だからです。神が探し求める人々の中に、ラザロは生きていたと言えるでしょう。
ところで、金持ちは神の国のルールに著しく外れていたのでしょうか。

「しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である、あなたがたはもう慰めを受けている。」（6・24）やはり、神の国のルールに外れていたのでしょう。富そのものは不幸でも不正でもありませんが、金持ちが神の国のルールに当てはまる人になるためには、富とまったく縁のない人、たとえば今日のラザロのような人とその富を使って友達になる必要があったのです。次のように書かれています。「そこで、わたしは言っておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。」（16・9）
今週の福音朗読では、ラザロは金持ちの門前に横たわっていたとあります。ここで言う「門」は、外の世界と自分たちの世界を出入りする場所のはずでした。門を出入りして、神の国のルールに当てはまる人になるために、積極的に与えられた富を外の人々に対して使う必要があったのです。
説教の初めにも言いましたように、ルールがあるからにはルールにのっとって行動する必要があります。神の国にもルールがあります。神は、弱い立場の人、しいたげられている人、圧迫されている人に手を差し伸べるお方です。神が助けなければいけない人と、神の考えに賛成できる人は、神の国の宴席に招かれます。反対に、神の考えに納得できない人は、神の国のルールを受け入れられないのですから、退場させられても仕方がありません。
ではわたしたちは、神の国のルールに当てはまる生活を心がけているでしょうか。「生きている間に悪いものをもらっている人々」を見て、手を差し伸べているでしょうか。門を行き来して、わたしの協力を必要としている人に近寄っているでしょうか。
もしかしたら、わたしの生活の中に厳重な門があって、わたしの手を必要としている人を締め出し、決して外にも出て行かないというような態度を、門を理由にとり続けてはいないでしょうか。もしそうだとしたら、神の国のルールを受け入れられないのですから、神の国の宴席に連なることはできなくなります。わたしたちは、そのような最悪の結果だけは避けなければなりません。
「いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。」（16・19）「いつも」、そして「毎日」取るべき態度は別にあります。「いつも」門を出入りして外の様子に気を配ることがはるかに大切です。「毎日」わたしの協力を必要としている人は誰だろうかと考えることがはるかに大事です。
たとえば、「貧しい人々は、幸いである」「今飢えている人々は、幸いである」「今泣いている人々は、さいわいである」などのイエスの言葉から、神の国のルールを学びましょう。ルールがあれば、そのルールから外れた行動は認められません。また、ルールから外れている人々がいれば、「神の国のルールはこうではないでしょうか」とうながして、神の国のルールに従った生活を皆が意識するように働きかけましょう。
ルールに従って行動するとき、わたしたちは喜び、笑い、楽しむことができるというものです。

年間第 27 主日（ルカ 17:5-10）

年間第 27 主日(ルカ 17:5-10)

たとえからし種一粒ほどでも十分

福音朗読のたとえ話の中には、心を打たれる話、なるほどと感心する話もたくさんありますが、「それはどうかなぁ」というものもあります。中田神父が、「それはどうかなぁ」と考えている個所とは、朗読の最初の部分です。
「使徒たちが、『わたしどもの信仰を増してください』と言ったとき、主は言われた。もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。」(17・5-7)
果たして、桑の木が、「抜け出して海に根を下ろせ」と言って、言うことを聞くものなのでしょうか？にわかには信じられません。桑の木が一体どうやって？と考えてしまうのです。みなさんは、「イエスさまがおっしゃったのだから、そうなるのだろう」と疑いもなく信じるでしょうか。
そこでわたしは、「これはもののたとえなのだ」と受け止めて考えることにしました。このたとえに込められている思いが実際に実を結ぶなら、このたとえは成り立つのではないでしょうか。そこでこのたとえに込められている思いは何か、ということを考えることにしました。
まず、桑の木です。背が高くなる木だそうで、15 メートルにも達するものがあるようですが、普段見かけるのは数メートルの高さのものとされています。背が高くなる木なのですから、おそらく、土に深く根を張る植物なのでしょう。
この深く根を張る植物が、抜け出して海に根を下ろすというのは、たとえとして、「抜けないくらいに根を張ったものが、まったく違う場所で生まれ変わって生き始める」ということではないでしょうか。この考えに沿って、身近な例を考えてみましょう。
たとえでは、「抜け出して海に根を下ろせ」と言われていますから、簡単には抜け出せないものが、思い切って抜け出して、まったく違う場所で根を下ろすことが考えられているのでしょう。簡単には抜け出せないのに、「抜け出しなさい」と命じているのですから、たとえばそれは、「悪い習慣から抜け出せないでいる」と考えることができます。
すぐに思いつくのは「依存症」と呼ばれる状態です。アルコール依存症、ニコチン依存症、ギャンブル依存症、最近ではインターネット依存症など、いろんな依存症がありますが、こうした症状にある人は、意志の力では抜け出せません。また、周りの人の理解も十分でないことがあります。努力や、気合で治せるとか、抜け出せると思っているのですが、決してそうではないのです。
もし、こうした「依存症」が思い当たる人は、今日の福音のたとえを自分のこととして受け止めましょう。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。」これは、信仰すれば病気が治ると

いう意味ではなく、「わたしは、適切な治療を受ければ、必ず治る。立ち直ることができる」と信じることです。
たとえその信仰が、からし種一粒ほどの信仰であってもかまいません。「こんな治療で、本当に治るのだろうか」「こんなことを続けていて、大丈夫なのだろうか。」不安に負けそうになる自分を、からし種一粒ほどの信仰が支えてくれるのです。「大丈夫。わたしはきっと、この治療で治すことができる。この努力を続けて、立ち直ることができる。」
こうして、適切な治療を重ね、依存症を克服したなら、それは、「抜け出して海に根を下ろせ」という命令が実現するのと変わらないくらいの出来事ではないでしょうか。「それはどうかなぁ」と、誰もが思うようなことも、からし種一粒ほどの信仰があれば、神を固く信じる信仰がわずかでもあれば、努力は実を結び、大きな結果を生み出すのです。
「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。」
わたしは、このイエスの言葉を考えるもう１つの例として、司教さまになっていく人のことを考えました。
今、福岡教区の司教さまは宮原司教さまです。この司教さまは、初めは長崎教区の司祭でした。それが、大分教区の司教さまにまず選ばれて大分教区に籍を移しました。皆さんも自分に当てはめて考えてほしいのですが、これから引っ越して、宮崎か大分に住むことになったら、はいわかりましたと簡単に受け入れることができるでしょうか？ずっと五島に暮らしていた人が、まったく違う環境に住み始めることを考えたら、簡単には決心できないと思います。
ところが、宮原司教さまは、まず大分の司教さまとして籍を移し、またあとでは、福岡の司教さまとして転籍し、自分に与えられた務めを引き受けたのです。長崎でしっかり根を下ろしていたのを、大分に移り、さらに福岡に移動してそこで根を下ろしました。
本当にできるか、心配はあったでしょう。けれども、信仰が、不可能を可能にしたのです。頭で考えると、難しい要求ですが、からし種一粒ほどの信仰さえあれば、神の恵みがそこに働いて、不可能を可能にしてくれるのです。
司教さまほどではありませんが、司祭も修道者も、難しい要求に戸惑いながらも違う場所に根を下ろして生きることの繰り返しです。わたしは浦上教会から始まって、滑石教会、太田尾教会、馬込教会、そして今の浜串教会と根を下ろしてきました。
長い場所では６年居ましたので、抜け出すのは難しいと感じることもありました。新しい場所で根を下ろせるだろうか？それでも、からし種一粒ほどの信仰が、大いに役に立ったのです。
皆さんの中にも、何かのきっかけを与えられて、まったく違う場所で根を下ろすように要求されていると感じることがあるかもしれません。
「そんなの無理」と決めつけないで、信仰が支えになってくれれば、できるかもしれない。こうした信頼の心を、呼び起こしてみたらと思います。
あなたが信頼しようとしている信仰心は、からし種一粒ほどかもしれません。たとえそうであっても、イエスはその小さな信仰に、くみ尽くせ

ないほどの恵みをそそいで、不可能を可能にしてくださいます。

年間第 28 主日（ルカ 17:11-19）

年間第 28 主日(ルカ 17:11-19)

すべてに感謝できるお方はただ一人

間違い電話は、よくある話ですが、わたしは１度だけ、間違い電話の人と付き合ったことがあります。まぁ、付き合ったと言っても、デートして食事をしたりとか、そういう付き合いではなくて、間違い電話のあとも、しばらく電話の相手をしたことがある、その程度の付き合いです。
深夜に、電話が掛かってきました。当時、主任司祭を始め、その教会には４人の司祭がいて、わたしは一番若い司祭だったので、基本的にすべての電話を取る必要がありました。深夜に電話が掛かってくれば、まずわたしが電話を取るわけです。
その電話は、若い女の子で、中学を卒業してから高校に行っていない子でした。本人はてっきり、自分の彼氏に電話を掛けているつもりだったらしく、「もしもし」と言ったらいきなりまくし立ててきました。日頃あまり話を聞いてもらえないのか、よくまぁ間違えている相手にこれだけ話せるなぁと、しばらく感心して聞いていたのです。
「あのね、電話間違ってるけど。」すると、その女の子はびっくりして、すぐ謝りました。ただわたしは面白かったものですから、「大変だね。良かったら続きの話、聞くよ」と言ったのです。それから２時間くらいは話を聞いていました。
話を聞いてもらって、嬉しかったのか、また電話していいかと言うものですから、あーいいよって、返事をしたのです。まだ若かったので、深夜に電話が掛かっても次の日の仕事に響いたりはしない時代でした。１ヶ月くらいは続いたでしょうか。その後は安心して、ピタッと電話はやみました。
女の子の電話の相手をしていて、こんなことを思ったのです。どんな人でも、自分がここにいるということを、必死になって知らせたい、知ってもらいたい、分かってくれる人がいてほしい。人は自然に、自分を分かってくれる人を求めるんだなぁ。そんなことを感じました。
さて福音朗読ですが、重い皮膚病を患っている十人の人が、イエスに憐れみを請い求めています。当時の習慣によると、重い皮膚病と診断された人は、社会から切り離され、礼拝にも参加できず、共同体の交わりに加わることができませんでした。健康な人が重い皮膚病の人のそばをたまたま通るときは、重い皮膚病の人たちは大声で「わたしは汚れた者です。わたしは汚れた者です」と叫んで、知らせなければならなかったそうです。
こうした決まり事は、さらに重い皮膚病の人を追い詰めていただろうと思います。先ほどの例でも触れましたが、誰もが、自分を分かってほしい、自分を知ってほしいと思うのに、当時の決まり事は、自分たち病気の人を避けるように、関わりを持たないようにと仕向けていたからです。
そこへ、イエスが通りかかりました。本来なら、「自分たちを避けて

通ってください」と大声で叫ばなければならない決まりがありましたが、それさえも放り出して、「イエスさま、わたしを憐れんでください」と叫んだのです。自分を知ってほしい、自分を分かってほしいと、大声で叫びました。
この重い皮膚病を患っている人々は、どこかで、イエスの噂を耳にしていたのかもしれません。自分たちを分かってくれるのは、この人しかいない。だから、必死になって、自分のことを訴えかけたのでしょう。
イエスは彼らの訴えに耳を傾けました。つまりイエスは、すべての人、たとえ社会から切り離されている人でも、自分を知ってほしい、自分のことを分かってほしいと思っているのだと十分理解していたのです。わたしたちもある程度は分かっているでしょうが、イエスは人間の奥深くからの願いを、知っていたのです。
イエスが彼らの訴えを聞いて、何も特別な動作はしませんでしたが、奇跡的な働きかけをしてくださり、彼らの病気はいやされました。問題はここからですが、十人のうち一人だけ、サマリア人だったとされていますが、イエスのもとにかけより、感謝を捧げたのです。おそらくユダヤ人と思われる残りの九人は、イエスに感謝しに戻らなかったのです。
わたしはこう考えました。イエスに自分のことを知ってほしいと十人とも願ったのですが、イエスしか、自分の置かれた状況を理解できる人はいないと感じていたのは一人しかいなかったのではないでしょうか。なぜなら、残る九人は、ユダヤ人でした。ユダヤ人は、ユダヤ人の社会に戻ることで、多くの人から一定の理解を得られる可能性があります。
ところがサマリア人は、ユダヤ人と敵対関係にありましたので、たとえ健康を取り戻しても、社会的には孤立してしまう可能性があったのです。ほかに何も頼るものがない。そういう中で叫びを上げ、自分を知ってくださった唯一のお方に、感謝を捧げに来たのではないでしょうか。
この出来事からわたしたちが学びたいことは、「イエスだけが、わたしの拠り所です。」そんな気持ちが、わたしたちの信仰にあるでしょうか、ということです。信仰は持っているけれども、どこにでも拠り所があって、イエスだけを拠り所にしているわけではない。それがわたしたちの生活の現状ではないでしょうか。
だれでも、見られたくない部分は人に隠そうとします。それは家族に対しても、一緒に生活している人に対しても同じでしょう。そんな中で、わたしの良い点も悪い点も、すべてを打ち明けて拠り所にしたい。そんな相手はどれだけ身近な場所を探しても見つかりません。すべてを知ってもらうことができるのは、イエスのほかにいないからです。
感謝しに来たサマリア人は、イエスを自分の唯一の拠り所と理解していただけではなく、すべてを感謝できる唯一の相手としても理解していました。わたしが受けているもの、良いものも悪いものもすべてを感謝できる。イエスに対して、あらためてそのような信仰を呼び起こすことができるよう、このミサの中で恵みと力を願いましょう。

年間第 29 主日(ルカ 18:1-8)

年間第 29 主日（ルカ 18:1-8）

その働きが、神に喜ばれるために

今週の説教は、「幻の説教」となってしまいました。この説教は、小教区の誰も、聞くこともこの原稿を読むこともないのです。実は今週、懐かしい同僚司祭がわたしを訪ねてくれて、主日のミサをすべてお願いしているからです。
Ｓ神父と言いますが、彼が長崎に来るという日程を聞き、「長崎で訪ねてみたい人はたくさんいるだろうけれども、もしよかったら五島に来てくれないか」と連絡を取ってみました。するとＳ神父は、快く引き受けてくれましたので、ついでに、「せっかくなら、１日主任司祭も引き受けてくれないか」とお願いしたのです。
Ｓ神父は修道会の司祭です。そのため、おそらく、小教区に赴任して主任司祭になるという経験は回ってこないと思います。そこで、１日だけですが、主任司祭の務めを引き受けてもらいたいと打診したのでした。彼はこの依頼にも喜んで応じてくれました。
おかげでわたしは、楽チン楽チン・・・と思っていたのですが、金曜日の時点で、無事に務めを果たしてもらえるか心配になってきて、かえって気疲れしそうな心配が出てきております。ただ、ここに書かれている中田神父の思いも、すべてメルマガの読者、ブログの読者だけのものになるかもしれません。
今週の福音朗読箇所には、イエスがたとえを話すにあたって、どんな狙いを持って話したのかがはっきり示されています。「イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。」（18・1）わたしたちも、ここから道をそれることなく、今週の学びを得る必要があると思います。
「気を落とさずに絶えず祈らなければならない」この狙いを、わたし自身が身近に感じたことがあります。それは、伊王島の馬込教会時代に経験した司祭館の建設です。長く歴代の主任司祭が住み続けた司祭館に別れを告げ、いよいよ新司祭館を建設することが信徒総会で了承されました。わたしはその時、ある教会でのことを思い出していました。
それは、長崎本土にある滑石教会のことです。滑石教会も、わたしが助任司祭で赴任した時に、教会が手狭になっていると皆が感じ始め、新しい教会が望まれていました。滑石教会の当時の主任司祭も、教会建設の必要性を十分把握していました。
その主任司祭は、わたしがお世話になっている１年の間に、肺炎でお亡くなりになったのですが、お別れする前に、教会建設について一言だけ、わたしに忠告してくれたことがありました。「教会は、祈らんば（祈らないと）建たんとぞ（建たないんだよ）。」
時々、新しい教会について教会役員と意見を交わしたりすることもあったようで、わたしも大変だろうなぁと経験はなくても気にはしていました。ただわたしの頭の中では、資金や、用地、業者の問題、また

信徒が快く同意してくれるだろうかといったことくらいしか思い浮かばなかったのです。
もちろん、主任司祭は助任司祭のわたしも新しい教会に関心を持っていることを知っていました。そんな中で、「教会はな、祈らんば建たんとぞ」これだけを忠告して、新しい滑石教会を見ることなく、神に召されていったのです。
それから７年後に、わたしに司祭館建設に携わるチャンスが回ってきました。わたしの中で、とても大切にしてもらった滑石教会時代の主任神父さまの声が、わたしの心の中で響いていたのです。「司祭館も、祈らなければ、建たない。」
それはつまり、「主御自身が建ててくださるのでなければ、家を建てる人の労苦はむなしい。」（詩 127・1）ということなのです。計画の始めから終りまで、神に守られ、神に支えられた事業でなければならないということなのです。
わたしはついに、主任司祭の教えを実行する時が来たと思いました。司祭は建築家でも設計技師でもありませんから、祈ることで司祭館の完成を手伝う。わたしはそう心に決めたのです。幸いに、司祭館は立派に立ち上がりました。あの司祭館建設時代、不便もありましたが、今週の福音の教えにあるように、気を落とさず、絶えず祈った気がします。そうする以外に、わたしにできることがなかったのです。
新しい司祭館に住み始めてしばらくして、喜ばしい便りが届きました。新しい滑石教会と司祭館が、無事完成したのでした。本格的に着工が始まると聞いたとき、確か馬込教会の司祭館は新しくなっていたと思うのですが、その日から新たに、滑石教会と司祭館の建設のために祈りました。
わたしがお世話になっていた時代からおよそ 10 年かかりましたが、神によって建てられる真の神の家となることを願って、祈りました。ですから祝賀会に参加したときは、特別嬉しかったのを覚えています。
今週のたとえ話に社会的に不利な立場にあるやもめが不正な裁判官を相手にしていますが、彼女は、どんなに裁判官が公正さに欠けていても、自分の権利を守ってもらうためにあきらめませんでした。わたしはおそらく、彼女もその初めから、神に祈って自分を守ってくれるよう願いながら、これでもかと裁判官のもとに通ったのではないかと思うのです。
取り合ってくれない、周りにだれも協力者がいない。そんな中でも、神が守ってくれる。神が、この世の裁判官を動かしてくれる。そう信じて、あきらめなかったのではないでしょうか。彼女が見せた強さは、祈りに支えられた強さだと思います。そう考えてみると、わたしも彼女の態度が理解できるのです。
気を落とさずに絶えず祈る時、必ず道は開けます。わたしもそれを経験しました。わたしたちが今身近に控えている大きな出来事としては、２年後に小教区の中の福見教会と高井旅教会が、それぞれ 100 周年と 50 周年を祝おうとしています。大きな行事ですので、その重さに押しつぶされそうになるかもしれません。
けれども、わたしたちは神が自分たちの教会を支えてくださったこと

を祝おうとしているのですから、神に祈りつつ、この日の準備を進めていきましょう。神が、それぞれの教会を 100 年、50 年見守ってくださったのだという感謝を、わたしたちなりに捧げる日として、計画を練りましょう。
そうすれば、単なる行事に終わることなく、喜びの日として迎えることができるに違いありません。気を落とさず、絶えず祈るようにとの主の教えを、ここでも発揮したいものです。

年間第 30 主日（ルカ 18:9-14）

年間第 30 主日(ルカ 18:9-14)

祈りによって自分が何者であるか知る

先週は同級生の神父さまに主日のミサをすっかりお任せしました。にわか主任司祭の体験を積んでもらおうという計画でしたが、よくよく話を聞くと、７年前から横浜教区の津久井教会で、月に１度くらいミサに呼ばれて主日のミサを捧げているのだそうです。あー、それなら、わたしも３つの教会のうち１つくらいは自分で説教をすればよかったなぁと、今になって後悔しております。
１つだけ、内緒話をしますと、いつも通りの順番で、高井旅教会→福見教会→浜串教会の順でミサを捧げたのですが、高井旅教会は夕方の５時から始めて、だいたい 45 分を目標にしてミサを捧げています。前もってそのことを伝えておりましたら、高井旅教会ではきっちり 45 分で、ミサを終えてくれたのです。
「すばらしいなぁ」と声をかけましたら、「奇跡だねぇ」と答えてくれました。あー、これなら残る２つの教会も、問題なく終われるだろうと思っていたのです。福見教会は高井旅教会で 45 分でミサを終えた直後でしたから、１時間きっかりでミサを終えたのですが、浜串教会はちょっと長かったですね。
わたしは３回とも説教を聞いたので原因は分かっていますが、説教の途中でハラハラして、何度も時計に目をやりました。自分が赴任してきた当初のことを棚に上げて言うのもなんですが、カトリック教会の信者さんは長い説教には慣れていませんから、長くなるといろいろ後ろが閊(つか)えてしまって、どうしても落ち着いて話を聞くことができないようです。
わたし自身は、「説教は 10 分で十分、12 分で十二分」というのがモットーです。もちろん守れないことも多いのですが。
今週の福音朗読に入りましょう。祈るために神殿に上がって来た２人の人のたとえ話です。１人はファリサイ派の人、１人は徴税人でした。ファリサイ派の人と言えば、当時の宗教指導者層であり、知識に長けていた人です。一方の徴税人は、占領しているローマに納める税金を徴収し、規定以上のものを取り立てては、自分の懐を肥やしていた人でした。イエスはこの２人のうち、義とされて家に帰ったのは徴税人であると言い切りました。
どちらが正しい人か、という問いであるならば、ファリサイ派の人が正しいということになります。ファリサイ派の人の言い分はこうです。「神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。」（18・11-12）単に正しいだけではなく、普通の人ができない犠牲まで払っているのです。
それでも、イエスはファリサイ派の人の祈りを義としませんでした。これだけのことをしているから、正しい人に決まっている。罪深い生活と

は一切関わっていないのだから、正しい人に決まっている。ファリサイ派の人は、そう考えて祈りを捧げていました。
他方徴税人は、神に報告できる正しい行いが何一つないことを知っています。ですから、こう祈る以外にないのです。「神様、罪人のわたしを憐れんでください。」（18・13）神さまに誇るものが何もない。幸いなことにそれが、義とされて家に帰るきっかけになりました。
神さまに誇るものがある人と、神さまに誇るものがない人。両者はどう違うのでしょうか。それは、誇れるものがある人は、どうしてもそれを頼りにしてしまい、誇れるものがない人は、神に頼ることになる、その点の違いだと思います。
中田神父は、思い出せばいくつも、自分で誇りに思っていることがあります。３つ例を挙げれば、録音された聖書の CD を使って、ある小教区で聖書の通読会を行った経験があり、その時は何人もの人が、旧約聖書・新約聖書をすべて、通読しました。録音した CD を教会に集まって毎日聞いたのですが、これはうまく行きました。
また、こうして話している日曜日の説教は、ブログやメールで多くの人に読まれています。メルマガでの活動も、今週の説教が 499 回目になりました。来週で 500 回になります。これも、まぁうまくいったほうだと思います。
それから、前任地では偶然にも司祭館建設の場面に巡り合わせまして、当時の信徒と一緒になって、司祭館を無事に建て替えました。浜串教会の前任者は、今その司祭館で過ごしているわけです。わたしは釘一本、壁板一枚作業を手伝ったわけではありませんが、形の残る物ができたなぁとは思います。
とまぁ、自分に頼ってしまう材料があるわけですが、それではなかなか神に受け入れられる祈りはできないということです。むしろ、「わたしは神に見てもらうものが何もない。」そんな人が、神に受け入れられる祈りを捧げる可能性が高いのです。
もう一度、徴税人の祈りを振り返ってみましょう。彼は「遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。」（18・13）となっています。遠くに立ちましたが、彼の心は神の近くにありました。目を天に上げませんでしたが、心は神と向き合っていました。胸を打ちながら、打ち砕かれた心を神にさらけ出していたのです。
徴税人はきっと、自分の罪深さを悲しみながら帰って行ったのでしょう。それは、神の心を揺さぶったのだと思います。祈りを義とするのは神です。人間的な正しさで祈りが義とされるとは限りません。自分が罪の中にあることを正直に悲しむ。その人間らしさが、神に好まれたのではないでしょうか。
自分に頼れるものがあることはすばらしいことです。けれども、神さまの前に自分は何者でもないと本当に思える人は、もっとすばらしいのです。浜串の漁港にたくさんの漁業船が停泊していました。乗組員は今、次の出向を前に、休息していることでしょう。
これからまた荒海に立ち向かう乗組員全員が、「神に頼るのでなければ、わたしたちは何者でもない」と、神の前に自分をさらけ出して祈りをささげ、出発してほしいなぁと思っています。また家族の皆さんも、一緒

に祈ることで、皆が神に自分をゆだねて生きる家族となれるようになってほしいものです。
「自分はこれだけのことをしている人だ」と、神さまを振り向かせようとする祈りではなくて、「わたしは自分には頼りません。すべて、あなたに委ねます」という思いが詰まった祈りを捧げる人になりたいものです。そのための恵みを、このミサの中で願い求めましょう。

年間第 31 主日（ルカ 19:1-10）

年間第 31 主日（ルカ 19:1-10）

ザアカイがアブラハムの子となったように

寒くなってきましたねー。学生たちが浜串教会前のバスに乗って学校に登校する様子を、司祭館の玄関に立ってできるだけ見送るようにしていますが、「神父さまー。寒くないですかー？」と声をかけてくれる小学生がいました。嬉しいなぁと思っていますと、「神父さまー。頭は寒くないですかー？」と言い直したので機嫌を損ねまして、「寒いに決まってるだろ」と大人げない態度を取ってしまいました。
今週の福音朗読箇所は、「徴税人ザアカイ」の物語です。ザアカイは「徴税人の頭で、金持ちであった」（19・2）とあります。徴税人ですから、嫌われてはいたでしょうが、世間的には成功した人と考えてよいでしょう。十分に豊かな人であれば、普通は、何不自由なく暮らしているはずです。けれども彼は、「イエスがどんな人か見ようとした」（19・3）とあります。
十分満ち足りた人であれば、イエスを見物しなくてもよいはずです。最後にはどうしても見たくてたまらなくなって、「走って先回りし、いちじく桑の木に登った」（19・4）のでした。つまり、ザアカイは豊かだったのに、心の中に何か虚しさがあって、それを満たしてくれる人を捜し求めていたのでしょう。イエスがその人かもしれない。そう思ったから、人目もはばからずに木に登ってイエスを捜し求めたのです。
実はイエスも、ザアカイを捜し求めていました。ザアカイ個人を捜し求めていたというよりも、ザアカイのように、心に満たされないものを抱えている人を捜し求めていたのです。ですから、イエスはザアカイに急接近します。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」（19・5）
ザアカイがイエスを迎えて、どのような会話を交わしたかはわかりません。けれども、彼がどんなに豊かであっても手に入らなかったものが、イエスを迎えた時に手に入ったであろうということは十分予想できます。それは一言で言うと「救い」ということです。これまで、「救いが与えられた」「救われた」という実感はなかったのですが、イエスと交わった時に、救いを実感したのです。
ただし、そこには手放しで喜べない事情もありました。周囲の人々は、「罪深い男のところに行って宿をとった」（19・7）イエスが、理解できなかったのです。徴税人のような罪人が、救いに招かれるはずがない。当時の人々の理解はそのようなものでした。イエスはザアカイを次のように人々に示します。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」（19・9-10）
イエスによれば、ザアカイは「失われたもの」でした。「失われたもの」とは、救いを求めていながら、罪の弱さのために神を見失い、探し出してもらうまで捜し求めている人」のことです。それは、100 匹

の羊のうちの見失った１匹であるし、神殿で祈った２人の人のうち、「神さま、罪人のわたしを憐れんでください。」（18・13）と祈った徴税人とも重なります。神に探し出してもらおうと、叫んでいる弱い存在なのです。
ザアカイは、自分がイエスに探し出してもらい、救われたことを感謝して、人々の前で自分の取るべき態度を表明します。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」（19・8）
これはザアカイの寛大さの表れでもあると思いますが、もう少し考えると、「貧しい人々」を含む「弱い立場にある人々」が、希望を得て神を捜し求めるために力を尽くしたいという気持ちの表れではないかと思うのです。
打ちひしがれ、うつむいている人々が、神を捜し求め、神に探し出してもらうために、わたしは力になりたい。自分が経験した救いに、多くの人が触れてもらえるように、そのために自分の生き方を転換したい。そんな態度表明ではないでしょうか。
わたしたちを振り返ってみましょう。ザアカイが示した態度は、わたしたちに何かを教えてくれるかもしれません。彼は、自分が探し求めている間に、イエスが見つけ出してくれて、救いに招いてくれました。もしわたしたちが、罪をゆるされ、イエスに探してもらって、救いに招かれた人間であるなら、今ザアカイと同じ態度を表明するように求められているのではないでしょうか。ザアカイが、自分の経験した救いに、多くの人が触れてもらえるように力になろうと決心したように、周りの人に、「あなたも、イエスさまが探している人です。イエスはあなたを探し出して、救いに招こうとしています」と呼びかけましょう。
呼びかける言葉はいろいろあると思います。どこにも心の平安を見つけることができないでいる人に、「あなたは、イエスに心の平安を求めたことがありますか？もしイエスに求めたことがないなら、思い切って心の平安をイエスに願い求めてはどうですか？」こんな呼びかけもできるでしょう。
何かが足りないと感じている人は、たくさんいます。わたしたちが、イエスによって救われたと心から信じるなら、何かが足りないと感じている人に語りかけるべきです。「あなたに足りないもの、それはイエス・キリストです。」もしこのように言うなら、わたしたちは大きな働きを世に対して果たすことになります。
イエスは、捜し求めている人を捜しています。弱さの中にいて、探してもらうしかない人々を、訪ね回っているのです。訪ねていくために、わたしたちの手足を必要としています。わたしたちが、社会の隅々にまで、「イエスがあなたを捜しています」というメッセージを伝えることができるよう、このミサの中で証しの力を願い求めましょう。

年間第 32 主日(ルカ 20:27-38)

人間に命を与えた神は永遠の命も与える

年間第 32 主日が回ってきました。年間の主日も 30 週あたりになると、「あー、そろそろ今年の教会の暦も終わりに近付いているなぁ」と意識します。皆さんも十分ご承知とは思いますが、教会の暦・典礼暦は、年間第 34 週に当たる「王であるキリスト」で終わり、待降節、つまりイエスの誕生を待つ季節から新しい１年が始まります。
そうなると、典礼暦を締めくくるこの時期、わたしたちはどんな思いで過ごすべきか、まず知っておきたいのです。皆さん１人１人が理解してほしいのです。教会暦が１年の終わりに意識させようとすること、それは、「終末」についてです。終末と言っても今週、来週の終わりではなくて、この世界が終わりには完成する、ということについて、意識させようとします。
そこで、この世界の終りに何が考えられているかですが、わたしたちが唱える使徒信条の中にはっきり出てきます。「聖霊を信じ、聖なる普遍の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます。」人間は復活して、永遠のいのちに招かれるのです。この復活信仰について、今週の福音朗読は考えさせます。
今週の福音朗読で登場するサドカイ派は、ユダヤ人の中でも復活を否定しているグループでした。彼らは、復活という考え方を持っていないモーセ五書だけを重んじていました。そして、モーセ五書の中の申命記で取り上げられている規定を持ち出して、もし復活があるなら、大混乱になると主張したのです。
申命記 25 章 5-6 節には、次のような規定がありました。「兄弟が共に暮らしていて、そのうちの一人が子供を残さずに死んだならば、死んだ者の妻は家族以外の他の者に嫁いではならない。亡夫の兄弟が彼女のところに入り、めとって妻として、兄弟の義務を果たし、彼女の産んだ長子に死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルの中から絶えないようにしなければならない。」そして、この規定を盾にとって、今週のような論争を挑んできたのです。
イエスはサドカイ派の議論に、２つの点で答えています。まず、当時のユダヤ人が一般的に持っていた復活に対する考え方をイエスは訂正しました。当時、特にファリサイ派の人の間で復活後の生活は、この世の生活の延長と考えられていました。ですから復活後も結婚し、子供を産むと考えていたわけです。
イエスはその点をまず訂正します。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。」（20・34-35）子孫を残すのは、死を乗り越えようとするためです。復活した人はもはや死ぬことはないのですから、結婚して子孫を残す必要はありません。皆、兄弟姉妹のようになると思ってよいでしょう。
次に、サドカイ派が大切にしているモーセ五書から、復活はあると説明

します。サドカイ派の人はモーセ五書に復活信仰は書かれていないと考えていましたが、アブラハム、イサク、ヤコブがいつまでも死に渡されたままでいるだろうか。むしろ神は、今もアブラハム、イサク、ヤコブを生かしてくださっていると考えるべきではないか。イエスはこのようにサドカイ派の人を諭しました。
復活は、この世の終わりを考えるのにとても意味ある内容だと思います。人生の終わりや、この世界の終りが、そのまま消えてなくなってしまうものだとしたら、わたしたちには人生を全うするための希望がなくなることになります。消えてなくなる人生のために、わたしたちがどれだけ努力しても、空しいのではないでしょうか。復活の希望があるから、わたしたちは人生の終わりとこの世界の終わりを、希望をもって迎えられるのです。
今、１人の神父さまを皆さんに紹介して説教を終わりたいと思います。「よきおとずれ」の 11 月号１面で、人事異動が発表されました。その中で、中島健二神父さまが、病気療養に入ることが発表されました。平戸ザビエル教会の主任司祭で、平戸地区の地区長も兼務していた神父さまです。
中島神父さまの病気は、肺ガンです。治療が困難な場所に症状が出ているということで、大掛かりな治療は行わないということでした。そうなると、神父さま本人の体力とか、気力とかに大きくかかって来ると思います。その代わりに、188 殉教者の取り次ぎを願って祈ってほしいとお願いしています。
今、188 殉教者は福者の位にありますが、取り次ぎによって奇跡が起こるなら、聖人の位に上げられる可能性があります。中島神父さまは、188 殉教者の取り次ぎを信じ、奇跡を願っています。わたしも、神さまが必要とされる奇跡であれば、奇跡は起こると信じています。ぜひ、神父さまのためにお祈りをお願いいたします。
神父さまがどんな思いで１日１日を過ごしているのか、想像もつきませんが、ご自分の人生を神の望むように全うし、完成させたいと願って、今を大切に生きているのではないでしょうか。人生を全うしたいと思う中で、復活と、永遠のいのちを信じて、希望を持って生きていると思います。
サドカイ派の人は、復活を否定しました。わたしたちは復活を信じ、人生が完成し、世界も完成して終わることを信じましょう。今生きている人の中には、残り時間はこれくらいしかないと、宣告を受けている人もいます。それでも、復活への希望を信じて生きるなら、残された時間は大きな意味があります。
「わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。」（ヨハネ 6・39）このように仰ったイエスが、大きな困難の中にある人も含めて、復活に希望を置く証し人としてこの人生を生き抜くことができるように、恵みを与えてくださる。そう信じて、このミサの中で祈りをささげたいと思います。

年間第 33 主日(ルカ 21:5-19)

聖霊の７つの賜物に信頼して生きよう

今日は、堅信の秘跡を受ける中学２年生に話しかけたいと思います。前もって断っておかなかったので、堅信式のミサにあずかれば、今日は務めを果たしたと考えて、朝のミサに来てないかもしれませんが、それはわたしの責任ですから仕方ありません。それでも、今日は、堅信を受ける受堅者に話しかけたいと思います。

今週の福音朗読は、年間を通しても特別に難しい箇所かもしれません。この世の終わりがやってくるとき、今日の朗読に書いてあるような恐ろしいことがいくつも起こるというのです。おそらく、１度読んだだけではとても理解することはできないでしょう。

まずは、面倒くさがらずに、２度３度と繰り返し読むことから始めましょう。堅信の秘跡を受ける人は、聖霊の７つの賜物を受けます。それは、「知恵と理解、判断と勇気、神を知る恵み、神を愛し、敬う心」です。知恵と理解が聖霊の賜物として与えられるのですから、２度３度と読み返す努力と合わさって、きっと何かの理解が得られると思います。

繰り返し読むと、次のことに気が付くでしょう。それは、さまざまな恐ろしいことをイエスは予言しますが、同時にどういう心構えが必要かについても、ちゃんと話してくださっているということです。２つの箇所を拾ってみましょう。

「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』とか、『時が近づいた』とか言うが、ついて行

ってはならない。」（21・8）「戦争とか暴動のことを聞いても、おびえてはならない。」（21・9）「惑わされないように気をつけなさい。」「惑わされないように」「ついて行ってはならない」「おびえてはならない」と、具体的な心構えを示してくれています。では、今拾い上げたようなことは、この 21 世紀に起こるような出来事でしょうか。「それは起こる」と、わたしは言っておきましょう。しかも、身近な場所で、それは起こると思ってください。

例を挙げましょう。堅信の秘跡を受けて、ますます教会の中で期待される人になっていきますが、堅信の秘跡を受ける皆さんの周囲は、神の恵みを全く理解しない雰囲気に充ち満ちているのです。これまで、学校の授業で、一言でも、次のような話が出てきたでしょうか。「神の語り掛ける言葉に耳を澄ましてみよう。きっと、あなたが進むべき道を、神が示してくださる。」おそらく、１度も出てこないはずです。

むしろ、「部活で心と体を鍛えよう。授業に真剣に耳を傾けよう。これらは、君が将来、高校や大学に行ったとき、社会人になったとき、役立つ人になるために大切なのだ。」そこまでしか話してくれないはずです。高校に行っても、大学に行っても、社会人になっても、堅信を受ける皆さんの周囲は、神の恵みについて一言も教えてくれないのです。

これは、形を変えたイエスの予言の実現だと思っています。「神の恵みなんてどこにもいらない。必要なのは、今学校で勉強し、部活で身につけていること。これより大事なものはないんだ。」わたしたちの周囲は形を変えて、「わたしがそれだ」とか、「時が近づいた」と言っている

わけです。

けれども、「ついて行ってはならない。」このイエスの言葉を思い出しましょう。学校の勉強と、部活。これだけであなたの時間をすべて埋めてしまってはいけないのです。先生が学校と部活を大切にしなさいと言ったとしても、その２つで生活時間をすべて埋めてしまったら、道を間違えてしまいます。

皆が当たり前のように考えてしまっている雰囲気の中で、堅信を受ける皆さんは堂々と、別の生き方を示してください。それは、「勉強と部活が、わたしのすべてを形作ってくれるのではない。日々の生活の祈りの中で、また日曜日の礼拝の中で出会っている神が、いちばん深い場所でわたしを形作ってくれている。だからわたしは、教会に行く。」堂々と、証しをしてほしいのです。

もちろん、教会に堂々と行く皆さんには、ものすごい逆風が吹いています。「民は民に、国は国に敵対して立ち上がる。そして、大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる。」（21・10-11）「人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張って行く。」（21・12）「教会に１回も行ってないカトリック信者も、立派に学生生活をこなしているじゃないか。立派な社会人になっているじゃないか。あなたが時間をかけて出かける教会に、意味があるのか。」面と向かってそう言う人が現れるかもしれません。

イエスはどう答えるでしょうか。「それはあなたがたにとって証しをす

る機会となる。だから、前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい。どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである。」（21・13-15）堅信の秘跡が与えてくれる聖霊の７つの賜物は、必ずあなたを助けてくれます。

考えてみてください。立派に学生生活を務めても、立派な社会人になっても、聖霊の７つの賜物が注がれなければ、教会で神の恵みを受けなければ、何のために人は生きているのかさえ、確かな答えにたどり着けないのです。神だけが、人が生きる目的を教えてくれるのです。教会に１度も来ることなく、神の照らしと導きを受けずに、人生に目的を失っている人がどんなに多いことでしょう。日本には、生きることを断念する人が、年間３万人もいるのです。

堅信を受ける皆さんと、すでに堅信を受けたすべてのカトリック信者は、堂々と証しを立てましょう。わたしは、今日も明日も、人生の目的と意義を教えてくれる神に、礼拝と感謝をささげる。わたしは、すべての同級生の前で、神に証しを立てる。この証しのために、今日堅信の秘跡を受ける皆さんは招かれ、聖霊の７つの賜物をいただくのです。

王であるキリスト（ルカ 23:35-43）

王であるキリスト(ルカ 23:35-43)

十字架のキリストに、王の姿を見る

いよいよ、教会暦の最後の日曜日がやってきました。来週からは新しい一年の始まり、待降節です。今週の「王であるキリスト」の祭日を通して、この一年を振り返ることにいたしましょう。
今週の福音朗読は、人々が口々にイエスを侮辱している様子が目立っています。兵士は、「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」（23・37）と言っています。そこで、王に必要な資質について、考えてみたいと思います。
１つの点に注目してみましょう。十字架にかけられているイエスを、３通りの人物が侮辱しています。議員たちと、兵士たちと、十字架にかけられていた犯罪人の一人です。彼らに共通している要求があります。それは、「自分を救ってみろ」ということです。「神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」（23・35）
これは興味深い点だと思います。救い主に対して、自分を救えと言っているのです。彼らが、イエスを全く理解しなかったことを、よく表しています。救い主は、自分を救うためにおられるのではなくて、わたしたちを救うためにおられるのです。それなのに、イエスを侮辱する人々は、自分を救ってみろ、と言ったのです。
そこで王に必要な資質ですが、王は、自分の民を罪から救う者でなければなりません。他人を救うどころか、自分すら救えない人が、王であるはずがないと、人々は考えていました。本当に、十字架上のイエスは、人々を救えないのでしょうか。
イエスを侮辱する人々に関して、もう１つの興味深い点があります。イエスを侮辱しているそれぞれの登場人物は、イエスとの距離が少しずつ違っています。議員たちは、イエスから遠くに立っている人々でした。イエスのことを全く興味を失ってしまった人々と言ってもよいかもしれません。
兵士たちは、イエスのそばにいます。「イエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、言った」（23・36-37）とありますから、近づいて、イエスをより詳しく観察できる立場にありました。彼らはイエスに興味がありますが、心を開いてイエスの言葉に耳を傾けるつもりはありません。
十字架にかけられていた犯罪人の一人は、同じ刑罰を受け、さらに深くイエスを観察できる人々でした。そして、自分たちと同じ極限の刑罰を受けるイエスを、なぜ逃れようとしないのか、不思議に思っています。
ここで、イエスとの距離を取り上げたのは、イエスが、目の前にいる人に対してだけ王であるのではなく、遠くにいる人にも、民を罪から救う王であることを考えるためです。そして実際に、それぞれの距離にある人々が、救われていくのです。
十字架にかけられていたのは、イエスをののしった人だけではありま

せんでした。もう一方にかけられていた犯罪人は、イエスが自分たち犯罪人を救うことができると信じました。
当時の一番重い刑罰を受けていたのですから、最低の人間だったことになります。その、最低の人間と同じ場所にとどまっているイエスを、ほかの人にはできない力あるお方だと理解したのでした。「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」（23・42）「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」（23・43）このやり取りは、イエスの最後の言葉の中でも、特に心を打たれます。
兵士と同じ距離にいた人の中に、イエスを神の子・救い主と認めた人がいました。百人隊長です。「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美しました（23・47）。この百人隊長は、百人の兵士を束ねる隊長ですから、人の心をよく理解できる人でした。この百人隊長の目には、イエスが人々を救うために最後まで自分の責任を果たしていることが見えていたのです。
では、イエスから遠く離れている人々はどうでしょうか。「見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。」（23・48）とあります。心を打たれて帰って行った群衆がいたのです。イエスは、どん底にある犯罪人も、興味があるけれどもイエスに忠実に従えない弱い人間も、全く興味を示さなくなった冷淡な人をも、救ってくださる王なのです。
十字架にかけられているイエスを見て、救いを得られない人々と、救いに至った人々がいました。出来事は同じなのに、結果に違いが現れたのは、イエスの姿をどう受け止めようとしているか、わたしたちの態度にかかっているのではないでしょうか。
人間的にはみじめな姿になっているイエスを見て、最低の人間にまで手を伸ばそうとしていると見るのか、何もできないみじめな姿だと見るのか、わたしたちの受け止め方にかかっているということです。
では、十字架にかけられているイエスを見て、今のわたしたちはどう受け止めるのでしょうか。あんなに弱く貧しい姿にまで自分を置いてくださったのだから、わたしが罪を犯し、深い淵に落ちたとしても、わたしのそばに来て救ってくださる。わたしの王となってくださる。そのような思いで十字架上のイエスを見つめることができる人は幸いです。
イエスを信じない人々は、「自分を救ってみろ」とイエスを侮辱しました。イエスが十字架から降りないことを、人々を罪から救う王のしるしと読み取る信仰が今必要です。本当はこの１年、罪によって自分が落ち込んだ時、「わたしを思い出してください」「あなたはわたしと一緒にいる」と、イエスは絶えず助け起こしてくれているのです。この１年を振り返り、あのときは助け起こされたのだなぁと思い出せる場面を探してみましょう。きっと何かがあるはずです。その助け起こされた主を、来週からは新たな気持ちで待ち望むことになります。
十字架に架けられたイエスに、あらためてすべての人の救い主・王の姿を確かめるための恵みを、このミサの中で願いましょう。

年間第 14 主日(ルカ 10:1-12,17-20)

待降節第１主日（マタイ 24:37-44）

すべての人のために、救い主を待つ

木曜日に、250cc のバイクで青方に行ったのですが、中ノ浦に抜ける山道の途中でスリップしまして、バイクと一緒に転倒してしまいました。山越えして中ノ浦に出る人は説明すればすぐわかる場所ですが、浜串から中ノ浦に峠を降りていくと、左に出る道と右に出る道に分かれます。青方に向かっていたので、右に曲がり、出口に向かっていました。右に曲がってすぐに、今度は左カーブです。そのカーブで膨らんでしまって、あわてて後輪のブレーキをかけたら、右端の泥の塊のところでスリップしてステーンと転んだわけです。
転倒した時、バイクに挟まれたまま泥の塊で１メートルほどスリップしました。すねを擦りむきましたが、幸いに頭も打たず、骨も折れず、無事に帰ってこれたのが不思議です。転倒直後、自分の後ろから車が２台やってきましたが、車にひかれなかったことは、神さまに守ってもらったんだなぁと思いました。
今日の日曜日のために、いのちの大切さ、特に出生前のいのちの大切さについて説教で触れなさいと、大司教さまから小教区の司祭たちに通達が来ていました。いのちは、自分で守れないことがあります。特に、出生前のいのちは、母親が守ってくれなければ、自分で自分を守ることができません。
今年の教会暦の始まり、待降節第１主日に、いのちの大切さについて考えることは、大変意義深いと思います。救い主は、幼子としてお生まれになります。幼子は、母マリアの胎内で、準備の時を刻みます。わたしたちが救い主を待つ間、まさに救い主は出生前のいのちなのです。
ほかの胎児と同じように、自分で自分の命を守れない、弱く小さな姿に、救い主は置かれています。その命を大切に見守り、誕生を待ち望みます。救い主の誕生を、いのちの大切さという見方で考えるとき、わたしたち自身にも深くかかわってきます。わたしたちはみな、待ち望まれて生まれてきているからです。
わたしのもとに、よく来てくれた。わたしの孫として、よく来てくれた。一人一人が、そうやって待ち望まれて生まれたことを知っていますから、救い主の誕生にも、同じ思いを向けてみましょう。わたしたちのもとに、おいでくださることをよく決断してくれました。感謝申し上げます。わたしたちは、あなたがおいでくださることを、心待ちにしています。こんな気持ちが心に湧いてくるなら、待降節の過ごし方は素晴らしいものになるでしょう。
ところで、救い主の誕生を、冷ややかに見ている人もいます。日本では、クリスマスという言葉を知らない人はいないと言ってもよいくらいですが、クリスマスが救い主の誕生を祝う日だということを知っている人は、あまりいないのです。
驚くかもしれません。けれども、クリスマスという言葉だけを知っている多くの日本人にとって、クリスマスに必要なものはクリスマスプレゼ

ント、ケーキ、サンタクロース、クリスマスツリー、これくらいなのです。
カトリック教会が準備する時期よりもはるか先に、クリスマスの商売のために世の中は飾りたてています。まさに、今週の福音朗読にある通りの有様です。「洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。そして、洪水が襲って来て一人残らずさらうまで、何も気がつかなかった。」（24・38-39）
「何も気がつかなかった」と言っています。何も気がつかずに、日々を過ごし、クリスマス当日も過ぎていくのです。救い主の誕生の抜けたクリスマスを祝う人々は、クリスマスが終わると初売りのために飾りを取替えようと大忙しです。
ここで、イエスのもう１つの忠告が響きます。「そのとき、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。」（24・40-41）
救い主を待つ人は、救い主の到来の日に残って留まることになりますが、救い主を待っていない人、クリスマスを祝っていながら、救い主を迎えない人は取り去られ、いなくなるのです。
クリスマスという、同じ言葉を口にしている二人のうち、一人は連れて行かれ、もう一人は残されます。この重大な事実を耳にした時、わたしたちはただ自分たちが救い主を待つだけでよいでしょうか。とてもそうは思えません。救い主を待ちながら、クリスマスの準備をしませんかと、人々に語りかける必要があるのではないでしょうか。救い主の到来に、一人でも多くの人を招くべきではないでしょうか。
バイクで転倒した同じ日、奈良尾病院で面白い人に会いました。違う小教区の信者さんで、26歳で洗礼を受けたというお父さんでした。この方は、地域の人に「教会に行ってみませんか」と積極的に誘って、今現在８人が、教会のミサに出席しているのだそうです。
その人々に、「祈りはそんなに難しく考えなくてもいいのだよ」とか、「最低限の教えは、覚えてもらうことになるけど、教えを学ぶと、神さまがわたしたちを愛してくださっていることがよくわかるよ」とか、わたしよりもわかりやすい教え方で、教会に誘っている人に救い主をお迎えする準備をさせていると話していました。
肺炎で病院に入って、自分が誘った人たちがどうしているか心配でたまらないと、自分の病気以上に教会に導こうとしている人々のことを心配しているのです。わたしは15分以上その人の話に耳を傾けていましたが、頭の下がる思いでした。本当に面白い人でした。次のお見舞いの時に、まだ入院していたら、もう１度会いたいなぁと思っています。
救い主の到来を待つことには、特別な意味と価値があります。すなわち、幼子としてこの世においでになる救い主を待つことは、わたしたちの命の大切さを改めて考えることにつながります。わたしたちはみな、待ち望まれていたいのちです。同じように、救い主も待ち望まれておいでになるべきです。信じているわたしたちはもちろんですが、

信じていない人々も、いつか信じてくれるように、働きかけるのです。そして、救い主を待ち望まないクリスマスは、どんなに華やかな飾りがあっても価値がありません。救い主の到来がわたしたちの最大の関心でなければ、クリスマス飾りは何もわたしたちにもたらしてくれません。わたしたちの救い主を待つ姿勢が、クリスマスの意味と価値を人々に証しするものとなるよう、証しの力を願いましょう。

待降節第 2 主日（福音書）

待降節第２主日（マタイ 3:1-12）

預言者の声を生活に響かせよ

待降節第２主日に教会の典礼は、洗礼者ヨハネを登場させます。もし覚えてくださるなら、来年の待降節にも思い出してください。第２主日には洗礼者ヨハネが登場するのです。そして、今日の福音朗読にあるような声を、人々に響き渡らせるのです。
「そのころ、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言った。」（マルコ３・1-2）わたしはこの言葉を繰り返し自分に言い聞かせて、次のように考えてみました。「洗礼者ヨハネの声は、今の時代に本当に聞こえているだろうか。」もちろんわたしは、「洗礼者ヨハネの声は、今の時代にも響いている」と思いたいです。
今日は「宣教地司祭育成の日」でもあります。１週間前、修道会の神父さまで久保神父さまという方が浜串に滞在していましたね。神父さまは、アフリカで宣教をしておられるということでした。３年に１度、休暇を取って日本に戻ってくるそうですが、見方を変えると、３年間は、日本に帰ってこないわけです。
わたしは、この久保神父さまとしばらくお話をして、ミサを一緒にささげて、この神父さまの声が、アフリカで響いているのだなぁと思いめぐらしました。日本人の神父さまが、アフリカの地で、「悔い改めよ」という声を響かせているのだと感じました。
もちろん、わたしがアフリカに行って、久保神父さまが宣教している様子を確かめて来たわけではありません。けれども、「悔い改めなさい」という言葉そのものを言うことが、洗礼者ヨハネの使命だったのではないと思います。
むしろ、洗礼者ヨハネの使命を預言するイザヤ書の引用「荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』」この思いが届いていれば、それは洗礼者ヨハネの使命が果たされていると言えるのではないでしょうか。
では、「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。」とは、どんな態度を表しているのでしょうか。わたしは、神に従う生き方を曲げないで生きるということだと思います。神にまっすぐに従う。それが、「主の道を整える」態度です。
そこからすると、わたしたちも生活を見渡して、洗礼者ヨハネの「悔い改めよ」と言う言葉が響いているか、よく吟味する必要があります。神さまの前に、今日しなければならないことを、「今日は疲れているから、明日しよう」と考えるのは、主の道を曲げる生き方だと思います。
まずは、わたしの身の回りで、神にまっすぐに従うように、道を整えたいものです。わたしはよく小学生のゆるしの秘跡で、３つの場面を考えなさいと言います。１つ目は、家庭での過ごし方です。道をそれなかっただろうか、考えさせます。２つ目は、学校での過ごし方です。

学校が、ある意味で一番長く過ごしている場所ですから、神さまの望みにそれなかっただろうか、考えてもらいます。３つ目は、出かけた先でのことです。
この３つは、２つ目を仕事場でと置き換えると、大人の信者にもあてはまると思います。この３つを振り返って、「道を曲げていたら、道を整えよう」と考えると参考になると思います。そして今日は、中学生高校生にも、「道を曲げていたら、道を整えてほしい」と呼びかけたいと思います。
学校で、本心ではない態度を取ることはないでしょうか。クラスの中で、だれかが仲間はずれになっているとしましょう。そのクラスの中で、仲間はずしにする流れに同調せずに、「わたしは、神さまへの道を曲げません」と、きっぱり態度で表しているでしょうか。
とても勇気のいることですが、ここで譲ってしまったら、「悔い改めよ」という声に耳をふさいでしまうことになります。そうなることのないように、学校生活を神さまにまっすぐに従うつもりで過ごしてほしいのです。中学生高校生にとって、「わたしは道を曲げません」という毅然とした態度を取ることが、洗礼者ヨハネの「悔い改めよ」という声を響かせることになると思います。
洗礼者ヨハネの「悔い改めよ」という声は、主の降誕を準備するこの時期、すべての人に響き渡らせるべき声です。わたしの身の回りで、わたし自身の心の中で、そしてまだ神さまを知らないでいる身近な人々の中で、響き渡らせましょう。わたしたちはそのために、先に洗礼者ヨハネの言葉を聞いたのです。より多くの人の中で、神にまっすぐに生きることが喜びとなるように、今日のミサの中で願いましょう。

待降節第３主日（マタイ 11:2-11）

待降節第３主日（マタイ 11:2-11）

その方がそれ以上のものを見せてくださる

言うなと口止めされていますけど、やっぱり今日は昼ご飯の話から入りたいと思います。木曜日に電話がかかりまして（木曜日って、しばしば何かが起こる日ですね）「〇〇です。昼ご飯を有川に食べに来ませんか」と声がかかりました。
わたしは心の中では、「なんぼなんでも、昼ご飯を食べるのに有川まで走らんばいかんとやろか（有川までどうして行かなければならないのだろうか）」と思っていました。それでも、ここで断ったりすれば、後々の付き合いが悪くなるかもしれないと思い、「じゃあ行きます」と返事をしたのです。
返事をしたのはいいのですが、わたしは朝から賄いのシスターがお出かけすると言うので、「じゃあわたしでも準備できるうどんをたいて、魚を焼いて食べるから」と伝えていました。台所に行くと、やはりうどんが１人分置いてありまして、書き置きにも「お魚は冷蔵庫にあるのを焼いてください」と指示されていました。
せっかく準備してもらっているのに、悪いことしたなぁと思いつつ、筆ペンで「事情が変わり、有川でご飯を食べることになりました」と書き置きをして有川に出発しました。帰ってきたら、シスターはどう思うだろうか、それにしても有川では、何人くらい集まって昼ご飯を待っているのだろうか。そんなことを思いながら、有川のエレナの道向かいの食堂に入ったのです。
畳の部屋に通されました。メンバーを見て、わたしは腰を抜かしました。事情があって外で食べることになりましたとお詫びを書いたその当人が、テーブルに座っているではありませんか。電話をかけて誘ってくれた人を含め、テーブルには４人いましたが、「なんでわっどみがおっとな」と、正直思いました。出発前にお詫びのメモを書いて損したとも思いました。
まあひとしきりおしゃべりしながら昼ご飯をごちそうになりまして、また有川から浜串に戻ります。戻りながら、わたしは今日の福音朗読箇所を重ねて考えることにしました。イエスは群衆に３度、次のように問いかけています。「何を見に行ったのか。」
わたしは確かに、何かを見て、帰って来ているわけですが、何を見て来たのだろうかと、帰り道に問い直してみたのです。ご婦人と、賄いシスターを見に行ったのだろうか。有川まで行ったのですから、それでは元が取れません。食事中の楽しい会話でしょうか。楽しい会話も、有川でなくても可能でしょう。
「では何を見に行ったのか。預言者か。そうだ。言っておく。預言者以上の者である。」（11・9）福音朗読箇所では、イエスさまがヨハネのことを、「預言者以上の者である」と仰いました。預言者は、来るべきお方について預言をするところまでです。
けれども洗礼者ヨハネは、来るべきお方を「見よ、世の罪を取り除く神

の子羊だ」（ヨハネ１・29）と指し示すことまでした人です。洗礼者ヨハネの呼びかけを心の底から受け入れた人は悔い改めの洗礼を受けました。
一方、信じようとしなかった人は、洗礼者ヨハネを信じないばかりか、彼が預言し、指し示したイエスをも信じませんでした。遠く離れた荒れ野に出かけて、預言者以上の者を見たと気づいた人は、生活を大胆に神に向け直すことができたわけです。
そこで、振り返ってわたしは有川までご婦人がたに引っ張り出されて何を見たのかと考え直したときに、婦人会の「あっどみ」以上の者を見た、そういう答えにたどりつきました。では、「あっどみ」に、「あっどみ以上」の何を見たのでしょうか。
洗礼者ヨハネのもとに集まり、悔い改めの洗礼を受けた人々は、洗礼者ヨハネの向こうにおられる救い主、まだ見ぬ「来るべきお方」を見たのでした。わたしも、お昼をごちそうしてくれた婦人会の人たちの向こうに、来るべきお方を見たと感じました。
なぜかと言うと、もし洗礼者ヨハネの呼びかけに応じなかったなら、人々は来るべきお方に導いてもらえなかったわけです。同じようにわたしも、あの時面倒くさがって昼ご飯にお呼ばれしなかったら、婦人会の人たちの向こうにおられる「仕えられるためではなく、仕えるために来た」お方に、出会うことができなかったと思うのです。
わたしたちの救い主は、誰も考えられないような場所にやってきて、お生まれになりました。預言者イザヤは、「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」（イザヤ７・14）とは言いましたが、それが、家畜小屋で、飼い葉桶に寝かされている乳飲み子であるとは、想像できなかったことでしょう。
もしイエスが今ここに現れて、「どこそこに行きなさい」と言われた時、それがどんな場所であれ、「嫌です」とは言えないはずです。どこにでも行きなさい。どこででも、あなたは仕えなさい。そのことを教えるために、有川で婦人会の「あっどみ」のところまで行き、婦人会以上の者を、見せてくださったのだと思います。
神は今週、わたしたちに出来事以上のものを読み取るよう、目の前にいる人物を通して、その向こうの存在をはっきりとらえるようにと、呼びかけているのではないでしょうか。目の前に繰り広げられている出来事や、目の前に立っている人物だけに気を取られていたら、神がもっと大きなことを教えようとしていても見落としてしまいます。
先週きちんと整えられた馬小屋を見てください。この馬小屋の飼い葉桶に、まだおいでにはなっていませんが、必ずおいでになるお方が見えているでしょうか。もうすぐおいでになると、期待に胸が膨らんでいるでしょうか。
洗礼者ヨハネは、「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」（11・3）と尋ねさせました。わたしたちに、「何を見に行ったのか」と問いかけ、「預言者以上の者である」との深い意味を教えてくださるのはイエス･キリストだけです。大きな期待を胸に、ご降誕までの日々を過ごすことにいたしましょう。

待降節第 4 主日(マタイ 1:18-24)

待降節第４主日（マタイ 1:18-24）

神はわたしたちを救う

先週のクリスマス会は、楽しかったですね。どの出演者もすばらしかったので、審査委員を務めたわたしもずいぶん頭を悩ましました。特にすばらしかったのは、高校生です。できれば高校生は、眠そうな顔でもいいから日曜日のミサに来て、こうやって褒めちぎっているのを生で聞いて欲しいものです。やるときはやるというのは十分伝わったから、あとは、ミサに来てやったぞでもいいから、来て欲しい。
出演者の皆さんご苦労さまでした。わたしも出演したので、出演者の気持ちはよく分かります。緊張する人は、出番が近づいてくると、わたしだけ拍手をもらえなかったらどうしようと、舞台の袖ではそれはもう張り詰めた気持ちになったことでしょう。わたしも、失敗はいやだなぁとすごくプレッシャーを感じていました。
それでも出番は回ってきます。準備が整っていなくても、舞台に上がらなければなりません。逃げ出したいくらい高ぶった人もいるかもしれません。出演者がどうやって恐怖を乗り越えたんだろうと想像します。それはたぶん、今週の福音朗読箇所で登場したヨセフの気持ちに近かったかもしれません。ヨセフは目の前の婚約者が身ごもっていて、起こっていることが飲み込めず、身を引こうとしていたのです。
ヨセフは、マリアのことを表ざたにせず、ひそかに縁を切ろうと決心までしていました。けれども、主の天使が夢に現れ、勇気づけたのです。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」（1・20-21）それは、舞台から逃げ出したい気分だったヨセフを、表舞台に立たせるのに十分な言葉でした。
「恐れず妻マリアを迎え入れなさい。」天使が最初に告げた言葉です。わたしは、この言葉ではまだ、ヨセフは表舞台に立てなかったと思います。なぜなら今まさに、ヨセフは恐ろしくなっているからです。恐れている人に恐れるなと言ったって、無理な話です。
何かこれとは違う言葉が、ヨセフに踏ん切りをつけさせたのではないでしょうか。わたしは、「その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」この言葉こそ、ヨセフに「これなら大丈夫！」と言い聞かせ、舞台に上がらせる力となったのではないかと思っています。
「イエス」という名前は、もとの言葉では「神は救う」という意味があります。生まれてくる子に、「神は救う」という名前を付けるには、２つの覚悟が必要でしょう。１つは、「神は救う」ということを、心の底から信じるということです。
出来事は、信じられないようなことだらけです。婚約者はすでに身ごもっているし、夢の中には主の天使が現れました。それでも、これらの出来事を通して、きっと神はわたしたちを救ってくださるのだ。だ

から、わたしが舞台を去ってはいけない。そう考えたのでしょう。
もう１つは、「神は救う」を意味する名前を、生まれようとしている子に付ける、その決断力です。確かに「神は救う」でしょう。けれども、この子がまさに「神は救う」そのしるしであると、人々の前にはっきり態度表明をするのは、勇気のいることです。
神が救ってくださるのは結構。でもヨセフは表舞台から立ち去りたい気持ちだったのです。そのヨセフを、「あなたが表舞台に立たないと、『神は救う』という神の計画が前に進まない。」そう促されて、ようやく妻マリアを迎え入れ、ヨセフは表舞台に立ったのでした。
クリスマス会のとき、実は中田神父は怯んでいました。まさかと思うかもしれませんが、直前に、高校生が派手なダンスを披露してくれていたので、その直後に自分が出たら、きっとしらけてしまうに違いないと、その場を逃げ出したい気分だったのです。
幸いに、飛び入りで演歌を歌ってくれる人が現れて、ひとまず会場が落ち着きました。あー、これだったらと安心して休憩時間の余興をしたのです。もし逃げ出していたら、クリスマス会としては成立したでしょうが、二度と出演依頼は来なくなっていたことでしょう。
あの場面で神がわたしに教えたかったことは、立ち去ることではなく、舞台に立つことでした。舞台に立ち、「神は救う」ということを証しなさいと、わたしの背中を押してくれたのです。全ての出演者に、「神は救う」ということを信じる。そうすれば、神は確かに救ってくださるのだと、教えてくれたのではないでしょうか。
今週の福音朗読から見えてくるヨセフの姿は、マリアと、マリアが聖霊によって身ごもった子を受け入れる姿ですが、それは言い換えると、「イエス」「神は救う」ということと、「インマヌエル」「神は我々と共におられる」という神が示された人間への招きを、全面的に受け入れる姿でもあります。
同じことは、ご降誕を前にしてわたしたちにも求められています。クリスマスの飾り付けを見て、「イエス」「神は救う」ということと、「インマヌエル」「神は我々と共におられる」という招きに、「そうです。その通りです」と、高らかに賛美の声を上げて欲しいのです。わたしたちはあなたを待ち望んでいますと、声にして欲しいのです。もっと言えば、生活の中でも、同じ呼びかけに応えることが求められているのです。怖気づいて、人々の前で信仰を表わすことにためらいを感じるとき、「神は我々と共におられる」と、自分に言い聞かせて欲しいのです。幼子イエスが、あなたのそばにいてくれるのは、何も教会の中だけではないはずです。
幸い、今日は青方で、街頭募金が繰り広げられます。大きな声で、人々にカトリック教会の活動の一端を、知らせるまたとないチャンスです。声をかける相手に尻込みしそうになるかもしれません。そんなときはぜひ自分の心に、「イエス」「神は救う」「インマヌエル」「神は我々と共におられる」と言い聞かせて欲しいと思います。
今日主の天使によって示された招きが、ヨセフに勇気を与えたように、わたしたちも信仰を大胆に証するための勇気として与えられるように、ミサの中で願っていきましょう。

主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

あなたがたは乳飲み子を見つけるであろう

主の降誕、おめでとうございます。司祭になって初めて、生まれ故郷の上五島でクリスマスを迎えました。想像もしなかったことです。幼いころ、眠い目をこすりながら、この日の夜半のミサに連れて行かれたことを思い出しました。
今年のクリスマスを祝うに当たって、次の箇所を取り上げたいと思います。「あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。」（2・12）何も、驚くような箇所ではないのですが、あらためて考える材料を見つけましたので、今年、みなさんと分かち合いたいのです。
「あなたがたは…見つけるであろう。」これは、あらためて考えると、簡単なようで、そう簡単ではないと思いました。多くの羊を、牧草を探しながら転々としている羊飼いが、飼い葉桶に寝ている乳飲み子を見つけ出すというのです。
浜串小教区の小学生、ざっと 20 人ほどですが、この小学生をわたしが例えば桐とか、奈良尾とかまで連れて行って、生まれたばかりの赤ちゃんを確実に見つけることができるかと考えるとき、そう簡単ではないぞとすぐに感じます。
20 人を連れて、指示された乳飲み子を見つけようとしても、一緒に連れまわっている 20 人の心配もあります。乳飲み子がその土地でたった１人であれば見つけやすいでしょうが、何人かいたなら、その中のどの乳飲み子が、目当ての子なのでしょうか。
のちに占星術の学者たちが訪ねに行きますが、その時は星の導きがあったとされています。けれども、羊飼いたちには星の導きがあったとは書かれていません。わたしたちが昔そうであったように、牛を１頭飼っているとか、山羊を１頭飼っているとかいう家はざらにあったわけですから、家畜小屋を探すといってもそうたやすいことではなかったでしょう。どのようにして、救い主に出会うことができたのでしょうか。もし、羊飼いの方から幼子を見つけるのが難しいのであれば、人となられた神が、羊飼いを招いたのではないでしょうか。神が、羊飼いを導き、布にくるまって飼い葉桶に寝かされている乳飲み子を見つけたのではないでしょうか。
そう考えて、もう一度天使の言葉を思い出してみましょう。「あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。」まるで、必ず見つけることになっていると、言っているようです。本来は、人間の側から必ず見つけるとは言えないはずです。だとすれば、羊飼いたちが必ず見つける理由があるはずです。
わたしは、それは出来事への深い信頼と、素直に受け入れる謙虚さだと思います。天使が告げた出来事はきっとどこかで起こったのだから、そこに行こう。わたしたちが見つけることができなくても、きっとわたしたちを導いてくれるはずだ。そこまでの信頼があったので、導かれて、

その目で出来事を見ることができたのではないでしょうか。のちに訪ねてくる占星術の学者たちも、深い信頼と、謙虚さがあったので、導かれて救い主を見出したのです。
この考え方を、わたしたちにも当てはめてみましょう。わたしたちは、救い主を自分の力で見つけ出すことができるかと言うと、実はそうでもないということになります。クリスマスがやってきました。それでも、全員が救い主にたどりつくわけではないのです。自分で探しだすのではなく、導かれた人たちが、たどり着くということです。救い主はおいでになり、わたしを導いて出会わせてくれる。深い信頼と、謙虚な心を準備して来た人たちが、導かれていくのです。
今日、みなさんの多くが、馬小屋の前で祈りをささげていくでしょう。できればそのお祈りの中に、自分が導かれてここに来たことを、感謝する気持ちを付けくわえてほしいと思います。自分の力で、馬小屋を見つけて幼子にあいさつをしているのではありません。もし、そんな気持ちだったら、救い主の前に来ても、「やあこんにちは」くらいのあいさつしかできないでしょう。
「おいでになった救い主に、感謝します」とあいさつできるためには、自分が導かれてここに来たという気持ちが必要です。馬小屋の前に跪くのが当り前ではなく、導かれてひざまずくことができたという感謝につながってほしいものです。
最後に、この馬小屋の中で、布にくるまれて飼い葉桶に寝かされている幼子に導かれる人が、もっとたくさん増えることを考えましょう。きっと、まだ導かれて、この馬小屋の前までたどり着いていない人がいるはずです。そんな人たちのために、あなたは何ができるでしょうか。直接、この馬小屋の前に、誘ってあげることもできます。あるいは、家庭に招待して、家庭で飾っている馬小屋に誘ってあげることもできるでしょう。来年のクリスマスに向けて、わたしは誰を、新しく導いて救い主の前に紹介できるでしょうか。もし１人でも、幼子の前に新しい人を導くことができるなら、それこそが、わたしたちにとってのイエスさまへの最高の贈り物だと思います。

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた

あらためて、ご降誕おめでとうございます。今日、25 日の主の降誕（日中）のミサは、高井旅教会が 24 日に回ったために、浜串教会だけの特別なミサとなりました。今日は土曜日なので、高井旅教会は避けてほしいということでした。
さて、今日の福音はヨハネ福音書の書き出しの部分なのですが、この部分から、お生まれになった神の子、救い主イエスについて黙想したいと思います。特に、「言（ことば）」について思いめぐらしながら、与えられた個所から、お生まれになった救い主に近づくことにしましょう。
降誕の出来事と、今日の朗読箇所がいちばん結びつくのは、「言（ことば）は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」（1・14）という箇所でしょう。少しずつ見ていくと、「言（ことば）は肉となった」「言（ことば）はわたしたちの間に宿られた」に分けることができます。
「言（ことば）は肉となった」これをわかりやすく言うと、「言（ことば）はわたしたちと同じ姿になられた」ということです。目で見、触れることができるようになりました。旧約聖書の時代から、神がおられることは疑いのないことでしたが、その神が、信じる人にとっては「今ここにおられる」と言えるようになったわけです。
また、わたしたちと同じ肉となったとすれば、働きすぎれば疲れるし、眠くもなるし、弱ったりする、限界のある姿になられたということです。人間の、限界ある姿も、十分に理解してくださる方となりました。
言（ことば）は、わたしたちの間に宿られます。人間社会の真ん中に、とどまってくださいます。喜びがあり、悲しみがあり、さまざまな思いが混じり合っている人間社会の中に宿りました。
だれもが清くありたいと願っていますが、中には悪に手を染めた人もいます。人間は神がつくられた被造物の中で最高の存在ですが、それでも神にそむく生き方を選ぶ人もいます。そんな、不完全な人間の間に、宿られたのです。こうして、言（ことば）は肉となることで、人間のすべてをその身で感じることになります。
そして、言（ことば）の内に命があります。肉の命だけでなく、滅びることのない、永遠の命があります。言（ことば）が肉となってくださったことで、人間はこの永遠の命を知り、触れることができるようになりました。それはまるで、暗闇を照らす光のようで、世界のすべてを照らしだします。
このような、言（ことば）によってあらわされた素晴らしさが、馬小屋に眠る幼子の中におさめられているのです。たくさんの言い表し方をしましたが、すべてを思い出すことができなくても、何か一つでも思い起こして、馬小屋に眠る幼子を見つめてほしいと思います。「言（ことば）は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」ヨハネ福音書のメッセージが、この馬小屋の中にすべて実現しているのです。
さらにわたしたちは、この幼子の向こうにあるものにも思いを巡らしま

す。幼子はこれから成長し、わたしたちに神の愛を示していきます。神の愛深さ、憐み深さ、ゆるしの深さを、人間があっと驚く形で示してくださいます。それは命を与えるほどの、人間のために死んで復活するほどの愛です。ヨハネ福音記者が大胆に描いた「肉となった言（ことば）」を、馬小屋の幼子を通して今日一日味わいましょう。

聖家族（マタイ 2:13-15,19-23）

聖家族(マタイ 2:13-15,19-23)

聖家族に倣い、神の望みに忠実に応える

ご降誕直後の日曜日は、聖家族を祝う日です。聖家族の姿からわたしたち家族の模範を見つけ出し、生活に結び付けていきましょう。まず、聖家族に与えられた難問を、ヨセフを中心にしてどのように乗り越えていったか見てみましょう。
ヨセフは、自分たち家族に迫っている危険を知ります。主の天使が夢でヨセフに現れて言いました。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」（2・13）
主の天使が夢でヨセフに現れたというのですが、夢に何かが現れるというのは珍しいことではありません。わたしも夢で、マリアさまが現れたことがありましたし、泊まるために出かけていた母方の祖母の家で最後の晩餐の動いている場面を見て、「額縁の絵が動いている。確かに動いたのを見た」とその場にいる家族を起こして、驚かせたこともありました。
ヨセフは、主の天使が夢に現れ、危険が迫っていることを知らされると、起きて、夜のうちにエジプトに避難しました。妻マリアに相談するわけでもなく、すぐに行動を起こしたのです。その決断は間違っていませんでした。
ヨセフの行動が正しかったことは、その後ヘロデが「ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。」（2・16）という事実でわかります。主の天使が夢に現れたことを疑ってかかることも可能ですが、それよりも大事なことは、危険を感じた時、すぐに行動を起こしたということです。
同じような場面がもう一度巡ってきます。主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れました。「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」（2・20）この時も、「ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た。」（2・21）となっています。主の天使を通じて与えられた神の呼びかけに、すぐに応えたのです。
聖家族がエジプトに避難し、エジプトからイスラエルの地へ帰って来たことで、幼子は命の危険から守られました。実際には聖家族がイスラエルの地に帰った時、もう一度夢でお告げがあって、ガリラヤのナザレに住み、難を逃れました。
ヨセフの取った行動からわかることは、さまざまな危険や環境の変化に、神の導きに従って応答することで、家族が守られるということです。
ここまで来ると、わたしが皆さんに求めたいこともはっきりわかります。わたしたち家族は、神の望みに応えることで、さまざまな危険から守られるということです。ヨセフが聖家族を守るために、すぐに行動を起こしたように、わたしたちも神が望んでいることに、すぐに耳を傾ける必要があります。

先ほどから、神の望みとか、神の呼びかけと言っていますが、それは一体どんなものなのでしょうか。果たして今の時代に、神の望み、呼びかけはわたしたちの耳に聞こえるものなのでしょうか。
例を挙げたいと思います。真手ノ浦教会は、古くなった司祭館と教会を取り壊し、まったく新しい建物を建てました。12 月 23 日に献堂式をしたことも、みなさん御存知のことでしょう。建て替えか、修理か。真手ノ浦教会の信徒はずいぶん悩んだのではないでしょうか。
おそらく、建て替えるにしても修理するにしても、どちらにも良い点と問題点があるはずです。最終的に建て替えて、新しい歩みを始めることにしました。ここに、神の望みが働いていたのではないでしょうか。神の望みに真剣に耳を傾けた結果、立派な教会と司祭館が与えられたのではないかと思います。
また、青砂ヶ浦教会は現在の教会が建てられて 100 年を迎え、10 月 17 日に 100 周年を祝いました。1910 年 10 月 17 日に献堂された教会を、2010 年 10 月 17 日に祝ったと聞いています。ここでも、どのように 100 周年を祝うか、いろんな考えがあって、意見をまとめるのは大変だっただろうと思うのです。
それでも、最終的に素晴らしい献堂 100 周年の記念行事を実行することができました。これも、神の望みに全員が耳を傾け、全員が同じ意見ではないとしても、全員が耳を傾けた結果として、神の望みに応えることができたのではないでしょうか。
このように、上五島のすぐ近くの教会でも、神の望みに忠実に応えるかどうかを試される場面がやって来ています。わたしたちにも、遠からず同じような場面がやってきます。さまざまな考え方が噴出して、意見がぶつかることもあるかもしれません。それでも、神の望みに忠実に応えようと全員が望むならば、必ず良い方向に向かっていくのではないでしょうか。
聖家族に忍び寄っていた危険は、家長であるヨセフが神の望みに迅速に、そして忠実に従ったことで避けることができました。ヨセフが神の望みに忠実に応えたので、聖家族は危険な場所から、神の望む場所に移り住みました。
わたしたちも同じことです。重大な局面がやって来た時、信仰生活の危機から平和に満ちた状態に移るためには、速やかに神の望みに応えることが必要です。それはまず、身近な家族から始まり、神の家族である教会共同体もまた、同じ態度が求められています。
聖家族が、どのようにして幼子の命を守り、神の望みに応えていったかを今週の福音朗読から学び、わたしたちも、神の望みに速やかに応えようとの思いを新たにしましょう。もうすぐやって来る 2011 年を、聖家族の模範に倣って迎えることができるように、このミサの中で祈ることにいたしましょう。

神の母聖マリア（ルカ 2:16-21）